

沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（I）

－南部編－

2001年（平成13年）3月

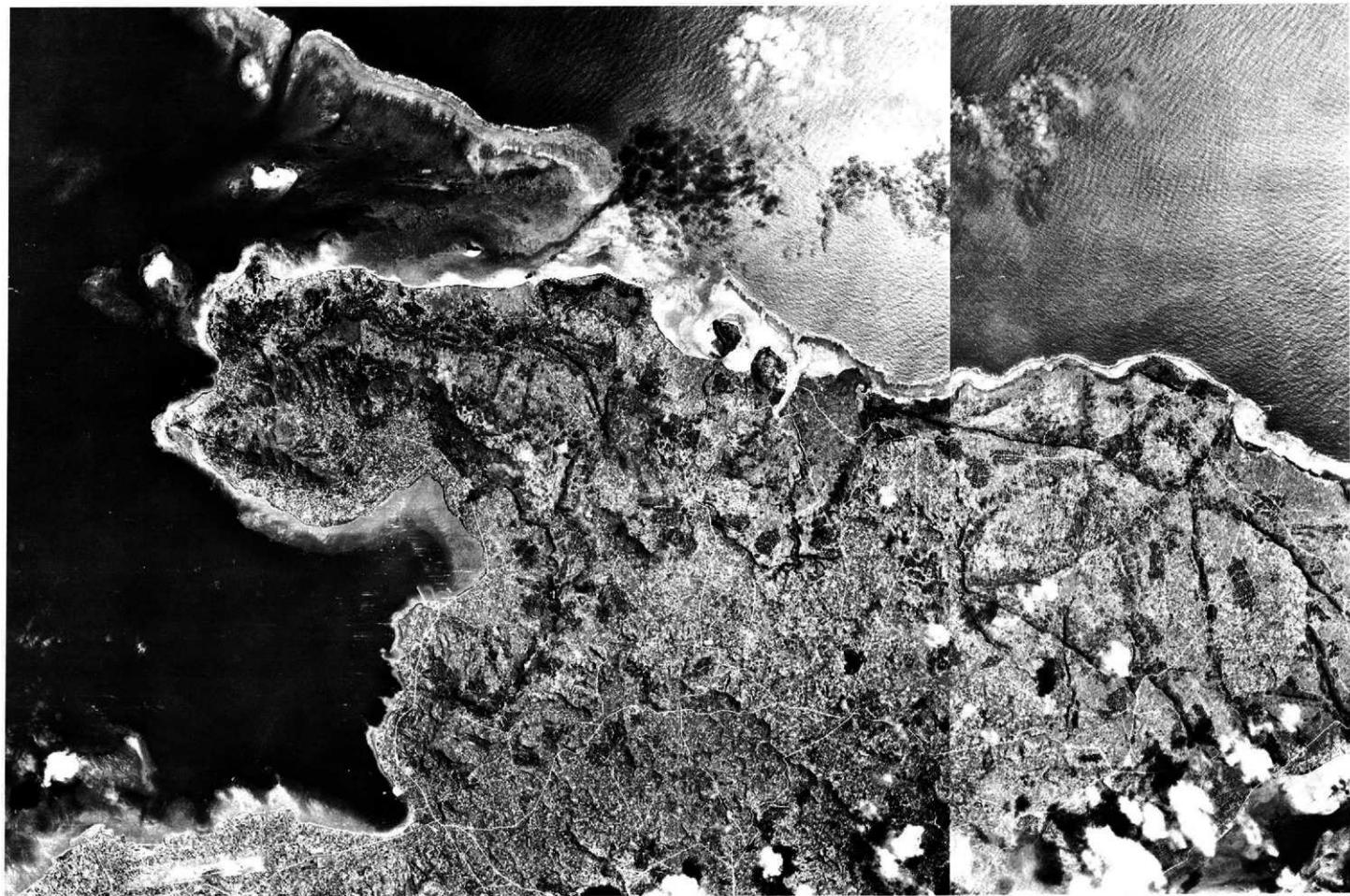
沖縄県立埋蔵文化財センター



名城の水タンク跡弾痕



与座24師団トーチカ跡



南部一帯（豊見城方面を除く）米軍撮影航空写真（1944年11月29日）

序

本報告書は文化庁からの補助を受け、平成10年度から平成14年度までの5年計画で実施する予定の沖縄県戦争遺跡詳細分布調査のうち、平成10年度から平成12年度迄に実施した沖縄本島南部地区における調査結果をまとめたものです。

沖縄県は古より沖縄戦において多くの住民を巻き込んだ地上戦が展開され、多くの尊い命や財産が失われました。さらに、沖縄の歴史や文化を理解する上で、重要な建造物や遺跡などの貴重な文化財も数多く破壊されました。

さて、沖縄諸島及び宮古・八重山諸島の島々には激戦を物語る多くの戦争遺跡が残されています。これらの戦争遺跡については、これまで全県的な調査が行なれたことはありません。したがって、文化財としての位置付けや保存の状況については把握されておりません。

これらの戦争遺跡は、近年、急速な諸開発事業によって、文化財としての評価が定まらないまま破壊され、または破壊の危機に晒されているのが現状です。

戦後半世紀が経ち、戦争体験者が高齢化していく中で、自らの体験を語り継ぐ人々が年々減少しております。沖縄にいま残る戦争遺跡は、すなわち「モノ」は「人」に代わって戦争の事実を伝える「語り部」となり得るし、そういう手法が求められているのです。

平成10年度より実施しております沖縄県戦争遺跡詳細分布調査では、県内全域において悉皆調査を進めております。

全県的な分布調査の成果は、諸開発事業との保存のための調整を行うとともに、文化財としての保存と活用を図ることによって、歴史学習・平和教育などにつなげていくための基礎資料等を作成することに役立つものと思われます。

本報告書が文化財保護思想の普及や地域文化財への关心、並びに歴史に対する理解と認識を深めて、多方面にご活用戴ければ幸いに存じます。

末尾になりましたが調査に際しましては、南部地区の市町村教育委員会をはじめ、聞き取り調査などにご協力を頂きました多くの方々と、本報告書をまとめるにあたり、多大なご指導ご協力を賜りました関係者各位に深く感謝いたします。

平成13年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 知念 勇



名城の水タンク跡弾痕



与座24師団トーチカ跡

例　　言

1 本報告書は、平成10年度～平成12年度に実施した戦争遺跡詳細分布調査（南部地区）の成果を収録したものである。

2 本調査は、文化庁からの補助を受け、沖縄県教育委員会が主体となって行った。

3 執筆者は次のとおりである。また、編集作業は県立埋蔵文化財センター職員、委嘱調査員及び資料整理作業員の協力を得て川元が中心に行った。

川元 哲哉 第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅳ章5節

吉川 由紀 第Ⅲ章、第Ⅳ章1節・8節・9節

地主園 亮 第Ⅳ章2節・3節・4節・6節・7節・10節、第Ⅴ章

4 本報告書に使用した航空写真は国土地理院所蔵のものである。また、位置図、遺跡分布図は南部地区各市町村発行の10,000分の1（調整図）を複製、転用した。

5 附録として遺跡分布図及び遺跡一覧表を掲載した。

6 遺跡分布図には、踏査で確認されている戦前の記念碑等も戦争遺跡としてプロットした。

7 本調査において、南部地区各市町村教育委員会、地域史協議会機関及び関係者等の協力のもと、円滑な調査を実施することができた。記して感謝申し上げます。

8 本調査で得られた実測図、写真などの資料はすべて沖縄県立埋蔵文化財センターに保管している。

9 本報告書第Ⅳ章の各遺跡の形態は、自然洞穴、人工壕、構築物、その他とした。

10 本報告書第Ⅳ章の各遺跡の種別は、遺跡の用途が判明している限り詳しく記した。

目 次

卷首図版

序

例 言

第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節. 調査に至る経緯	1
第2節. 調査体制	1
第3節. 調査経過	3
第Ⅱ章 地理的・歴史的環境	4
第1節. 地理的環境	4
第2節. 歴史的環境	6
第Ⅲ章 沖縄戦	8
第1節. 第32軍の創設	8
第2節. 陣地構築と県民総動員体制の確立	8
第3節. 米軍の上陸と沖縄本島南部の戦闘	9
第4節. 沖縄戦と戦争遺跡	10
第Ⅳ章 各市町村における戦争遺跡	11
第1節. 糸溝市	13
第2節. 南風原町	51
第3節. 東風平町	59
第4節. 与那原町	65
第5節. 佐敷町	69
第6節. 豊見城村	75
第7節. 具志頭村	87
第8節. 大里村	99
第9節. 玉城村	103
第10節. 知念村	113
第Ⅴ章調査の成果	120

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

平成7（1995）年3月文化庁によって『特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準』が改正され、その中の「史跡」の項目に「戦跡その他戦争に関する遺跡」が加えられた。この改正に伴い、史跡年代の制約枠として、第二次世界大戦終結頃までも含まれることになり、太平洋戦における戦争遺跡も史跡として指定することが可能になった。広島の原爆ドームが国指定の史跡指定をうけ、平成8（1996）年にユネスコ世界遺産に登録されたように、戦争遺跡を文化財として次世代に伝えることの必要性が全国的に認められたのである。

沖縄県内では、太平洋戦争（特に沖縄戦）によって、多くの一般住民を巻き込んだ熾烈な戦闘が展開された。そのため多くの人命と共に、貴重な文化遺産が破壊されたという歴史を今もなお多くの県民が共有している。

特に、沖縄本島南部地区は、沖縄戦最後の戦場であり、多くの戦争の爪跡である戦争遺跡が残されている。これらの戦争遺跡で、沖縄戦の諸相を次世代に伝えるための平和教育が実地体験学習等を通して試みられている。

しかし、これら戦争遺跡に対する関心の高まりにもかかわらず、戦争遺跡をどのように文化財として調査・研究するのかという検討は必ずしも充分ではなかった。

このような現状認識をふまえ、本調査は南部地区全域を網羅した悉皆調査とともに、個別的な詳細調査を実施し、戦争遺跡の現状を把握することによって、（1）文化財指定及びその保存に向けての資料（2）諸開発事業から保護するための資料（3）歴史学習・平和教育等への戦争遺跡の活用に供する基礎資料を作成することに努めた。

第2節 調査体制

現地調査（平成10年度・平成11年度）から資料整理及び報告書の刊行（平成12年度）まで、下記の体制で実施した。また、各市町村教育委員会、地域史協議会機関及び関係者からの協力を隨時得ることができた。

調査主体	沖縄県教育委員会
教育長	安室 肇（平成10年度）
"	翁長 良盛（平成11年度～平成12年度）
文化課 課長	大城 将保（平成10年度）
" "	當眞 創一（平成11年度）
" 副参事兼課長補佐	稲嶺 靖子（平成10年度）
" 課長補佐	當眞 創一（平成10年度）
" "	名嘉 政修・千木良 芳範（平成11年度）
埋蔵文化財センター 所長	知念 勇（平成12年度）
" 副所長兼庶務課長	知念 廣義 "

調査事務

文化課管理係主幹兼係長	大浜 節	(平成10年度～平成11年度)
" 主査	村山 佐代	(平成10年度)
" "	砂川 邦子	(平成10年度～平成11年度)
" "	當間 清美	(平成11年度)
" 主事	横山 さゆり	(平成11年度)
埋蔵文化財センター庶務課主事	上原 浩	(平成12年度)
" "	城間 千賀	"

委嘱調査員

(財) 沖縄県文化振興会	主 幹 吉浜 忍	(平成11年度～平成12年度)
公文書管理部史料編集室	嘱託員 地主闇 亮	"
" "	助教授 村上 有慶	"
沖縄職業能力開発専修学校	教 授 池田 栄史	(平成11年度)
琉球大学法文学部	副主幹 恩河 尚	(平成12年度)
沖縄市経済文化部文化振興課		

調査総括

文化課埋蔵文化財係長	島袋 洋	(平成10年度～平成11年度)
" 指導主事	田場 健章	(平成10年度)
" "	嘉手苅 徹	(平成11年度)
" 主 任	長嶺 均	(平成10年度～平成11年度)
埋蔵文化財センター調査課 課長	島袋 洋	(平成12年度)
" " 主任	長嶺 均	"
" " 主事	川元 哲哉	"

調査作業員及び協力者

伊集ゆきの	島當 ハル	・玉城 カツ	・長嶺 盛信	・大城 武雄	・青山 泰緒
與那国充子	・川瀬 拓也	・新里 彩	・長崎 智子	・伊禮 利香	・玉城 志奈子
阿波根直孝	・中村 徳弘	・屋比久木雄	・新垣 源勇	・中村 康雄	・屋宜 宣孝
島袋 良徳	・当銘 保一	・大城 和也	・新垣喜三郎	・新垣 栄吉	・伊敷 タマ
新垣 ハツ	・古波藏和枝	・翁長 幸一	・山城 ヨシ	・太田由喜子	・福元 ツル
田崎 芳子	・上原 利子	・友利 恵勇	・仲宗根将二	・下地 康夫	・石垣 金星
玉江 稔	・金城 弘和	・金城 安子	・金城 春子	・玉城 ナヘ	・川満 昭広
吉川 由紀	・久保田有美	・山内すず子	・金城 直哉	・大城牧子	・當山キヨ
金城勇光	・仲村康夫	・喜舎場功	・山入端宏正	・矢沢 秀雄	・安座間 充
城間 肇	・藤崎 京	・新垣 力	・知念 隆博	・又吉 純子	・荻堂 美香
佐和田 美和子					

第3節 調査経過

今回の分布調査は、平成10年度～平成14年度にかけての本事業の内、南部地区10市町村を調査対象にした。初年度である平成10年度に分布調査、平成11年度に調査員を委嘱しての調査員会議及び補足調査、そして、平成12年度に資料整理及び補足聞き取り調査等をそれぞれ実施した。年度ごとの概要は以下のとおりである。

－平成10年度－

南部10市町村の教育委員会に対してアンケート調査を実施。各市町村における戦争遺跡数の状況把握にバラつきがあることを確認した。次に各市町村の文化財担当者に各市町村内の主な戦争遺跡をリストアップしてもらい、共に分布調査を実施した。その際、遺跡所在地の確認と各遺跡の写真撮影を実施し、約120箇所の現地確認を行った。

しかし、調査要綱の明文化がなく、調査方法において試行錯誤せざるえない状況になった。

－平成11年度－

平成10年度の反省を踏まえて、調査要綱を作成し、調査員会議を設置した。戦争遺跡に造詣の深い有識者に辞令を交付し計6回にわたり現地調査を含む調査員会議を開催。遺跡数の多い糸満市をサンプル調査地に設定し、前年度の補足調査を行った。この調査により、糸満市内において把握した遺跡数は458であった。その他市町村においても順次悉皆調査することになった。

152

－平成12年度－

平成10年度と平成11年度の調査成果の資料整理を行った。潮平権現と24師団司令部壕（ともに糸満市）について、聞き取り調査を実施し、両遺跡の情報の補填を行った。特に必要な戦争遺跡についての遺構図測量を随時行った。また、4回に及ぶ調査員会議において、戦争遺跡の遺構・遺物の保存状況、希少価値、役割・歴史的背景などを議論し、報告書の内容及び編集に反映させた。

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

本報告書における調査対象地域である南部地区とは、沖縄本島の南部に位置し、北は那覇市及び中頭郡に接し、東南は太平洋に、西は東シナ海に面している地域で、離島町村を除く島尻郡及び糸満市を指すものである。

南部地区的市町村総面積は約155平方kmで沖縄県全体の約6.8%を占めている。なお、各市町村の面積・人口は表1-1のとおりである。

南部地区的地形は、3つの河川（鏡波川・報得川・雄樋川）によって隔てることにより、四地帯に分けることができる。

北部地帯 鏡波川及びその発源地と与那原町字与那原とを結んだ線の以北

東北部地帯 雄樋川及びその発源地と鏡波川発源地、南風原とを結ぶ線

西南部地帯 報得川及びその発源地と雄樋川発源地とを結び、雄樋川とによって囲まれた地域

西北部地帯 鏡波川及びその発源地と雄樋川・報得川両川の発源地とを結び報得川とによって囲まれた地域

各地帯について、それぞれ述べることにする。

北部地帯には鏡波川北岸に沿い、連なる細長い丘陵帯があり、国場川の南の一流とこれらの丘陵帯の間に縱谷を形成し河岸に一帯の平野をつくる。中城湾沿岸の運玉森丘陵帯を北端として、南は南風原町津嘉山、東は大里村平良、西は豊見城村金良にまたがる地帯である。

東北部地帯は南に知念半島の宿納山附近から太平洋海岸に沿って、玉城村前川以西の白水川左岸に連なる長大な丘陵帯があり、南部地区的最高所である糸数城跡もこの地帯に聳立している。北は馬天港海岸に沿って、与那原附近まで連なる丘陵帯がある。この南北丘陵帯の中間は狭小な平野をなし、雄樋川は東北部・西南部の両地帯の丘陵の間を流れる。

西南部地帯には、雄樋川右岸から太平洋海岸に沿って糸満市喜屋式に連なる丘陵帯があり、これと平行して東風平町富盛・世名城から糸満市真栄里・小波蔵に跨る丘陵帯がある。その丘陵帯の間に位置するのが、南部地区第二位・第三位の高峰である与座岳・八重瀬岳である。

西北部地帯の南には報得川北岸に沿って大里村稲嶺から東風平町志多泊を経て糸満市座波・阿波根に跨る丘陵帯がある。またこの丘陵帯の西北にも豊見城城跡・豊見城・那覇市宇栄原に跨る丘陵帯がある。両丘陵帯と北部地帯の丘陵帯との間を鏡波川が縱谷をなして流れ、河岸には一帯の平野をつくる。

（参考文献）

島尻郡教育部会員編『島尻郡誌』島尻郡教育部会員 1937年

「島尻郡誌（統）」編集委員会編『島尻郡誌（統）』「島尻郡誌（統）」編集委員会 1981年

『沖縄県地図と地理』海邦出版 1981年

南部広域市町村圏事務組合編『南部広域行政圈計画実施計画』南部広域市町村圏事務組合編1993年

市町村名	人口	面積
沖縄県	1,325,514	2267.48
南部地区	261,811	155.01
糸満市	55,541	45.84
豊見城村	49,348	※ 17.78
東風平町	17,051	14.79
貝志頭村	7,710	12.11
玉城村	10,535	16.84
知念村	5,920	9.72
佐敷町	11,542	10.60
与那原町	15,140	4.26
大里村	11,677	12.35
南風原町	32,347	10.72

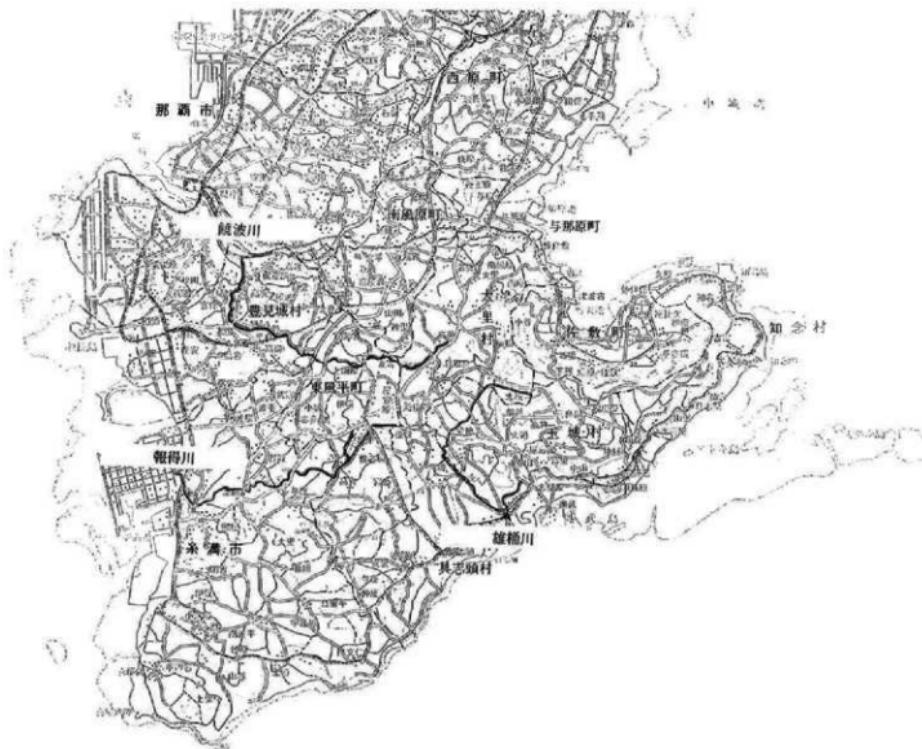
表1-1 南部地区各市町村の面積と人口

（平成13年3月1日現在）

※那覇市との境界線における一部未定地を除く

沖縄県企画開発部統計資料閲覧室

備



南部地区現状図

第2節. 歴史的環境

琉球諸島は、数万年前から人類が居住していた地域であることが、現在の考古学や形質人類学など様々な学問分野によって確認されている。琉球諸島の歴史は「先史時代」「古琉球」「近世琉球」「近代沖縄」「戦後沖縄」という時代区分にわけられている。この節では、先史時代から近代沖縄まで、時代区分ごとに概要を述べる。

近世以前の琉球

「先史時代」は狩猟・採集の原始的生活形態から、東アジアの盛んな交易体制に琉球諸島が組み込まれていった、数万年前から12世紀前後までの時期をさす。沖縄県において、現在までに確認された最古の人類化石は、那覇市山下町第一洞穴から発見された人骨の破片である。この人骨の破片は、約32,000年前のものとされている。

南部地域においては、全身が残る化石人骨として、貝志頭村港川フィッシャー遺跡から約18,000年前の人骨が発見されている。一般に港川人と呼ばれるこの人骨は、数体分の骨格化石が残っていることで全国的にも貴重な資料である。港川人の骨格は、琉球諸島の現代人の骨格と特徴が類似するといわれている。しかし、現代人の直接の祖先かどうかについては、様々な説が存在する。

「古琉球」は沖縄島を中心に島々の政治的統一が進み、琉球王国と呼ばれる独自の国家が存在した時代である。琉球列島で統一国家が形成される一連の過程の中で、三山（山北・山中・山南）という小国段階を経ているが、その三山の領域は必ずしも明確ではない。特に、南部地域の多くを領有していたと考えられる山南については、考古学的視点において解明されつつあるが、いまだ不明な点も多い。

「近世琉球」とは、1609年の薩摩の琉球侵入以後を指すものである。琉球は薩摩に実質的に支配されながら、幕藩体制の中の異国として上府機構の整備や身分制の確立など、琉球の独自性を構築していく。近世の農村社会では、管理栽培された貴重な特産物（サトウキビやウコン等）は王府により厳重に管理されていたが、その管理栽培地域が南部地域に集中していたことは、南部地域が農業の先進地帯として王府の財政上、重要な地域であったことを示唆するものである。

近代沖縄

「近代沖縄」は琉球王国が廃され琉球藩を経て沖縄県となった、1879年に始まるとする。一般に琉球処分といわれるこの事件は、後に首里城に駐屯することになる熊本鎮台沖縄分遣隊を中心とする武力を背景としたものであった。しかし沖縄分遣隊は、日清戦争で日本が勝利し、日本が台湾を植民地化したことにより、1896年に沖縄から撤退することになった。沖縄県の軍事的価値が著しく低下していくなかで、県内には主に微兵の収集・検査業務を行う組織である連隊区司令部のみがおかれることになった。

南部地域に目を向けると、基幹産業であるサトウキビの運搬や、地方の人々の新しい交通手段として、道路網の整備、軽便鉄道の敷設が行われるようになった。1914年に与那原線、1924年に糸満線が敷設された軽便鉄道は、近世以来、典型的な農村地域であった南部地域に、糖業の発展とともに新しい生活様式を導入するきっかけとなった。

一方で、サトウキビという単一作物に依存していた沖縄経済は、サトウキビの価格が暴落すると長期的な大不況になり、毒を有するソテツさえも食した状況を例えて「ソテツ地獄」と呼ばれる深刻な経済状況になった。本県は有数の移民県といわれ、ハワイをはじめ南米、東南アジア、南洋諸島と渡航先は多岐に渡るが、この経済不況から脱出する手段として、南部地域からも海外移民数が急増している。

1931年、「県民ノ国防思想ノ養成」「県民經濟上ノ便益ノ為」に日本軍の分遣隊・憲兵隊誘致を呼びかける「意見書」を沖縄県議会が採択したが、部隊誘致は実現せず、経済状況も改善されなかった。1944年、太平洋戦争が激化し本土防衛の最前線として沖縄に第32軍が創設されることによって、皮肉にもその部隊誘致は実現することになる。

(参考文献)

- 沖縄県教育委員会編『沖縄県史1 通史』沖縄県教育委員会 1976年
沖縄県議会事務局編『沖縄県議会史第5資料編』沖縄県議会 1984年
安里進『考古学からみた琉球史 上』ひるぎ社 1990年
安里進『考古学からみた琉球史 下』ひるぎ社 1991年
財団法人 沖縄県文化振興会公文書管理部資料編集室編『概説 沖縄の歴史と文化』沖縄県教育委員会 2000年

第Ⅲ章 沖縄戦

第1節 第32軍の創設

1941年12月に始まった太平洋戦争は、戦闘の主役を艦船から航空機へと転換させた。日本軍は開戦直後こそ戦果をあげたものの、翌年6月のミッドウェー海戦以降、敗戦を重ねることになった。1943年9月、大本営は「絶対国防圏」を設定し、前線に展開した航空隊を支援する後方部隊として、南西諸島一帯に飛行場を建設することを決めた。沖縄は、県内15ヶ所におよぶ飛行場建設が計画され、にわかに戦争準備が開始されたのである。

1944年3月、大本営直轄の第32軍が創設され日本軍の沖縄駐留が始まる。住民は飛行場建設や陣地構築に動員されるようになった。主要な飛行場は、伊江島・読谷・嘉手納・仲西（沖縄南）・西原（沖縄東）など本島中北部にあり、南部の住民は10日～2週間程度の期間、泊まり込みで動員された。また、本島南部に建設された小禄飛行場や豊見城村与根・翁長の滑走路には、自宅から徒歩で通った。おもな仕事は、滑走路に砂利を運んだり、掩体壕造りのために土を運んだりすることだったという。

1944年4月上旬～6月上旬にかけて独立混成第44旅団（球部隊）が本島中北部へ、7月から第9師団（鉄部隊）が南部地域一帯に配置された。8月に入ると、本島中部には嘉手納・読谷・具志川周辺に第24師団（山部隊）が置かれ、北谷・普天間・浦添周辺に第62師団（石部隊）が配置された。第44旅団は本島北部を守備範囲とした。多数の兵が急速配備されたため、軍の施設は不足し、学校や村屋（現在の公民館）だけでなく、民家までもが兵舎として使用されるようになった。

第2節 陣地構築と県民総動員体制の確立

県民は、飛行場建設への動員と並行して、集落周辺に駐屯する部隊の陣地構築にもかり出され、戦車断崖・戦車障礙の構築や、陣地壕構築の土運びに従事した。本島南部の住民は、当時軍司令部壕として構築が始まっていた南風原村津嘉山の壕や、豊見城村長堂の陣地壕などの構築にも動員された。国民学校の生徒たちは、勤労奉仕作業として近隣の陣地壕造りにかり出され、壕掘りで出た土を外に運び出す仕事や、壕内の柱に使う松の皮剥ぎなどをした。女子青年団員や婦人たちは地域に駐屯する部隊で炊事係として働いた。また、住民には日本軍への食糧の供出が割り当てられ、芋やキャベツを中心とした野菜や豆類などが区長の指示のもと集められた。

1944年10月10日、米軍による南西諸島一帯の大空襲により、那覇市一帯や中北部の飛行場および港湾施設は壊滅的な打撃を受けた。また、本島南部地域においては大空襲の最終第5次攻撃で糸満町字糸満が空襲され、南風原村字那覇も被害を受けた。

十・「空襲をきっかけに、県内各地で避難壕の構築が急がれた。住民は、飛行場建設や陣地壕構築への動員がない日を見はからって、家族総出で敷地内に屋敷壕の構築、集落の住民が避難できる場所として地域のガマ（自然洞穴）の整備を進めた。

1944年12月、本島南部地域に駐屯していた第9師団が台湾へ移動した。第32軍は「戦略持久作戦」に方針転換し、県内の部隊配置

1945年2月～3月末の沖縄本島配備要図



が大幅に変更されることになった。本島南部には、米軍の上陸予想地点とされる具志頭村港川と糸満を囲むように陣地が構えられ、海上挺進隊も配備された。内陸部には軍需物資を補給する糧秣・兵器廠部隊や病院部隊が置かれた。知念半島を中心に第62師団の一部、喜屋武半島を中心に第24師団が主に配備され、南風原には沖縄陸軍病院が置かれた。1945年に入つてからも部隊配置は変更を重ね、2月になると、第62師団は首里周辺に移動し、替わって知念半島には独立混成第44旅団が中部から移駐した。

不足した兵力を補うために、1944年10月から2度にわたつて17歳～45歳までの男性が防衛隊として召集された。また、男子学徒は「鉄血勤皇隊」に代表されるように、斬り込みや通信隊などの隊員として戦場勤員され、女子学徒は看護隊として沖縄陸軍病院や野戦病院に配備された。1944年7月から住民の疎開作業が進められたが、生活できる見込みのない場所へ移り住むことへの不安や、疎開船「対馬丸」遭難の噂が広まつたことなどから、疎開希望者は増えなかつた。米軍上陸時（1945年4月1日）、沖縄本島には50～60万の県民がいたと言われている。

第3節 米軍の上陸と沖縄本島南部の戦闘

1945年3月24日から、本島南部一帯には米軍による艦砲攻撃が開始された。米軍は、4月1日、本島中部の西海岸に上陸した。（兵力約18万3000名）

米軍上陸後の2ヵ月間は、軍司令部のある首里に向けて、日米両軍の激しい攻防戦が展開された。南部で陣地を構えていた第24師団や独立混成第44旅団などの部隊は、4月下旬～5月にかけて首里戦線へ兵を投入した。部隊の移動とともに、南部地域の住民は男女の別なく弾薬運びなどの危険な作業にかり出された。また首里周辺の壕・ガマに避難していた住民の中には、軍によって壕を追い出されたり、南部の陣地壕との交換を命じられ、代わりに与えられた南部の壕まで、徒步で移動する者もいた。

首里の司令部壕周辺で激しい戦闘が行われていたころ、南部は平穏そのものであったという。南部の沖合から首里へ向けて艦砲弾が打ち込まれると、住民のなかには、頭上を通り越していく砲弾を見上げながら畠仕事をした者もいた。ただ、戦線の後方にあった陸軍病院や野戦病院には、激しさを増す首里戦線から運ばれてくる大勢の負傷兵があふれかえっていた。

5月27日、第32軍司令部は南部への撤退を開始した。首里までの戦いで戦力の約6割を消耗した日本軍が、組織的な戦闘を続行するのは不可能に近かつたが、軍司令部は摩文仁にある壕に拠点を移し、残存兵力を南部一帯に集結して、なおも戦闘を続けようとした。6月4日までに、本島南部の波名城・八重瀬岳・与座岳・国吉を結ぶラインに独立混成第44旅団と第24師団が再配備され、喜屋武・山城・米須の沿岸一帯には中部戦線から撤退してきた第62師団が置かれた。南部一帯に広がるガマにも、兵が入り込み、南下してくる米軍を迎撃つことになった。この時、多くの一般住民は、中部戦線を撤退する軍隊とともに本島南部へ避難してきていた。

本島南部一帯が「激戦地」となるのは、これ以後のことである。米軍の砲爆撃は苛烈を極め、陸・海・空の三方から大量の砲弾を本島南部一帯に撃ち込んだ。一面焦土と化し、地形が一変するほどのすさまじさで、のちに「鉄の暴風」と形容された。日本軍は、ガマから住民を追い出して陣地にし、食糧の強奪などをした。ガマを追われた多くの住民は、砲爆撃のなかをさまよい、尊い生命が犠牲となつた。また、米軍は投降勧告に応じない壕内の日本兵や住民に対し、「馬乗り攻撃」を仕掛け、ガス弾なども使用した。

1945年6月23日（あるいは22日）、摩文仁の第32軍司令部壕では牛島満司令官と長勇參謀長が自決し、組織的な戦闘は終了した。しかしその後も、兵士や住民の中にはガマや壕などにたてこもる者がいた。7月2日、米軍は沖縄作戦の終了を宣言し、8月15日に日本は終戦を迎えたが、その事実を知らない者も多かった。9月7日、現嘉手納基地内において、残存兵力と米第10軍との間で降伏調印式が行われた。

第4節 沖縄戦と戦争遺跡

住民を巻き込んだ長期の戦闘が行われた沖縄には、他府県にない戦争遺跡が、戦後半世紀以上たった現在でも、県内のいたる所に残っている。これらの遺跡は、沖縄県民が戦場を彷彿い、生死に直面した場所である。また、日本軍がいかなる作戦方針のもとに部隊を配置し、戦闘を行ったか具体的に示す生き証人でもある。

沖縄に訪れ、平和学習に取り組む学生や団体の多くがガマに入り、戦場の追体験をする。彼らは、漆黒の間に身を置き、その温度を感じ、水滴の音を聞く。弾痕のある壁に触れて、爆撃のすさまじさを指先で感じる。これは、沖縄県民の戦争体験記録とともに、教育素材として価値を有する重要な歴史資料であることを意味する。

沖縄戦体験者が少くなり、沖縄戦の風化が危惧されている昨今、その実相をいかに次世代へ確実に継承していくかが緊急課題となっている。体験者が元気なうちに証言を記録していくことはもちろん、体験者と同様に戦場をくぐり抜けてきたガマなどの戦争遺跡を保存する手立てを、早急に確立することが、今求められているといえよう。

(参考文献)

- 防衛庁防衛研究所戦史室『歴史叢書沖縄方面陸軍作戦』朝雲新聞社 1968年
玉城村史編集委員会『玉城村史』玉城村役場 1977年
与那原町史編集委員会『与那原町史 序説』与那原町役場 1988年
具志頭村史編集委員会『具志頭村史 第二巻 通史編』具志頭村 1991年
糸満市史編集委員会『糸満市史 資料編7 戦時資料下巻』糸満市役所 1998年
町史編集委員会『東風平町史 戦争体験記』東風平町役場 1999年
南風原町史編集委員会『南風原町史 第3巻 戦争編グイジェスト板 南風原が語る沖縄戦』南風原町 1999年
佐敷町史編集委員会『佐敷町史 4 戦争』佐敷町役場 1999年
戦争遺跡保存全国ネットワーク『戦争遺跡は語る』かもがわブックレット 1999年

第Ⅳ章 各市町村における戦争遺跡

第1節 糸満市

山巓毛戦争遺跡群

所在地：糸満市字糸満739番地ほか

立地（標高）：丘陵中腹部、頂上部（約20m）

形態：人工構築物、人工壕

種別：民間監視哨、陣地壕、その他

現状：遺物は破損しているが、原形は判明する。

保存状況：山巓毛が都市公園化で、一部破壊

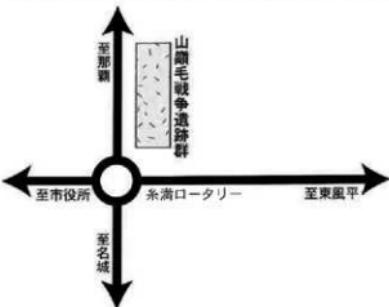
築造者：住民（頂上部遺構）、第9師団（構築壕）

築造年月日：石碑類は1932年頃、壕・監視哨は

1944～45年頃。

戦時中の使用状況：監視哨、陣地壕として使用

主な遺構：監視哨台座部分、陣地壕など



遺跡付近の見取り図

概要

山巓毛戦争遺跡群は、糸満市字糸満新組地内にある山巓毛と呼称される海拔約20mの丘陵の頂上から中腹にかけて所在する。山巓毛戦争遺跡群には、御大典記念山巓毛改修碑、国旗掲揚台、鳥居基礎部分、監視哨台座部分、軍陣地壕が残っている。

御大典記念山巓毛改修碑は、台座部分は往時の場所に残されているが、石碑部分は台座後方に転落し横たわっている。石碑は米軍上陸後、攻撃目標になるとして、第24師団によって台座から切り離されたようである。

国旗掲揚台は、コンクリート製で前面に「皇太子殿下御誕生記念 昭和九年八月一日建立」と刻銘されている。

鳥居は柱の円形状基礎部分が残っているだけである。これら石碑・鳥居等のある場所は壇状になつておらず、そのコンクリート製壁面には夥しい数の弾痕が残っていた。

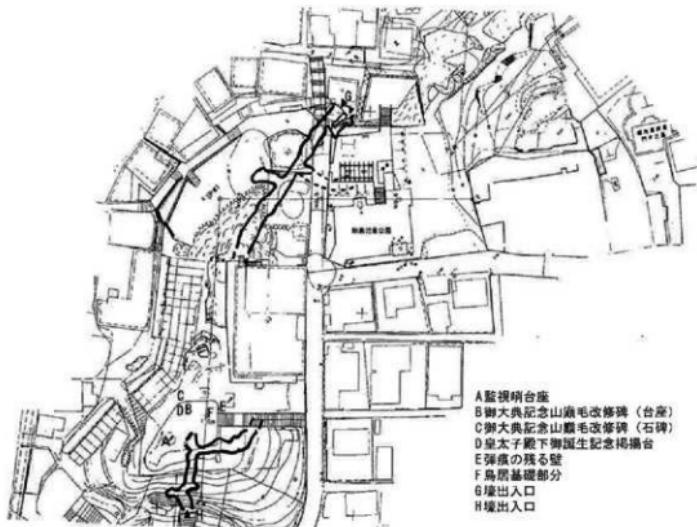
監視哨は航空機を早期に発見し、敵味方を識別して、防空機関に知らせるための施設であった。1941年の「防空監視隊令」により、臨時立哨が常時立哨となり、設備、人員なども強化された。糸満監視哨は、1943年から沖縄県内に11ヶ所設置されていた沖縄県警防諜管轄の監視哨の一つである。糸満監視哨は基礎部分が残るのみであるが、その形態は正八角形のコンクリート製構造物で、南北を主軸に八方位に窓があったと思われる。築造年は定かではないが、1942年～43年頃のようである。

山巓毛丘陵地下には、1944年頃築造された人工壕があり、南北に約100mの長さで貫通している。壕の片方の出入口は、山巓毛頂上から北側に約80mの位置ある。この壕は第9師団が構築したものである。

（参考文献）

沖縄県沖縄資料編集所『沖縄県史料 近代1 昭和十八年知事事務引継書類』沖縄県教育委員会 1978年
糸満市史編集委員会『糸満市史 資料編7 戦時資料 下巻一戦災記録・体験談-』糸満市役所 1998年

N
↓



第1図 山嶺毛戦争遺跡群平面構造図

- A監視哨台座
- B御大典記念山嶺毛改修碑（台座）
- C御大典記念山嶺毛改修碑（石碑）
- D皇子殿下御誕生記念掲揚台
- E弾薬の残る壁
- F馬鹿基礎部分
- G塹出入口
- H塹出入口

糸満市教育委員会提供



与座第24師団トーチカ跡

所在地：糸満市字与座1337番地

立地（標高）：丘陵頂上部（約90m）

形態：構築物・人工壕

種別：トーチカ跡、交通壕、軍構築壕

現状：トーチカ跡は、天井部が破損し、陣地壕の奥は落盤がはげしい。

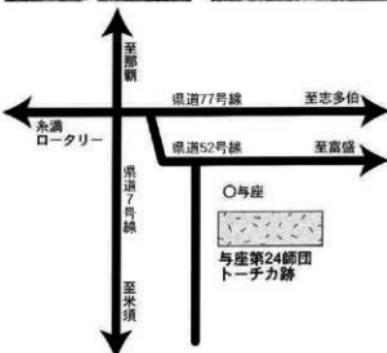
保存状況：遺構の周辺は雑木林となっており、放置されている。

築造者：不明

築造年月日：1944～45年頃

戦時中の使用状況：第24師団の陣地

主な遺構：トーチカ、交通壕、陣地壕



遺跡付近の見取図

概要

与座24師団トーチカ跡は、糸満市字与座上座原地内の南側丘陵頂上部に所在する遺構群である。与座集落は、1944年12月から第24師団の担当地域となっている。また、トーチカと交通壕で連結されているこの壕は、丘陵中腹にある第24師団司令部壕とつながっている。与座集落の住民は、24師団トーチカ跡のある丘陵地域と同一丘陵中腹にある第24師団司令部壕について、第24師団が突貫工事で築造していたと証言している。

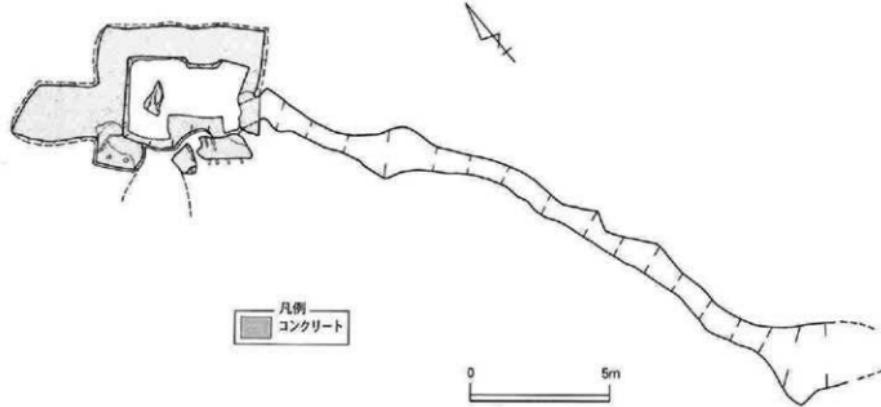
遺構は、トーチカ跡、交通壕跡、陣地壕が残存している。トーチカは、縦・横・高さがそれぞれおよそ4m・6m・2mの立方体構造物で天井部分は存在しないが、太い鉄筋が何本も配列され頑丈な造りとなっている。南面する側壁に銃眼が残っている。この銃眼は、内側が狭く、外側に向かって開く扇状穴構造となっている。また、東壁面下部には、幅約75cm、高さ35cmの交通壕へつながる出入口がある。

交通壕は、トーチカ跡の東壁面下部から、東方向に蛇行し、陣地壕へつながっている。交通壕の深さは通常1m～1.7m確保される。同交通壕は、琉球石灰岩の岩盤を溝状に掘り、北側は自然の大岩を利用した爆風除けとし、交通壕の南側には長さ約11.5mの石積みを築いている。

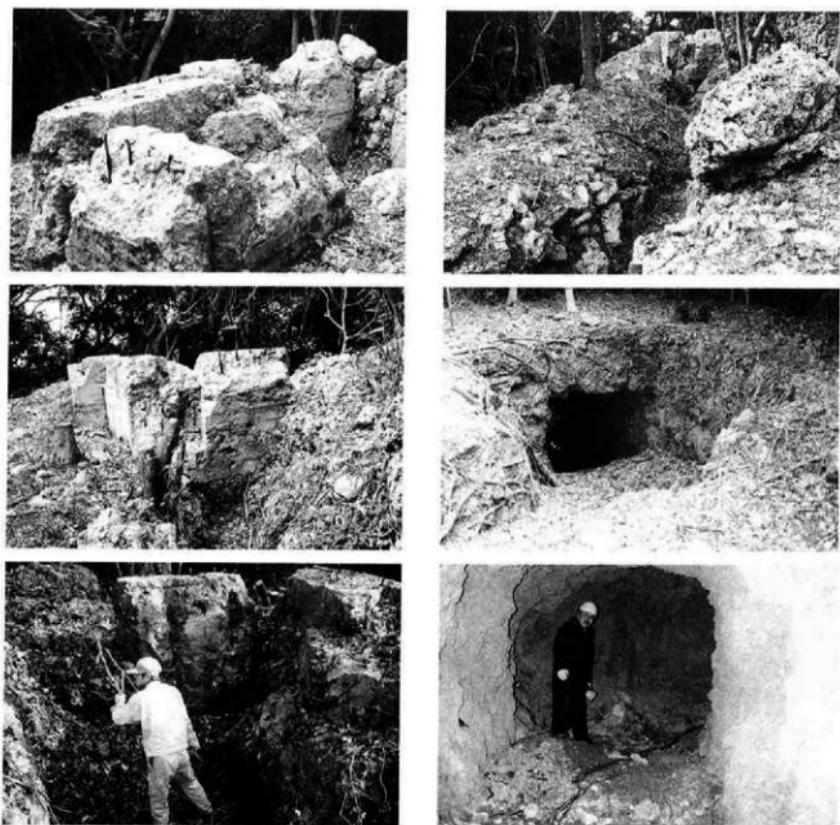
交通壕を通りて東行するとその先には陣地壕ある。入口部分は高さ約2m、幅約3mを測る。出入口周辺は急傾斜となっている。出入口から東方向に約20m進むと、通路が北方向へほぼ直角に折れ曲がっている。北方向に約20m進むと、途中で落盤している。

参考文献

防衛省防衛研修所戦史室『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』朝雲新聞社 1968年



第2図 与座第24師団トーチカ跡平面構造図



潮平権現の塙

所在地：糸満市字阿波根941-2番地

立地（標高）：丘陵（約60m）

形態：自然洞穴（一部人工塙）

種別：住民避難塙

現状：塙には当時の生活用具が残っており、
毎年旧暦5月5日には潮平権現祭が開かれる。

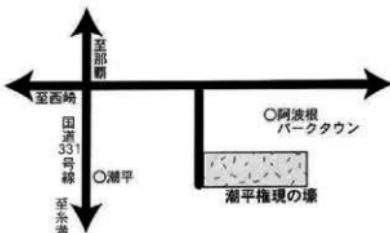
保存状況：鳥居を造り整備している。

築造者：潮平集落住民

築造年月日：1944年

戦時中の使用状況：潮平集落住民避難塙

主な遺構：自然塙部分と住民が掘り進めた構築
塙部分からなる。



遺跡付近の見取図

概要

潮平権現は潮平集落の東側丘陵に所在する。出入口を潮平地区の住民が構築した自然塙である。全長240mの貫通洞である。本塙は1944年に潮平地区住民により発見され、地区的役員が避難塙として利用できるか調査に入った。塙の出入口が1ヶ所であったため、地域住民は石工との共同作業で合計3ヶ所の出入口を設けた。潮平住民が本塙に避難したのは1944年の十・十空襲が最初で、以後、翌年3月まではほとんど利用していなかった。

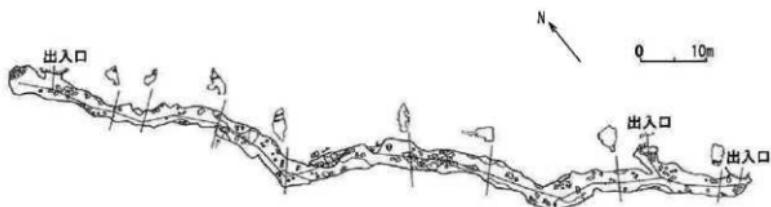
1945年3月23日、大規模な砲撃が始まるとき、潮平の住民約560名はこの塙へ避難した。戦況が逼迫する以前は、子供達は塙の上にやぐらを造るなどして遊んでいた。住民は夜になると各家庭で炊事をし、塙に戻るという生活をしていた。しかし危険になると、塙内で米を温め、生煮えの状態で食べるようになった。塙内での炊きの時には煙が充満するため、住民は地面に這いつくばって2~3時間我慢するしかなかった。排泄は塙内的一角にトイレを設け、そこで済ませていた。塙内の衛生状態は極端に悪かった。

5月中旬頃、住民は、塙内に入ってきた3名の日本兵に「この塙を日本軍の陣地として明け渡せ」と命令された。対応した区長が苦慮していると、一人の日本兵が自分の腕を切り、流れる血を茶碗に溜めて、兵隊の血を飲んで協力するよう強要した。一部の住民は血を飲まされ、全員が塙から追い出されることになった。しかし翌日、住民の一人が塙を覗いたところ誰も入っていないことが分かり、一週間ほどの間に全員がこの塙に戻った。

6月14日（旧暦5月5日）、潮平住民は米軍によって全員無事保護された。この日を記念して後世に伝えるため、潮平権現に鳥居と権現之碑を建立し、毎年旧暦5月5日に潮平権現祭を行うようになった。この塙は、地域の学校の平和学習に利用されている。

(証言者)

玉江稔さん、金城弘さん



第3図 潮平権現の塙

日本大学探検部『沖縄本島洞窟探検隊』1996年 より
麻布大学探検部



座波迫撃砲陣地跡

所在地：糸満市字座波300番地

立地（標高）：丘陵頂上部（約65m）

形態：人工塹

種別：迫撃砲陣地

現状：迫撃砲陣地の掩体部分に土砂が若干堆積しているが、残り具合は良好である。

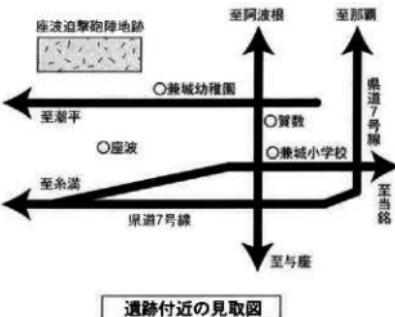
保存状況：雑木林の中にあり、放置されている。

築造者：独立迫撃砲第9中隊

築造年月日：1944～45年

戦時中の使用状況：独立迫撃砲第9中隊が迫撃砲陣地として使用。

主な遺構：すり鉢状の縦穴と横穴を3カ所で確認



概要

座波迫撃砲陣地跡は、字座波集落北側の丘陵中に位置する。近傍には座波住民が拝所としている「みるく神うたき」、「かにまん門」がある。また、周辺には古墓もなく、集落内でも神聖な場所の1つとなっている。

独立迫撃砲第9中隊は、本部を糸満市に置き陣地構築を行っていた。第9中隊は、糸満市座波、豊見城村小禄、宜野湾市我如占、嘉数で陣地構築を行っている。1945年1月7日時点での座波の陣地において破壊体が12カ所と計画通り完成しており、交通壕、観測所はそれぞれ20～25%完成していた。

今回調査した迫撃砲陣地の遺構は、すり鉢状の縦穴部分とそれと連結された坑道が3mほどあった。このような遺構は、3カ所確認できた。すり鉢状の掘り込み部分の縁辺部には人頭大の石積みを巡らせており、この遺構は、迫撃砲陣地の掩体部分にあたり、それと連結された壕は弾薬等の一時保管用ではなかったかと思われる。

座波の陣地跡には交通壕らしき遺構がほとんど確認できない。また、陣中日誌においても座波の陣地に関する記述は出てこなくなる。このことからこの陣地は構築途中で破棄されたのではないかと思われる。

参考史料

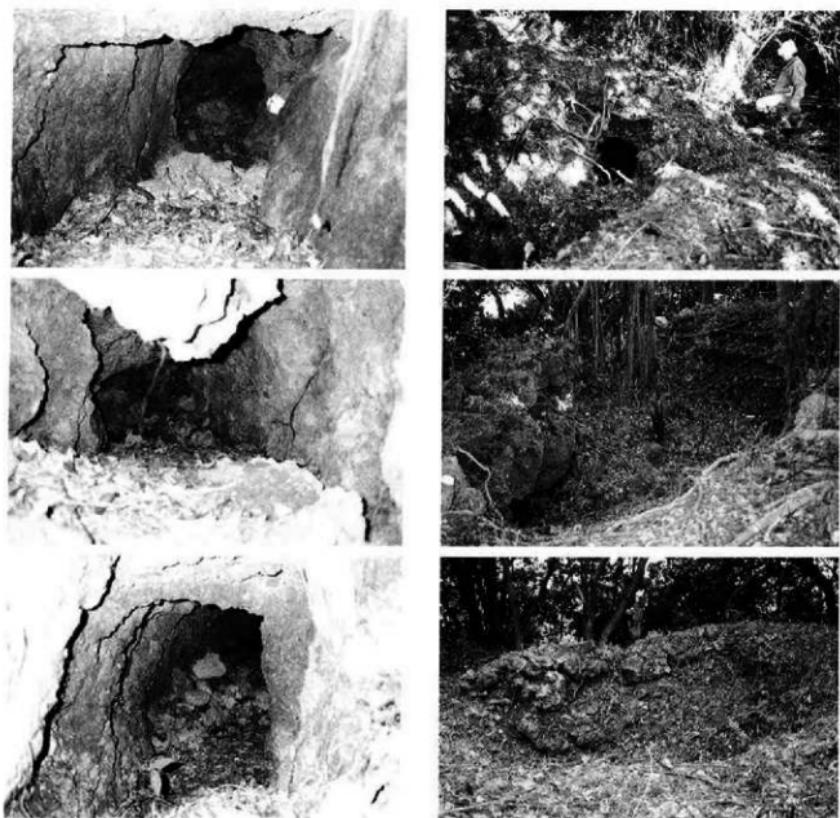
防衛庁防衛研究所図書館蔵「陣中日誌 独立迫撃砲第九中隊」 1945年

防衛庁防衛研究所図書館蔵「坑道陣地ノ参考」教育總監部 1945年

賀数陣地要圖



第4図 賀数陣地要圖 防衛庁防衛研究所図書館蔵「陣中日誌 独立迫撃砲第九中隊」1945年 より



真栄里特攻艇秘匿壕群（アミヤ原の特攻艇秘匿壕群）

所在地：糸満市字真栄里1426-1番地ほか

立地（標高）：丘陵下端部（約10m）

形態：人工壕

種別：特攻艇秘匿壕

現状：崩落はほとんど無く、残り具合は良好。

保存状況：墓群中にあるため、一部墓として利用されている可能性がある。

築造者：海上挺進基地第26大隊

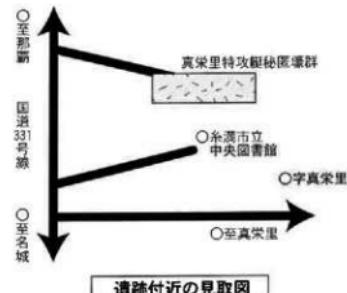
築造年月日：1945年

戦中の使用状況：①型特攻艇を秘匿・収納する場所

主な遺構：特攻艇秘匿壕 5カ所



主な遺構：特攻艇秘匿壕 5カ所



概要

特攻艇秘匿壕は、真栄里集落の北方約300mに位置し、東西にのびる丘陵の北面下端部に6基の特攻艇秘匿壕が並んでいると言われるが現在確認できているのは、5カ所である。この一帯は琉球石灰岩の崖面に占墓が数多く造られている場所でもある。壕は全て琉球石灰岩を掘り込んで造られている。

秘匿壕の形状は、幅が約3m、高さが約2.5mである。奥行きは壕により差があるが、約22mである。また、壕内には杭木の跡がはっきりと残っている壕もある。①型特攻艇は、全幅1.8m、高さ約1m、長さが5.6mであるため、これらの壕には特攻艇を十分収納できたと考えられる。壕内から海岸近くまでは運搬用のレールが敷かれていたようである。

本壕を利用していた部隊は、海上挺進第26戦隊である。海上挺進第26戦隊は、1944年12月渡嘉敷島に駐屯するが、1945年3月糸満地区へと移動する。

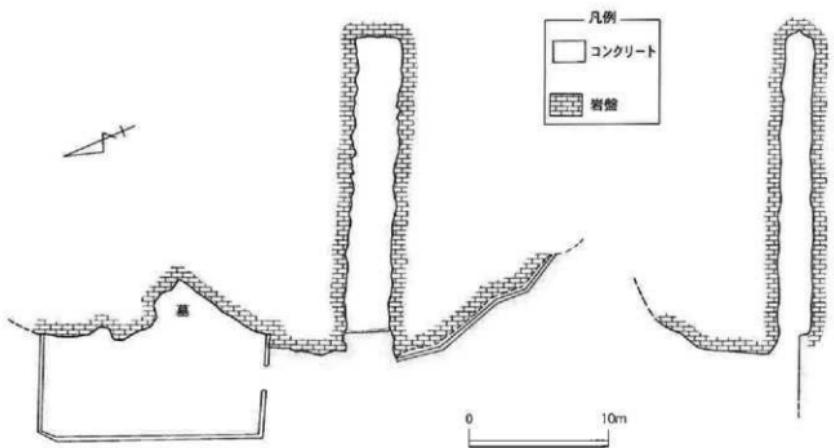
海上挺進隊には防衛隊が勤員されており、その役割は、壕内から特攻艇を海へ運搬する事であった。特攻艇の運搬は、レールのあるところはトロッコに乗せて押し、レールの無いところは10名ほどの防衛隊員が担いで運搬していたようである。

第26戦隊は、4月19日までに4度出撃をしている。その後、4月28日から陸上戦闘隊として編成され、浦添戦線へと投入された。

（参考文献）

若潮会・戦史編集委員会『①の戦史－陸軍水上特攻・船舶特幹の記録－』船坂弘 1971年

糸満市史編集委員会『糸満市史 資料編7 戦時資料 下巻－戦災記録・体験談－』糸満市役所 1998年



第5図 真栄里特攻艇密匿壕平面及び断面図



轟の塹

所在地：糸満市宇伊敷139番地

立地（標高）：丘陵緩斜面（約60m）

形態：自然洞穴

種別：住民避難塹・県庁職員避難塹・陣地塹

現状：塹内に土砂の流入等がある。

保存状況：階段、柵所等が各所に設けられている。

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：軍、住民、県庁職員などの避難塹

主な構造：塹内は、入り口から右側に軍隊が避難しており、左側に住民が避難していた。



概要

轟の塹は、伊敷集落から南西方向に約500mの所に位置する。塹は、全長約100m、東西に延びる自然洞穴で、出入り口が丘陵の斜面のドリーネ中にある。塹の床面は右側が比較的乾燥し、左側は川が流れ濡れている。

本塹には、名城の住民と、他地域の避難民数百名が、塹内に避難しており、5月上旬頃から首里警察署の署員、6月上旬から島田叡沖縄県知事、荒井追造警察部長をはじめとする県庁関係者、那覇警察署の一部の署員が避難している。知事は、6月15日頃、県の活動を停止し、摩文仁の軍司令部塹へ向かった。警察部長も数日後、知事を追っている。

その後、本塹に日本兵数名が入ってくる。住民や、残った県庁関係者、警察官らを出入口左側へ移動させ、軍は右側へ入った。日本兵は投降を許さず、子どもが泣くと銃剣を突きつけて泣かすなど脅したようである。6月18日頃、米軍が本塹を攻撃した。また餓死者も山始めた。そのため県庁関係者が、日本兵へ掛け合いで通常の出入口以外からであれば外へ出る許可を得た。以後、数名が川の下流に出口を探し始め、天井の薄い部分を発見した。掘削作業を開始しようとした時、米軍が沖縄人捕虜を使い投降の説得を開始し、住民は保護された。その時、日本兵は投降しなかった。

現在塹は、平和学習に利用されている。

（参考文献）

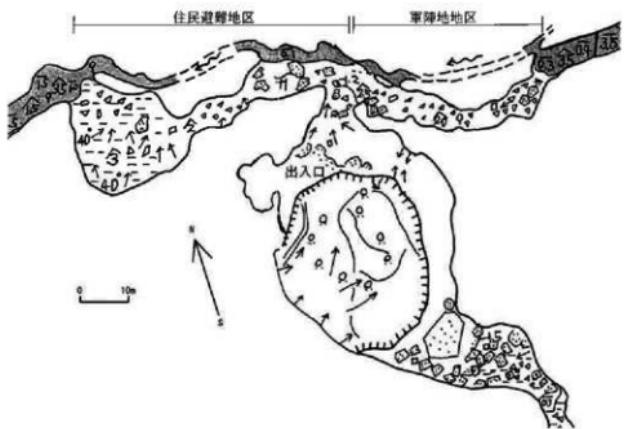
沖縄県高教組南部支部編『歩く・みる・考える沖縄』沖縄県事出版 1986年

陽崎俊武『手記 沖縄戦と島山知事』陽崎俊武 1988年

沖縄県警察史編さん委員会『沖縄県警察史 第二巻（昭和前編）』警察本部 1993年

安里要江・大城利保『沖縄戦 ある母の記録』高文研 1995年

石原昌家『沖縄の旅・アブチラガマと轟の塹』集英社 2000年



第6図 薩の塚平面造構図

沖縄県教育委員会『沖縄県洞穴実態調査報告2』1979年 より



糸洲の壕（ウッカーガマ）

所在地：糸満市宇伊敷66番地

立地（標高）：平地（約50m）

形態：自然洞穴

種別：住民避難壕、野戦病院壕

現状：壕内に水が溜まり通行不可能な場所がある。

保存状況：耕作地内にあり、放置されている。

築造者：不明

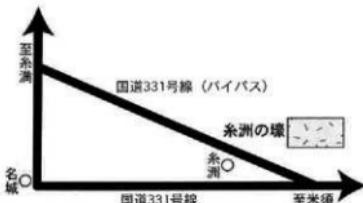
築造年月日：不明

戰時中の使用状況：糸洲の住民の避難壕、第24

師団第2野戦病院壕

主な遺構：炊事場、看護隊待機所、兵隊居所、

住民避難場所など



跡付近の見取図

概要

糸洲の壕は、糸満市宇伊敷前原地内にある自然洞穴である。この洞穴はウッカーガマとウンジャーガマと呼ばれる二カ所の出入り口がある。壕の全長は約200mである。

1944年の十・十空襲の際、糸洲住民の多くがウンジャーガマに避難した。1945年3月23日からの米軍の上陸前の砲爆撃が始まると、宇糸洲住民はウッカーガマなどに避難した。字民はこの壕を避難場所として利用するために、地面に床板を數くなとの準備をしていた。住民は、畠は壕内に隠れ、夕方から芋を掘り家で煮炊きするという生活を約2ヶ月続けた。また、この壕には名城からの避難民も多数いたようである。5月下旬頃、ウンジャーガマに避難していた糸洲住民は、日本軍が使用するという理由で壕から追い出される。

その後5月27日、豊見城城址内にあった第24師団第2野戦病院が糸洲の壕へ撤退してきた。この第2野戦病院には、私立積徳高等女学校の生徒が学徒として配備されていた。

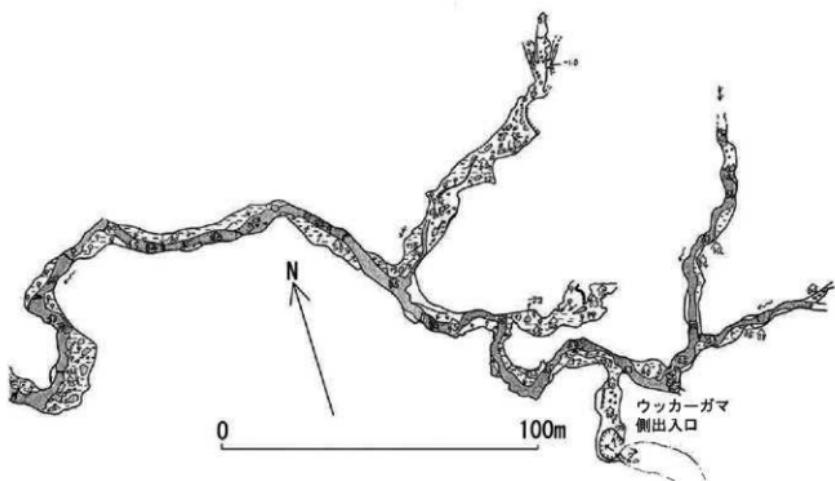
壕内は、入口付近に衛生兵、中央部に隊長と軍医、最奥部に学徒とい配置であった。洞内には地下水が流れ、飲み水に不自由はなかった。炊事はウッカーガマの出口付近で行われていたが、途中がぬかるんでいたため、一度壕外へ出てウンジャーガマ側から運び込んでいた。現在もウッカーガマ側は途中で水が溜まっている。

この壕は、6月17日以降から何度もガス弾攻撃を受けている。6月26日夕方、部隊長兼野戦病院長である小池勇助少佐から、解散命令が出され学徒の大半が壕外へでて米軍の捕虜となっている。小池少佐は6月27日に壕内で自決している。

（参考文献）

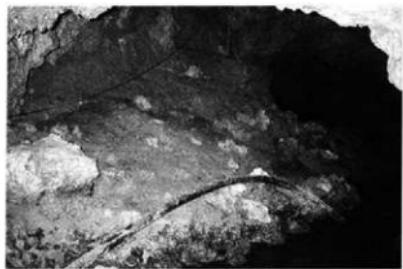
糸満市史編集委員会『糸満市史 資料編？ 戰時資料 下巻－戦災記録・体験談－』糸満市役所 1998年
積徳学徒看護隊『積徳高等女学校 昭和二十牟卒 野戦病院 血と涙の記録』積徳高等女学校昭和20年卒同期会
1999年

遠藤幸三『青年医学徒の沖縄戦回想記』橋本雅文堂 2000年



第7図 糸州の塙平面造構図

沖縄県教育委員会『沖縄県洞穴実態調査報告2』1979年 より



与座の監視哨

所在地：糸満市字与座1795-1番地

立地（標高）：丘陵頂上部（約135 m）

形態：構築物

種別：軍監視哨

現状：コンクリート製監視哨が半壊状態で残存

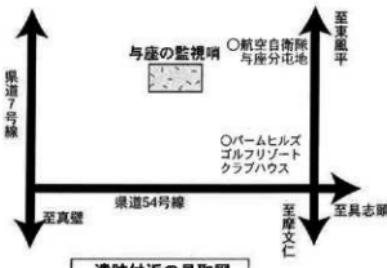
保存状況：ゴルフ場内にあり、放置されている。

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：第24師団配下部隊の監視哨

主な遺構：半壊した監視哨跡



概要

バームヒルズ内にある軍監視哨は、糸満市字新垣原地内に所在する。監視哨は、バームヒルズゴルフリゾート内のティーグラウンド脇に立地しており、南側海岸線沿いが見渡せる。

監視哨は、太い鉄筋が縦横に細かく組み合わせたものを基礎としてある鉄筋コンクリート製の構造物であり、平面形状は東西の辺が長い八角形を呈するとと思われる。残存部分は、外径が南北約2.7m、東西約2m、内径が南北約2.2m、東西約1mを測るが、半壊状態となっているため当時の状況は不明である。

監視哨には、いくつかの銃眼が設けられていたようである。監視哨の現存している部分の銃眼は、水平、上方45度の斜角、天頂部に設けられている。また、現存していない部分を含め、全方向に銃眼が設けられていたと思われる。

監視哨の所在する場所は、与座の第24師団司令部壕およびトーチカ跡と非常に近くに所在する。このことから、第24師団司令部の一連の施設であったと考えられる。

（参考文献）

防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』
朝雲新聞社 1968年



大城森の壕

所在地：糸満市字大里1221番地ほか

立地（標高）：丘陵（60m）

形態：人工壕

種別：陣地壕

現状：大半が埋没

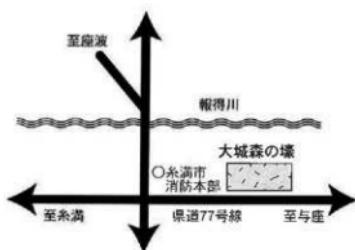
保存状況：説明版が設置されている

築造者：歩兵32連隊

築造年月日：1944～45年

戦時中の使用状況：歩兵第32連隊の陣地壕

主な遺構：壕出入り口付近が一部残存



遺跡付近の見取り図

概要

大城森の壕は、大里集落の北約300mに位置する、人工壕である。大城森の地中には東西を貫く一本の壕と、それと交差する形で南北に平行に数本の壕が存在する。

第24師団歩兵第32連隊の陣地壕として構築され、傷病兵なども収容されていたようである。壕入り口は殆ど埋没しており、現在確認出来る壕の出入り口は6カ所である。

その壕の1つ戦闘坑と称される地点から、壕内側をのぞき込むと交差する壕の状況が見てとれる。

首里の司令部壕が占領されてからは、大城森の壕には、負傷兵が多数収容されていた。この大城森の壕には当時、字与座女子青年団員らが看護の手伝い、死体運びなどで勤員されている。第32連隊が大城森の壕を撤退する時、数多くの重傷患者が毒殺や銃殺などによって処置されている。

参考文献

琉球新報社「豪言沖縄戦 戦禍を掘る」琉球新報社
1995年
(著者)
大城ナヘさん



富嶽山陣地壕

所在地：糸満市字阿波根1103-1番地

立地（標高）：丘陵中腹（約25m）

形態：自然洞穴（一部人工壕）

種別：陣地壕

現状：崩落等はない。

保存状況：壕入口が墓地に転用されている以外

は沖縄戦当時の状況と推測される。

築造者：不明

築造年月日：1944年

戦時中の使用状況：歩兵第32連隊歩兵砲部隊が

陣地壕として使用

主な遺構：壕内通路脇の棚状造構



遺跡付近の見取図

概要

富嶽山陣地壕は、字阿波根の南約200mに位置する丘陵中に所在する。丘陵上部には古城跡・阿波根グスクが古い石積みと共に残されている。その丘陵の中腹、南側崖下に古墓に挟まれるように壕の出入り口がある。

壕は、自然の洞穴をさらに深く掘り込んで構築されている。壕の最奥部は第二紀泥灰岩（クチャ）を彫り込んでいる。そのため壕の最奥部周辺は、落盤が激しくなっている。しかし、内部は空気の流れがあることから、もう一端も多少なりとも開口していると推測される。

壕内には通路部分と石積みによって構築された棚状の造構がある。また、最奥部周辺には床面を削って造られた階段、当時の坑木痕と思われる炭化木等が確認できる。

富嶽山の周辺には、歩兵第32連隊の歩兵砲部隊が対戦車用の陣地を構えており、富嶽山は、その中心にあった歩兵砲部隊の陣地壕であった。



（参考史料）

沖縄県平和祈念資料館蔵「築城書類綴 高井隊」1945年

サキタリガマ（チカジクガマ）

所在地：糸満市宇阿波根1406-115番地

立地（標高）：丘陵中腹（約40m）

形態：自然洞穴（一部人工縫隙）

種別：住民避難壕

現状：内部はほぼ原形を保っている。

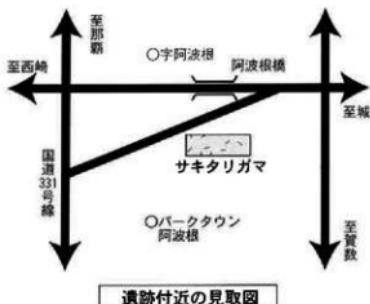
保存状況：出入口部分は施錠されている。

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：宇阿波根を中心とした住民と那覇警察署員が避難。

主な遺構：自然洞穴と壁面をさらに掘り込んで造った小さな分岐壕。



概要

阿波根集落の南側にあるパークタウン阿波根の地下に所在する。沖縄戦当時、壕内には周辺住民と他地域からの避難民数百名がいた。また5月下旬、那覇警察署員が本壕の最奥部を掘削し、そこへ那覇署長以下数十名の署員が避難してきた。

6月5日頃、那覇署員は三隊に分かれて南部へ移動したが、一隊は本壕へ戻ってきた。6月8日頃には、周辺に米軍の砲兵部隊が陣地を構え、11日頃、本壕が米軍に発見される。米軍の投降勧告により、大半の避難民は壕を出たが、十数名の那覇署員と3名の女性は、本壕にとどまった。6月14日頃からは、毎日のように米兵が壕内に進入し投降を呼びかけた。署員らはそのたびに、横穴壕などに隠れていたが、16日米兵に保護される。

現在、錠はパークタウン阿波根自治会で管理している。

（参考文献）

山川泰邦『対録 沖縄戦史』沖縄グラフ社 1958年
沖縄県警察史編さん委員会『沖縄県警察史 第二巻（昭和前編）』警察本部 1993年

糸満市史編集委員会『糸満市史 資料編7 戰時資料 下巻－戦災記録・体験談－』糸満市役所 1998年



ウフ壕（田原屋取の壕、32連隊の壕）

所在地：糸満市字真栄里1789番地

立地（標高）：丘陵（約60m）

形態：自然洞穴

種別：住民避難壕、陣地壕

現状：落盤の跡がある

保存状況：山形県の授護課が施錠

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：当初は真栄里住民のための住民避難壕として使用、後半は歩兵第32連隊本部陣地壕として使用される。

主な遺構：陣地壕



概要

ウフ壕は、糸満市字真栄里集落の東側丘陵中に所在する。壕は貫通しているが、上砂の堆積、落盤により通り抜けるには困難な状況である。

ウフ壕は、自然壕であったものを真栄里住民が避難壕として活用するために整備を行った。米軍上陸後もあり真栄里住民はこの壕には入っていないかったが、砲爆撃が激しくなってきた1945年5月頃からこの壕を利用し始めた。

その後、6月4日、歩兵第32連隊が移動ってきて本部陣地として使用した。歩兵第32連隊は、米軍上陸以前は大城森の壕を利用していたが、首里戦線へ投人された。首里戦線が崩壊した後、このウフ壕へ移動してきている。真栄里集落の住民は、32連隊が移動したことにより壕から追い出された。第32連隊の連隊長以下約50名は8月28日、連隊旗を焼き、翌日米軍に降伏した。



（参考文献）

防衛庁防衛研修所歴史室『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』
朝雲新聞社 1968年

白梅の塔近くの壕

所在地：糸満市字真栄里1839番地ほか

立地（標高）：丘陵頂上部（約50m）

形態：自然洞穴

種別：陣地壕

現状：洞穴内は土砂がかなり流入・堆積している。

保存状況：白梅同窓会が周辺を整備している。

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：第1野戦病院解散後、その一部が入り看護活動を行った。

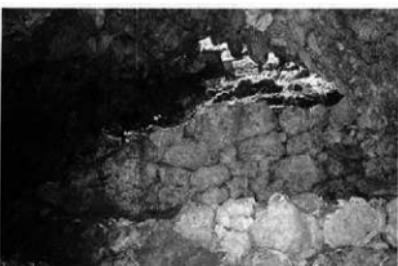
主な遺構：石積みによって構築された棚状遺構



概要

白梅の塔近くの壕は、糸満市字真栄里の田原屋取集落から東に所在する。白梅の塔近くの壕は、上の壕（眞山之塔後ろの壕）と下の壕（白梅之塔の壕）からなる自然の洞穴である。下の壕は「白決の壕」とも呼ばれている。

第二高等女学校の生徒隊からなる学徒隊は第24師団第一野戦病院に勤務していたが、6月4日八重瀬で解散し南部地域を彷徨っていた。解散した後の学徒の一部がたどり着いたのが白梅之塔近くの壕である。この壕では、第一野戦病院の人員の一部が入っており、病院としての機能はほとんど失っていたが負傷兵の手当をしていた。上の壕は食料弾薬倉庫であり、下の壕は傷病兵の看護場所であった。この壕へたどり着いた16名の学徒は、下の壕で負傷兵の手当の手伝いをし、上の壕を休息場所として利用していた。6月21日下の壕が馬乗り攻撃を受け6名が死亡した。翌日、上の壕も攻撃を受け3名が死亡している。



（参考文献）

白梅同窓会『平和の道しるべ…白梅看護隊の記録…』白梅同窓会 1995年

アバタガマ

所在地：糸満市字真栄平945番地

立地（標高）：丘陵中腹（約105m）

形態：自然洞穴

種別：住民避難壕、陣地壕

現状：落盤した跡がある

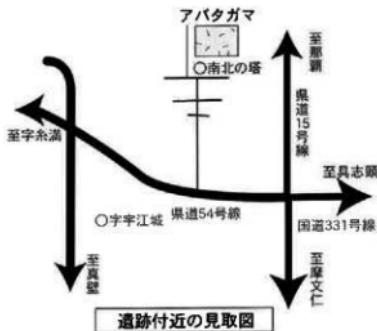
保存状況：周辺に南北の塔等の碑がある。

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：住民避難壕であったが、第24師団が陣地壕として使用

主な遺構：人工的に掘り込まれた横穴



概要

字真栄平集落の北側約300mの地点に所在する。壕出入り口脇には南北の塔や搜索第24連隊の碑などが建立されている。

壕の形状は開口部から斜面を下ると、内部の比較的平坦場所に至る。ここは天井から石灰岩が剥離したのであろうか、人頭大以上の岩石が足の踏み場もないほど、転がっている。さらに奥に向かって壕が続くが、天井が低くさらにおに進むことは困難である。

このアバタガマには、真栄平住民を中心とした約300名の住民が避難していた。首里の司令部の陥落後の5月末頃、アバタガマに避難していた住民は、「ここは戦場になるから安全な場所にいきなさい」と言われ壕から出ることを求められる。真栄平の区長を中心として住民がアバタガマを出でにすむように頼むが、聞き入れられず追い出されることとなった。

（参考文献）

琉球政府『沖縄県史 第9巻 各論編8 沖縄戦記録』

琉球政府 1971年

糸満市史編纂委員会『糸満市史 資料編7 戦時資料

下巻—戦災記録・体験談一』糸満市役所 1998年



伊原第一外科壕

所在地：糸満市伊原212 2

立地（標高）：平地（約30m）

形態：自然洞穴

種別：陸軍病院壕

現状：床面に泥が堆積している。

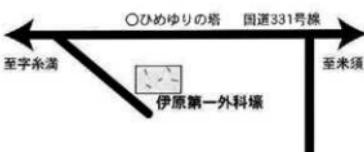
保存状況：所在を示す石碑が建てられている。

築造者：不明

築造年月日：不明

使用状況：南風原撤退後の沖縄陸軍病院関係者の避難壕

主な遺構：二つのホールからなる自然洞穴



遺跡付近の見取図

概要

伊原第一外科壕は、ひめゆりの塔から国道331号線を名城方面へ200mほど進み、南側の道標に従い道なりに進むとある。

この壕は、主に南部撤退後の条款分室、津嘉山経理部、第一外科の勤務者が入っていたことから伊原第一外科壕と呼ばれている。

壕口は地下へ降りるとほぼ西向きに開いており、階段が取り付けられている。壕内は大きく分けて、壕付近の壕口ホール、その奥のホール、そしてその奥に延びる横穴部分の三つ部分からなる。現在、床面には泥が厚く堆積している。

6月17日、壕入口近くに砲弾が落ち、学徒・病院関係者が死傷した。6月18日に伝令を受けた引率の仲宗根政善教諭から学徒に解散命令が伝えられ、翌19日未明に壕を脱出している。脱出時に負傷者は壕に残された。壕に残された学徒の負傷者9名の中で、2名が助かっている。

（参考文献）

ひめゆり平和祈念資料館・（財）女師・一高女ひめゆり同窓会『ひめゆり平和祈念資料館公式ガイドブック』ひめゆり平和祈念資料館・（財）女師・一高女ひめゆり同窓会 1989年



糸洲第二外科壕

所在地：糸満市字糸洲239番地

立地（標高）：平地（約40m）

形態：自然洞穴

種別：陸軍病院壕

現状：入り口が埋没

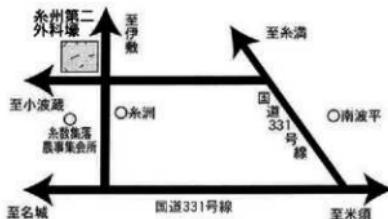
保存状況：所在を示す石碑が建てられている。

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：南風原撤退後の沖縄陸軍病院関係者の避難壕

主な遺構：入り口が埋没しているため内部の詳細は不明



遺跡付近の見取り図

概要

糸洲第二外科壕は、糸洲集落西端から伊敷集落に通り抜ける切り通しの傍らに位置する。

この壕は、主に南部撤退後の南風原陸軍病院第二外科勤務者が入っていたことから糸洲第二外科壕と呼ばれている。

壕はコ字型になっており、左側の2ヶ所に銃眼があった。しかし、現在壕はふさがっていて当時の様子をとどめていない。

6月18日、糸洲第2外科壕は米軍に馬乗り攻撃を受け、壕内に機関銃掃射を受けていた。同日夕方、日大尉が各々壕を脱出するように命令している。その後、米軍に発見されにくいように夜を逃んで壕を脱出している。壕を出た者の多くは伊原第一外科壕へたどり着き、そこで解散命令を知った。

（参考文献）

ひめゆり平和祈念資料館・（財）女師・一高女ひめゆり同窓会『ひめゆり平和祈念資料館公式ガイドブック』ひめゆり平和祈念資料館・（財）女師・一高女ひめゆり同窓会 1989年

ひめゆり平和祈念資料館・（財）女師・一高女ひめゆり同窓会『ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより 第9号』ひめゆり平和祈念資料館・（財）女師・一高女ひめゆり同窓会 1994年



伊原第三外科壕

所在地：糸満市字伊原672番地

立地（標高）：平地（約30m）

形態：自然洞穴

種別：陸軍病院壕

現状：多少の落盤はあるが、現在は安定している。

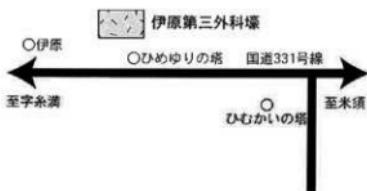
保存状況：ひめゆりの塔を含め観光地化している。

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：南風原撤退後の沖縄陸軍病院関係者の避難壕

主な遺構：ドリーネ状の洞穴



遺跡付近の見取り図

概要

ひめゆりの塔の後ろに伊原第三外科壕がある。

この壕は、主に南部撤退後の第三外科の勤務者が入っていたことから伊原第三外科壕と呼ばれている。後に一日橋分室、識名分室、本部の教師、生徒も合流している。

壕はドリーネ状を呈し、地上からは梯子等がなければ降りることはできない。当時は二本の松に縄をわたした簡易梯子を利用していた。現在、ガマ底部には落盤したと思われる岩が堆積している。

6月18日解散命令を受け、翌19日に壕を脱出しようとした時、米軍のガス弾攻撃を受けた。この攻撃により、引率教師、学徒、病院関係者、住民など約80名が死亡した。

壕内には未だ未収骨の人骨や、軍靴、薬瓶などが散乱している。また高熱を受けて爆発したと思われる四裂した薬莢も見受けられた。ひめゆりの塔には、現在多数の観光客が訪れている。

（参考文献）

宮良ルリ『私のひめゆり戰記』ニライ社 1986年

ひめゆり平和祈念資料館・（財）女師・一高女ひめゆり同窓会『ひめゆり平和祈念資料館公式ガイドブック』ひめゆり平和祈念資料館・（財）女師・一高女ひめゆり同窓会 1989年



陸軍病院山城本部壕

所在地：糸満市宇山城279番地

立地（標高）：平地（約20m）

形態：自然洞穴

種別：陸軍病院壕

現状：洞穴内には土砂が堆積し、常にぬかるんだ状態となっている。

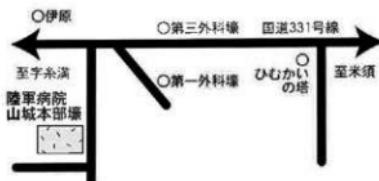
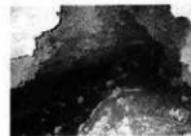
保存状況：沖縄陸軍病院壕之塔が建てられている。

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：南風原撤退後の沖縄陸軍病院関係者の避難壕

主な敷構：壕入り口から内部へ続く石敷き道



遺跡付近の見取図

概要

山城本部壕は、ひめゆりの塔から国道331号線を名城方面へ400mほど進み南側の道標に従い600mほど進むと沖縄陸軍病院壕之塔があり、その敷地内にある。

この壕には主に南部撤退後の陸軍病院本部壕勤務者が入っていたことから山城本部壕と呼ばれている。

壕内は、壕口のあるホールと奥のホールの二つに分かれている。現在、床面には泥が堆積し、ぬかるんだ状態になっている。

6月14日直撃弾を受け、病院長、歩哨兵、衛生兵、伝令に来ていた学徒らが死亡した。そのため本部が壊滅状態となり、翌15日に伊原第一外科壕、太田壕、伊原第三外科壕へ分散している。

（参考文献）

ひめゆり平和祈念資料館・（財）女師・一高女ひめゆり同窓会「ひめゆり平和祈念資料館公式ガイドブック」ひめゆり平和祈念資料館・（財）女師・一高女ひめゆり同窓会 1989年

長田紀春「因光の中で 沖縄陸軍病院の証言」ニライ社 1992年

ひめゆり平和祈念資料館・（財）女師・一高女ひめゆり同窓会「ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより 第9号」ひめゆり平和祈念資料館・（財）女師・一高女ひめゆり同窓会 1994年



マヤーガマ

所在地：糸満市字山城406番地ほか

立地（標高）：緩斜面（約50m）

形態：自然洞穴

種別：住民避難壕・軍陣地壕

現状：洞穴内には沖縄戦当時の生活用雑器が多数散乱している。

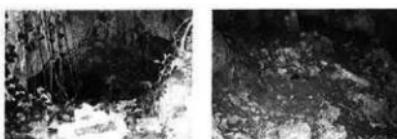
保存状況：半和創造の森公園内に放置されている。

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：住民が避難していたが、軍が追い出し代わりに入っている。

主な遺構：避難壕



遺跡付近の見取図

概要

マヤーガマは、字上里にある食肉製造会社東側に隣接している。壕は、出入口からほぼ垂直に約3mほど下り、その先は緩やかな下り斜面になっている。最奥部はほぼ円形状の平坦な広場となっており、出入口から20~30mほどの距離である。

壕内には、小型の厨子裏や碗・皿類などの生活用雑器が散乱し、落盤したとともに見られる。

マヤーガマには、字山城の住民の大半が避難していた。住民は、数世帯で班をつくり班長を決め、飯炊き、水くみ、野菜取りなどの作業を分担していた。壕内の生活では水に不自由をしたようで、住民はアシチャーガーへ水を汲みにいっていた。

首里の司令部の陥落後、マヤーガマに避難していた住民は、日本軍に追い出された。住民は疊で壕入り口を塞いだり、日本兵に追い出さないように懇願するなどして壕追い出しに抵抗した。しかし、結局追い出され、分散して逃げることになった。



参考文献

糸満市史編集委員会『糸満市史 資料編7 戦時資料 下巻－戦災記録・体験談－』糸満市役所 1998年

防疫給水部隊壕（ウマウトゥシー）

所在地：糸満市字上里492番地

立地（標高）：丘陵頂上部（約50m）

形態：自然洞穴（一部人工壕）

種別：軍陣地壕

現状：洞穴内はあまり崩落の状況が見られない。

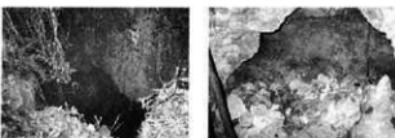
保存状況：慰霊碑が建立されている。

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：第27野戦防疫給水部隊本部壕

主な遺構：壕出入り口への足場として積まれた石積み遺構や構築された複数の横穴など



跡跡付近の見取図

概要

防疫給水部隊本部壕は、字上里集落の西側の山林中に立地する。洞穴は縦穴の自然洞穴で、深さは十数mに達する。壕開口部から壕内底の一一番浅い部分までの深さが約8.5mを測る。洞穴の縦断面形はフラスコ状を呈する。その一番浅い部分に約1m前後の高さまで石が積み上げられて、安定した足場を形成している。壕内には複数の横穴が縦横に掘られている。また、壕内には多数の軍靴が散乱している。長さが5cm前後の四角柱形の乾電池や人骨、碗、壺、甕なども見られる。壕内の一角には黒い煤がこびりついた跡が確認される。壕開口部脇には慰霊碑が建立されている。

本壕は、第27野戦防疫給水部隊が使用していたとされる。防疫給水部隊は、軍の水の確保、伝染病対策などを主な任務としていた部隊である。第27野戦防疫給水部隊は、一時橋や識名に配備されていたが、首里の司令部陥落に伴い当地へ撤退してきた。



参考文献

防衛省防衛研修所歴史室『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』
朝雲新聞社 1968年

喜屋武のトーチカ跡

所在地：糸満市字喜屋武1730-1番地

立地（標高）：海岸（約1m）

形態：構築物

種別：トーチカ

現状：コンクリート製構造物の側面部分が岩にくっついた状態で残存。

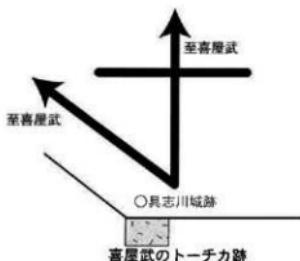
保存状況：海岸沿いにあり、放置されている。

建造者：不明

建造年月日：1944～45年頃

戦時中の使用状況：軍の対上陸用陣地

主な遺構：コンクリート製トーチカの側壁の一部が残存。



跡付近の見取図

概要

トーチカ跡は、糸満市字喜屋武にある具志川城跡の真下にあたる海岸の岩穴に構築されている。

米軍上陸前後、喜屋武岬周辺には歩兵第32連隊第2大隊が配備されていた。このことから米軍の上陸に備えての陣地として使用されていたと考えられる。

鉄筋コンクリート製で、現在では左右の側壁部分と床面が岩壁にへばり付くように半うじて残されている状態である。外面部は波打ち際に面し、トーチカから陸地側床面はデコボコの岩場に約10m四方程度のコンクリートを敷き詰めた空間が残されている。

残存部分から推測されるトーチカの室内空間は高さ約1m、奥行き約2.5m、幅約6mである。外面部のコンクリートの厚さは約90cm程度である。トーチカ天井から岩穴天井部までの上部空間と床面から岩場までの下部空間は、コンクリートで固められていたと考えられる。

参考文献

防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』
朝雲新聞社 1968年



ウムニーガマ

所在地：糸満市字米須662番地

立地（標高）：丘陵中腹部（約40m）

形態：自然洞穴

種別：住民避難壕

現状：落盤等はない

保存状況：石灰岩採掘が迫っており、洞穴の破

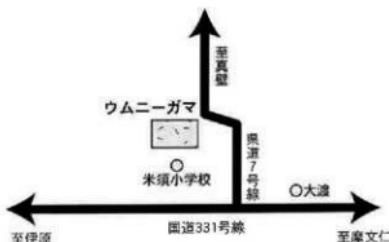
壊が危惧される。鎮魂の塔が建っている。

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：米須住民が避難用として使
用。

主な遺構：石積み遺構及び多数の多数の生活用
雑器が散乱。

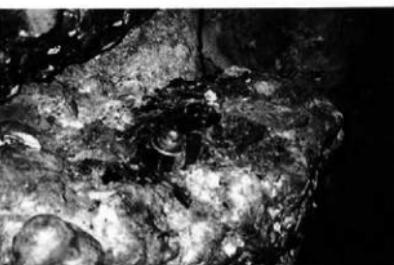
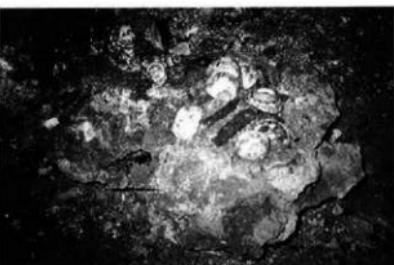


概要

ウムニーガマは、米須小学校後方約100mの地
点にある自然洞穴である。出入り口付近は、落
差約9mの急勾配の斜面となっている。その奥
には、奥行きが約14~15mの比較的平坦な空間
がある。その奥には、急勾配の斜面が約10mあり、
壕最奥部に平坦な空間がある。壕は奥へ続くよ
うだが、泥の堆積のためかなり天井が低くなっ
ており、進むことは困難である。壕内の斜面は
石積みによって平坦な空間を造り出している。

壕内には生活用雑器が散乱している。

ウムニーガマには、米須の住民、避難民、日
本軍が入っていた。6月20日頃に米軍から投降
勧告を受けたが、日本軍が抵抗したためにガス
弾や火炎放射器の攻撃を受けた。米須の住民だ
けでも71名が犠牲になった。



（参考文献）

糸満市史編集委員会『糸満市史 資料編7 戦時資料
下巻—戦災記録・体験談ー』糸満市役所 1998年

ひめゆり学徒隊散華の跡

所在地：糸満市宇東里475番地

立地（標高）：海岸（約5m）

形態：岩影

種別：避難壕

現状：遺物等は残っていない。

保存状況：「ひめゆり学徒隊散華の跡」と銘記された石板が埋め込まれている。

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：ひめゆり学徒とその教師と生徒が集団死を行った

主な遺構：集団死のあった岩場



跡付近の見取り図

概要

字上里にある糸満市・豊見城村清掃施設脇の農道を海岸まで下ると、海岸の岩場に出る。その左手にあるコンクリートの細い道を行くと「ひめゆり学徒隊散華の跡」と記された石板のある岩場に突き当たる。すぐ近くには波打ち際が迫る。

1945年6月19日学徒隊に解散命令が出され後、引率教員と学徒の12名がこの地にたどり着いた。周辺は、敗残兵と避難民が至る所に隠れていた。米軍は、アダン林を火炎放射器で焼き払い敗残兵や住民を追い出し、海から投降を呼びかけていた。

そのような中、引率教員と学徒たちは、米兵の急襲を受けた。その時、引率教員が学徒たちが集まっている場所で手榴弾を使い自殺を計った。これにより、引率教員と学徒合わせて、8名が死亡した。また、米軍の乱射により師範の学生の3名が即死、3名が重傷を負っている。

（参考文献）

ひめゆり平和祈念資料館・（財）女師・一高女ひめゆり同窓会『ひめゆり平和祈念資料館公式ガイドブック』ひめゆり平和祈念資料館・（財）女師・一高女ひめゆり同窓会 1989年

宮城喜久子『ひめゆりの少女十六歳の戦場』高文研
1995年



千人塙（アンティラガマ）

所在地：糸満市字真壁1292番地

立地（標高）：平地（約40m）

形態：自然洞穴

種別：陣地塙

現状：塙内には落盤など見られない。

保存状況：近くに萬華之塔や砲兵山吹之塔など
が建てられている。

築造者：不明

築造年月：不明

戦時中の使用状況：避難民、野戦重砲第1連隊
をはじめとする敗残兵が使用

主な遺構：大きな空間を持つ入り口付近と連結
された細い通路



遺跡付近の見取図

概要

真壁集落の北東側はすれに位置する自然洞穴であり、塙へ向かう途中の広場には万華の塔と砲兵山吹の塔が建立されている。千人塙入り口内部に付近は大きな空間が広がっており、天井も高い。収容可能な人数も数百名程度かと推測される。ここには日常生活で用いる雑器（碗・皿・壺・甕など）が多数散乱している。さらに、先へ進むと小規模なホールを細い通路で連結したような構造となっており、急に天井が低くなり、かがんで歩かなければならぬ状態となる。

真壁住民は殆どこの塙には入らなかつたが、日本軍が摩文仁や喜屋武半島に追いつめられたとき避難民や敗残兵が隠居する状況にあつた。塙内では、兵隊が傭の安全な場所に陣取つてゐた。また、近くの塙では泣く子を殺害したり、住民を追い出すなどの行為を行つてゐた。



（参考文献）

沖縄県高等学校教職員組合南部支部平和教育研究委員会編『歩く・みる・考える沖縄』沖縄時事出版社 1986年

大度の軍構築壕

所在地：糸満市字大度301-2番地

立地（標高）：丘陵中腹部（約45m）

形態：人工壕

種別：陣地壕

現状：入り口付近の残りは良好であるが、壕の奥は落盤している。

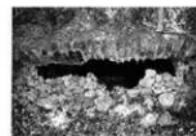
保存状況：原野に放置されている。

建造者：不明

建造年月日：不明

戦時中の使用状況：独立高射砲第27大隊が使用

主な遺構：人工的に掘り込まれた横穴



遺跡付近の見取図

概要

大度の軍構築壕は、さつきのしろ東側の崖下、沖縄ファミリーランドの建つ丘の直下付近に位置する。

琉球石灰岩を掘り込んで造っており、縦断面形状は長方形状を呈する。大井の高さは約2～3m、壕内の幅奥行きとともに約10mを測る。現在出入り口付近は3分の2程度石積みで塞がれており、壕前面部はモルタルが塗られ、平面整形が成されている。

壕内の最奥部の一角には、分岐点があり、さらに奥へ壕が続いていることを推測させる。ただし、この部分は天井部分が崩落しかけているため、確認には至っていない。

この壕は、独立高射砲第27大隊が使用していた。独立高射砲第27大隊は、1945年3月24日、第24師団に配属された。第27大隊の所有していた高射砲の2門が大度へ配備されている。この構築壕は、そのとき配備された独立高射砲第27大隊の一部が使用していたものである。

（参考文献）

防衛庁防衛研修所歴史室『歴史叢書 沖縄方面陸軍作戦』

朝雲新聞社、1968年

渡辺憲央『逃げる兵 高射砲は見ていた』文芸社 2000年



摩文仁の第32軍司令部壕

所在地：糸満市字摩文仁549-1番地

立地（標高）：丘陵頂上部（約90m）

形態：自然洞穴（一部人工壕）

種別：第32軍司令部壕

現状：壕内は落盤が激しい。

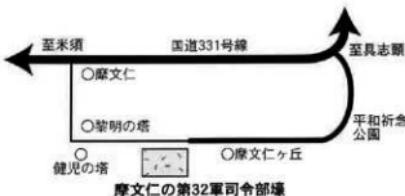
保存状況：壕の開口部の内1カ所は扉を設置し、中に入れないようにしてある。

築造者：第89連隊第2中隊

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：第89連隊第2中隊の陣地壕として使用されていたが、のちに第32軍指令部壕として使用された。

主な遺構：人工的に掘り込まれた横穴遺構



遺跡付近の見取図

概要

摩文仁ヶ丘最頂部・黎明の塔近くから海岸に降りる途中左側に所在する。現在は入り口部分に扉が設置されており、中に入ることは出来ない。

琉球石灰岩の自然洞穴を加工した壕で、開口部は2カ所あり、海岸側と、摩文仁集落側に向いている。内部通路はほぼ直角に折れ曲がり、総延長は約100mほどである。

第32軍は、1945年5月下旬、首里の第32軍司令部が陥落した後、本壕に司令部を移した。

司令部を摩文仁の司令部壕へ移したとき、勝敗は決していた。しかし、第32軍司令部は、米軍を沖縄に引きつけておくために戦闘を継続する事を選択した。

6月23日（あるいは22日）、沖縄守備第32軍司令官である牛島満中将は、軍が崩壊しても抵抗をやめないように指示し、本壕で自決した。そのため日本軍の抵抗は6月23日（あるいは22日）では終わらなかった。

（参考文献）

防衛庁防衛研修所歴史室『歴史叢書 沖縄方面陸軍作戦』

朝雲新聞社 1968年

八原博道『沖縄決戦』 読売新聞社 1972年

琉球新報社『証言沖縄戦 戦禍を撰る』 琉球新報社 1995年



健児隊の壕

所在地：糸満市字摩文仁548番地

立地（標高）：丘陵斜面部（約45m）

形態：自然洞穴

種別：陣地壕

現状：壕内には落盤等はない。

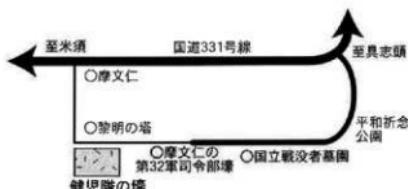
保存状況：壕内には納骨堂、近傍には碑などが造られている。

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：男子師範学校生が入っていた壕である。

主な遺構：火炎放射器で焼かれた岩壁



遺跡付近の見取図

概要

摩文仁ヶ丘・黎明の塔脇から海岸に降りる階段を下りきった地点の左側下方に見える岩塊の下にある。岩塊下の空間の広さは約10m四方内外であり、壕内には納骨堂が造られている。

近くには、沖縄師範健児の塔と平和の像が建てられている。これらの碑類は鉄血勤皇隊として構成されていた沖縄師範学校男子部により建てられたものである。壕内には火炎放射器で攻撃を受けた跡が残っている。

鉄血勤皇隊は、首里の司令部陥落後、第32軍司令部とともに摩文仁へ退却してきた。その鉄血勤皇隊の任務は、伝令、食料調達、斬り込みなどであった。健児隊の壕から道沿いに海に向かって下ると、生徒たちが水汲みに通っていた井戸が残っている。鉄血勤皇隊の生徒たちは、この壕で「自決」を行っている。

（参考文献）

大田昌秀『鉄血勤皇隊』ひるぎ社 1977年

沖縄県高等学校教職員組合南部支部平和教育研究委員会編『歩く・みる・考える沖縄』沖縄時事出版社 1986年



クラガー（宇江城の壕）

所在地：糸満市宇江城116-1番地

立地（標高）：平地（約60m）

形態：自然洞穴

種別：陣地壕

現状：壕内は崩落箇所はあまりない。

保存状況：壕上部には山雨の塔が建立されている。

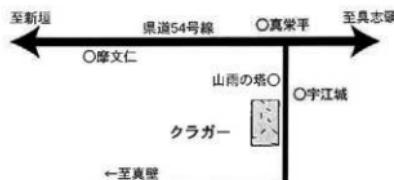
壕入り口には水源地としてのクラガーがある。

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：第24師団司令部

主な遺構：壕内部に構築された台形状の横穴遺構



遺跡付近の見取図

概要

宇江城集落の近傍の「山雨の塔」の下にクラガーの壕出入り口がある。壕の入り口付近の湧泉から水が壕内へ流れ込むが、約30mほどの所で地下水水流となる。洞穴の高さは出入り口付近は低いが、約10mほどで立って歩けるようになり、入り口から約100mの地点で大きく左右に分岐する。分岐地点には生活用雑器類が散乱している。

住民の水汲み場であったクラガーを第24師団が陣地として利用した。首里の司令部陥落後、第24師団の司令部が移動してきた。この壕はアブガマとつながっており、そこには宇江城の住民が避難していた。しかし、アブガマの住民は軍により追い出されている。6月30日、師団長の雨宮中将がこの壕で自決している。また、師団旗の奉焼も行っている。この壕に立てこもっていた日本兵が投降したのは、8月になってからである。

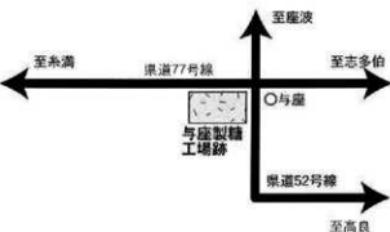
（参考文献）

沖縄県高等学校教員組合南部支部平和教育研究委員会編『歩く・みる・考える沖縄』沖縄時事出版社 1986年
糸満市史編集委員会『糸満市史 資料編7 戦時資料 下巻一 戦災記録・体験談一』糸満市役所 1998年



与座製糖工場跡

所在地：糸満市字与座412-66番地ほか
立地（標高）：平地（約25m）
形態：構築物
種別：弾痕跡
現状：製糖工場内の施設の一部が残存する。
保存状況：集落内に放置されている。
築造者：不明
築造年月日：不明
戦時中の使用状況：酒造作業
主な遺構：石橋、製糖工場の門柱や糖蜜タンク
にある弾痕跡等



概要

現在の下与座一帯の集落は、戦前の製糖工場跡に建てられたものである。このため集落の周辺には製糖工場関連の施設が各種残されている。

工場の側を軽便鉄道の糸満・与那原線が通っていたため、鉄道の引き込み線として、石橋が残されている。現在の県道77号線の橋がこれにあたる。また、工場の門柱が左右2基、その他糖蜜タンクなどが残っている。門柱と貯蔵用倉庫には沖縄戦当時の弾痕が多数残されている。

高嶺製糖工場では、日本軍からの命令で、戦闘中にもかかわらず糖蜜で酒を製造していた。これは斬り込み隊用ということだった。また、工場の煙突は、攻撃目標にされては困るから、という理由で日本兵たちが爆破して壊した。

戦後、米軍占領によって自分の屋敷に戻れなくなった字民が、製糖工場側との話し合いによって工場の敷地を字で購入し、そこへ移り住むことになった。

(参考文献)
糸満市史編集委員会「糸満市史 資料編7 戰時資料 下巻—戦災記録・体験談—」糸満市役所 1998年



第24師団司令部壕

所在地：糸満市字与座1402番地ほか

立地（標高）：丘陵（約90m）

形態：人工壕

種別：第24師団司令部壕

現状：数ヵ所の壕出入口があるが、いずれも奥は落盤が激しい。

保存状況：集落の縁にあり、放置されている。

築造者：第24師団

築造年月日：1944年

戦時中の使用状況：第24師団司令部壕として使用

主な遺構：激しく落盤を起こしている構築壕



概要

第24師団司令部壕は、糸満市字与座地内にある人工壕で、字与座の南側にある海拔約100mの丘陵の斜面中腹にある。琉球石灰岩と第三紀泥炭岩（クチャ）を掘り込んで構築している。

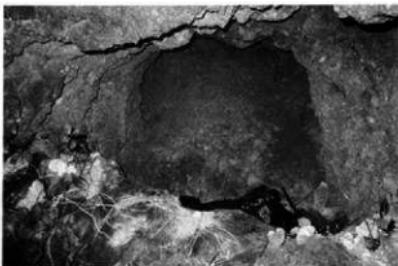
米軍上陸時、第24師団は本壕がある与座を中心にして東側に歩兵第89連隊、南西側に歩兵第32連隊、北西側に歩兵第22連隊を配置し、海からの米軍の上陸に備えていた。

壕の構築は、第24師団が住民を一切近づけずに行っていた。従って、陣地構築の詳細な様子を知る住民はほとんどいない。

本壕は、丘陵面に向かってほぼ垂直に6本の壕が掘られており、全て中で連結する構造となっている。また丘陵頂上部にある第24師団トーチカ跡を交通壕で繋ぐ壕とつながっている。しかし、内部は落盤が激しく、通り抜けることは困難である。

（参考史料）

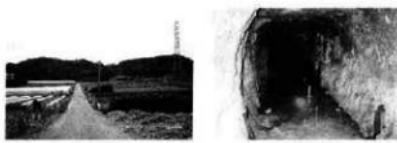
防衛庁防衛研究所図書室蔵「沖縄作戦に於ける第24師団司令部史実資料」



第2節 南風原町

南風原陸軍病院壕群

所在地：南風原町字喜屋武675番地ほか
立地（標高）：丘陵中腹（約50m）
形態：人工壕
種別：陸軍病院壕
現状：壕出入り口の大半は埋没している。
保存状況：1990年、南風原町が文化財として指定し、継続的に調査を行われている。
築造者：第32軍
築造年月日：1944～1945年
戦時中の使用状況：沖縄陸軍病院として使用
主な遺構：20号壕、24号壕は壕内部確認済み



概要

南風原陸軍病院壕群は、字喜屋武集落の東側にある通称・黄金森と呼ばれる丘陵中にある。壕群は沖縄陸軍病院の病院壕として構築、利用された。

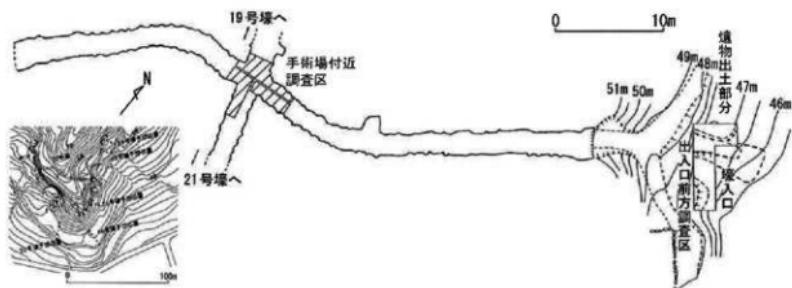
現在、壕群の壕口の大半は埋没しているが、南風原町が継続的に調査を行っている。南風原町は黄金森の測量調査を行い、その結果と証言などを対比させ壕口の確定を行った。この作業において第一外科壕の7～9号壕と第二外科壕の16～24号壕に関してはその位置がほぼ確認された。しかし、10～15号壕に関しては確認が取れていない。

壕口の位置の確認作業を行った南風原町は、20号壕と24号壕の測量調査を行った。壕の形状は、床面1.8m、天井幅1.6m、高さ1.8mであり、90cm間隔で坑木跡が残っている。また、壕は尾根を貫通するように掘られ、内部で各壕が連結されていることが判明した。壕口付近には、土壘状の施設が設けられていたことも判明した。

南風原町は、壕内外の発掘調査も行っている。発掘調査により、20号壕の中央部から、ピンセット、アンプル、カーテンレール等が出土したことから、この場所は手術場であったと推測される。20号壕東側壕口からは薬瓶等が集中的に出土したことから病院撤退時、壕口付近に埋めたと推測されている。このことは証言等では得られなかった情報である。発掘調査によって、遺物の残す情報の重要性が明らかになったといえる。

（参考文献）

- 南風原町教育委員会「南風原陸軍病院壕」南風原町教育委員会 1987年
南風原陸軍病院壕保存・活用調査研究委員会「南風原陸軍病院壕保存・活用についての答申」1996年
南風原町史編集委員会「南風原町史 第3巻 戦争編ダイジェスト版 南風原が語る沖縄戦」南風原町 1999年
南風原町教育委員会「南風原町文化財調査報告書 第3集 南風原陸軍病院壕群1－沖縄県南風原町所在南風原陸軍病院壕群の考古学的調査報告書！」南風原町教育委員会 2000年
池山榮史「戰争遺跡に対する考古学的調査及び研究方法の検討」琉球大学法文学部考古学研究室 2000年



第8図 南風原陸軍病院壕平面遺構図
南風原町教育委員会『南風原陸軍病院壕群Ⅰ』2000年より



ナゲーラ塹

所在地：南風原町字新川444-1番地ほか
立地（標高）：丘陵線端部（約70m）
形態：人工塹
種別：野戦病院塹
現状：開発によって一部削り取られている。
保存状況：原野に放置されている。
築造者：第62師団
築造年月日：1944～45年頃
戦時中の使用状況：野戦病院塹として使用
主な遺構：螺旋台、坑木跡、手術室跡など。



遺跡付近の見取り図

概要

ナゲーラ塹は、南風原町字新川地内にある軍構築塹である。現在、沖縄自動車道那覇料金所へ至る高架橋下の小高い丘に所在する。塹は第三紀砂岩（ニーピ）を掘り込んで構築されている。

中央付近には小川が流れしており、北側の塹と南側の塹とを分けている。配備部隊は第62師団野戦病院であった。病院塹には軍医・衛生兵・看護婦、首里高等女学校・昭和高等女学校の生徒から構成された学徒隊などが配属されていた。学徒は病院業務や塹の構築にも関わっていた。塹構築は米軍上陸まで行っていた。学徒の勤務時間は、1日3交替の勤務であったのが、24時間勤務となる。5月20日、撤退命令が出され、ナゲーラ塹を遺棄し、南部へ撤退した。

塹内は奥から山入口部分に向けて、勾配があり、通路床面の両側には細い溝が残っている。塹内壁面にはツルハシの痕がくっきりと残っており、当時の構築作業の様子がわかる。しかし、塹の中樞部分を構成している丘が、土地造成のため数m削られてしまい、それ以前とは様子がだいぶ変わってしまっている。

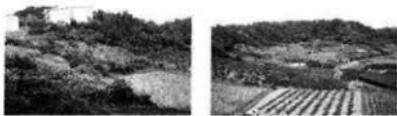
（参考文献）

瑞泉同窓会『首里高女の乙女たち』瑞泉同窓会 1991年
南風原町史編集委員会『南風原町沖縄戦災調査9 新川が跡る沖縄戦』南風原町 1995年

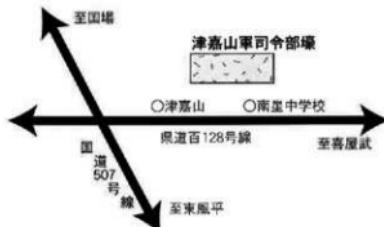


津嘉山軍司令部壕

所在地：南風原町字津嘉山140番地ほか
立地（標高）：丘陵中腹部（約80m）
形態：人工塁
種別：陣地塼
現状：津嘉山集落後方の丘陵中にあり、塼口は
全て埋没している。



保存状況：壕口が埋没
築造者：第32軍
築造年月日：1944年夏頃から開始
戦時中の使用状況：第32軍司令部壕として使用
主な遭撃：構築された構穴遭撃



道路付近の見取図

讀書

津嘉山集落の北側にある高津嘉山とチカシモニに津嘉山軍司令部壕はある。山全体が第三紀泥岩（クチャ）で出来ており、比較的構築は容易である。壕は高さと幅がそれぞれ約2mあり、総延長が2000mである。

第32軍創設当初、軍の司令部は那霸市安里の養蚕試験場内にあった。1944年夏頃から南部地域の住民を徴用し、壕掘り作業を開始した。壕掘り作業は24時間体制で、ツルハシやスコップを使用して行われた。司令部壕は、一本の主抗に数本の副抗がつながっていた。

しかし、津嘉山司令部壕は、壕の強度の問題や司令部として戦場全体を把握できる場所にはないことから第32軍司令部の候補から外され、首里に新たに司令部壕を構築し始めた。津嘉山司令部壕には、経理部のみが置かれた。本壕を第32軍が使用したのは、首里から撤退する時の5月27日から5月29日のみであった。



第9図 建立山軍指令部構概念図

(参考文献)
南風原町史編集委員会『南風原町沖縄戦災調査4 津嘉山が語る沖縄戦』南風原町 1990年

山川の弾痕のあるタンク跡

所在地：南風原町字山川34番地

立地（標高）：平地（約20m）

形態：構築物

種別：弾痕

現状：水タンクの上にあった壁の一部が残り、壁には弾痕の跡が残っている。

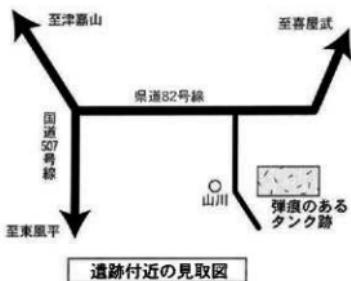
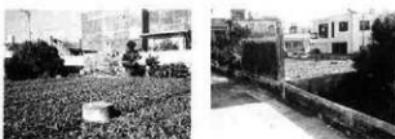
保存状況：道路の脇に弾痕跡のある壁が残されている。

築造者：山川住民

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：本来は水タンクであったが、沖縄戦当時は家財道具を保管するために使用されていた。

主な遺構：水タンク側壁面に残された多数の弾痕跡。



遺跡付近の見取り図

概要

南風原町字山川34番地、屋号「前新屋」の屋敷内に所在する。本来直方体の構造物であったが、現在は道路に面する部分のみがコンクリート塊状に立っている。その表裏には多数の弾痕が残されており、中には貫通した弾痕もある。

コンクリート製水タンクはもとは2基あったようである。水タンクは、戦火が激しさを増すに伴い家財道具入れとして使用されていた。

米軍上陸前、この水タンクを4名山川の住民が集合場所と設定して集まっていた。水タンクに住民が集まつたとき、山川上空を米軍の偵察機が旋回していた。その後、グラマンが飛ってきて、ロケット砲を発射した。ロケット砲は水タンクに命中し、中にいた4名の住民は死傷することとなった。

山川は4月3日から米軍による砲爆撃で犠牲者を出しておらず、戦死者の21%（54名）は山川部落内でなくなっている。



参考文献

南風原町史編集委員会『南風原町沖縄戦災調査』山川が語る沖縄戦 南風原町 1994年

津嘉山の弾痕のある石垣

所在地：南風原町宇津嘉山338番地

立地（標高）：平地（約10m）

形態；構築物

種別：彈痕

現状：民家東側のコンクリート塀の側面に弾痕
が多数残されている。

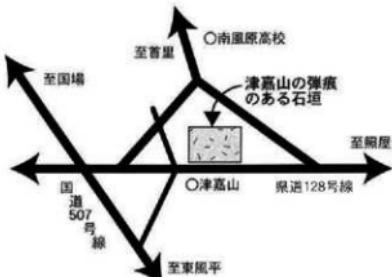
保存状況：道路に面するコンクリート塀が残されている

鑄造者：字洪東山住民

鑄造年月日：不明

難時由の使用状況：屋敷園いとして使用

主な遺構：コンクリート壙に残された多数の弾痕跡



遺跡付近の見取図

概要

南風原町字津嘉山338番地の東側屋敷囲いの道

コンクリート製の屋敷囲いに残された弾痕は、それぞれ大きく、その形状は擂り鉢状を呈している。

民家の辯は陣地として利用されていたわけではない。しかし、その民家の辯に弾痕跡が残されているということは、住民の住む集落が戦闘に巻き込まれたということを示すものである。

南風原には、ほぼ全域にわたって後方支援部隊が配置されていた。津嘉山には、野戦貨物廠本部や要塞建築第7中隊が配備されていた。

沖縄戦は、日本国内では珍しく住民の住む集落が戦場となり、多くの住民が戦闘に巻き込まれた。民家の崩れに弾旗が残っているということは、そのことを如実に示すものである。

しかし、民家に弾痕の残る塀等は家屋の建て替えなどにより取り壊され、それほど多くは残っていない。



(参考文献)

南風原町史編集委員会『南風原町 沖縄戦歴史調査4 津嘉山が語る沖縄戦』南風原町 1990年

第3節 東風平町

第24師団第1野戦病院壕

所在地：東風平町字富盛1680番地ほか

立地（標高）：丘陵中腹（約90m）

形態：人工壕

種別：野戦病院壕

現状：上の壕・下の壕から成る。上の壕は若干落盤している。下の壕は入り口の大半が埋没している。

保存状況：上の壕には看板が設置されている。

築造者：不明

築造年月日：不明

戰時中の使用状況：第24師団第一野戦病院壕として1945年6月4日まで使用。

主な遺構：上の壕（手術室）、下の壕（病室）



道跡付近の見取り図

概 要

第1野戦病院壕は、東風平町字富盛古比屋間原及び前ス嶽原地内、八重瀬公園のある丘陵北面部に所在する。野戦病院壕は、上の壕と下の壕と呼ばれる二つの壕を指す。上の壕は主に手術室として用いられていた。下の壕は患者を収容する病棟として使用されていた。

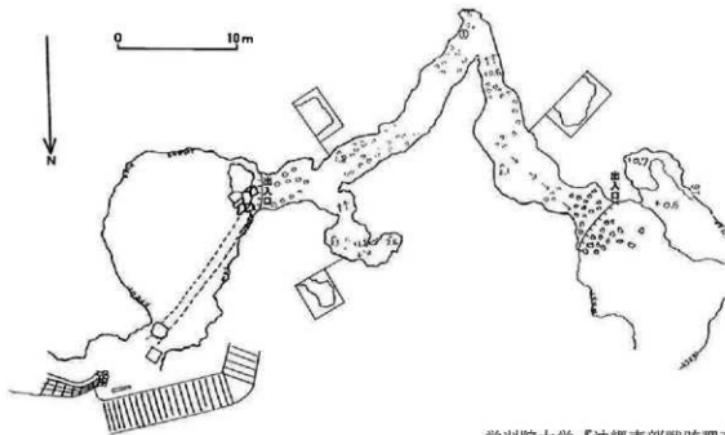
上の壕は琉球石灰岩の地層を掘り込んで造られている。現在の壕内の様子は、高さが約2.5m、幅が約3.0mである。一方、下の壕は第三紀泥岩（クチャ）を掘り込んで構築されている。出入口は2カ所あるとされているが現在確認できる出入り口は1カ所のみである。

野戦病院は、軍医・衛生兵・看護婦の合計が193名が配備されていた。3月23日、看護教育を終えた46名の沖縄県立第二高等女学校の生徒が配備される。生徒達の仕事は、他の看護学徒隊同様、負傷兵の看護や手術の手伝い、水汲み、飯上げ、排泄物の処理、死体埋葬、伝令などであった。病院壕は約500人の患者が収容可能であったが、学徒が配置されてから数日は負傷兵の数も少なく、病院内は比較的静かであった。しかし、3月28日頃初めて、具志頭村港川方面から負傷兵が運ばれてきたのをきっかけに、次第に負傷兵がベッドを埋め尽くすようになる。

1月下旬から5月初旬、新城分院と東風平分院が新たに開設された。5月9日から24時間勤務となつた。6月3日、各分院が閉鎖された。第二高等女学校の生徒は、翌4日、富盛において学徒隊の解散が告げられ、戦場に放置されることとなつた。

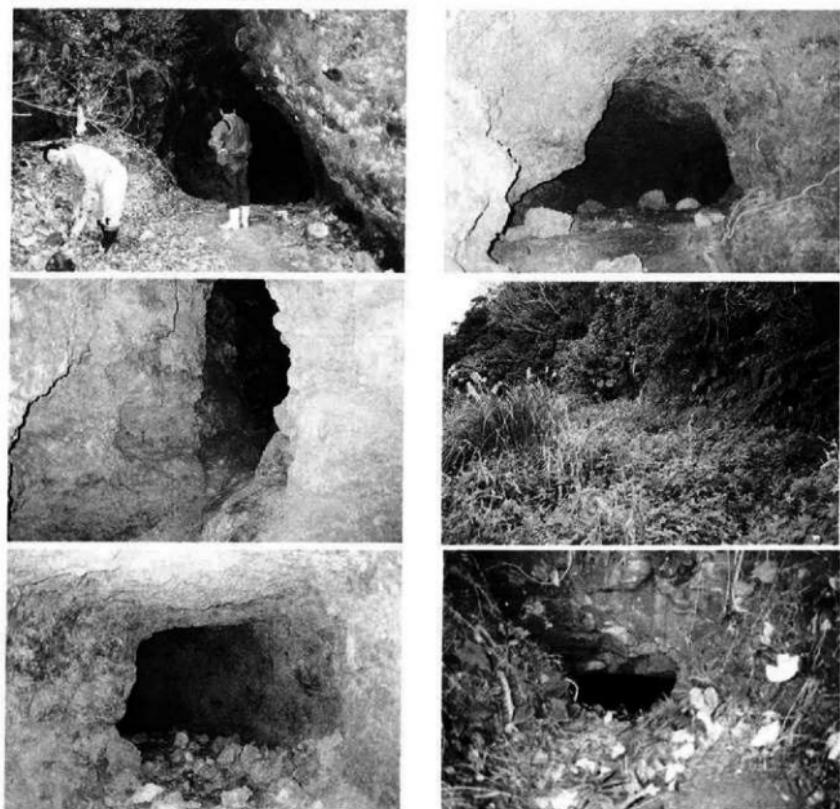
（参考文献）

- 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』朝雲新聞社 1968年
白梅同窓会『平和の道しるべ…白梅看護隊の記録』白梅同窓会 1995年
東風平町史編集委員会『東風平町史 戰争関係資料』東風平町 1999年



第10図 第24師団第1野戦病院壕平面構造図

学習院大学『沖縄南部戦跡調査
第4次調査報告書』1993年 より



野戦重砲兵第1連隊本部壕

所在地：東風平町字当銘333番地ほか
立地（標高）：丘陵中腹（約60m）
形態：人工壕
種別：陣地壕
現状：壕の出入り口は全て埋没
保存状況：雜木林の中に放置されている。

築造者：野戦重砲兵第1連隊
築造年月日：1944年7月下旬～1945年3月下旬頃
戦時中の使用状況：野戦重砲兵第1連隊が本部壕として、後に那覇市の繁多川住民が使用。
主な造構：人工構築による横穴造構



概要

野戦重砲兵第1連隊本部壕は、字当銘と小城との間にある丘陵（ティミグラ森）の地下に構築された壕である。この壕は野戦重砲兵第1連隊の本部壕として構築された。当銘側と小城側の両方から1日1mの目標で掘り進めた。ところが手違いで中央付近で段差が生じてしまった。それで中央付近には階段が取り付けられた。

第24師団が中部の戦闘へ投入されるのに伴い野戦重砲兵第1連隊も那覇市の識名へ配備変更された。そのため、繁多川の壕に避難していた住民との協議によりこの壕と交換することとなった。急速、繁多川の壕から約100名余の住民をトラックで当銘の壕に移動させた。徒歩で移動した住民もいた。繁多川住民は当銘側の壕内で避難生活を始めた。

5月29日、日本兵により壕を追い出される。志多伯の壕へ行くよう指示されるが、その壕には入る余地がなかった。当銘側壕出入り口から東側に十数mの地点にはクバの木があつたが、この木に向かって日本兵が銃を撃つ練習をしていたようである。

（参考文献）

東風平町史編集委員会『東風平町史 戦争関係資料』東風平町 1999年

（証言者）

知念堅兎さん



弾痕のある製糖所煙突跡

所在地：東風平町字宜次439-1番地

立地（標高）：平地（約20m）

形態：構築物

種別：弾痕跡

現状：嘗ての製糖所の煙突が残っており、煙突には多数の弾痕が残されている。

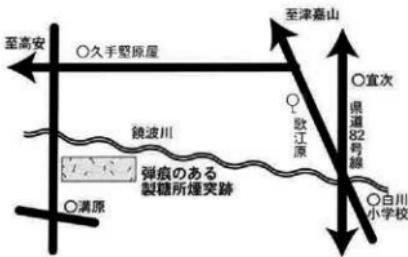
保存状況：烟の中に放置されている。

建造者：住民

建造年月日：1944年頃

戦時中の使用状況：特に無し

主な造構：レンガ造りの煙突部分に残された弾痕



遺跡付近の見取図

概要

弾痕の残る製糖工場の煙突跡は、東風平町字宜次川向原地内に所在する。現存するのは、製糖工場の煙突のみである。煙突の外面部には、多数の弾痕がくっきりと残されている。

この付近一帯は、戦前からキビ作が盛んな所であった。そのような中、糸満市字武富小字溝原の住民が中心となり、製糖機械を買い入れ、レンガ職人を呼び寄せ、製糖工場を建設した。しかし、製糖工場の完成直後に戦争が始まったため、収穫は一期のみに終わったようである。

近代の沖縄において製糖業も徐々に機械化されていった。しかし、沖縄戦によってそのほとんどが損壊し、当時の様子を残すものは少ない。

そのなかで煙突に弾痕の跡が残されている製糖工場の煙突跡は、戦跡であると同時に当時の沖縄産業の様子をうかがい知る上でも重要なものである。

（著者）
當山キヨさん



第4節 与那原町

板良敷トーチカ跡

所在地：与那原町字板良敷1509番地

立地（標高）：丘陵下端部（約20m）

形態：構築物

種別：トーチカ

現状：丘陵斜面下端部にあるため、崩落した土砂でトーチカの半分近くが埋没。隣接する農地の物置小屋として利用されている。

保存状況：農地の一隅に放置されている。

築造者：海軍

築造年月日：1944～45年頃

戦時中の使用状況：不明

主な遺構：コンクリート製トーチカ



遺跡付近の見取り図

概要

トーチカ跡は字板良敷集落の南端に位置している。後背地を第三紀泥岩（クチャ）で形成された丘陵、前面にはなだらかな畠地帯が広がる。現在、海岸線までの距離は直線距離にして、約300m程度である。

沖縄戦当時、トーチカ跡から東へ約100mほど離れた場所に海軍の魚雷格納庫が3カ所設置されていた。また、トーチカ跡の脇の道を西へ行くと、魚雷調整班の壕があったようである。

戦後、中城湾の佐敷町沖から魚雷が引き上げられた。また戦中、壕内において兵が魚雷を磨いていた所を住民が見ている。このようなことから壕の周辺には魚雷調整班が配置されていたのは間違いないであろう。

のことからトーチカ跡は、海軍の魚雷部隊の施設の一部であったと考えられるが確かなことは不明である。

トーチカ跡はコンクリート製で蒲鉾形を呈する。トーチカ跡の構造は、長さ約3.64m、幅約4.0m、室内床面から天井の天端部分が約2.37mを測る。コンクリートの厚さは平均1m程度で、頑丈な造りとなっている。室内と室外との高低差からすると、かなり土砂で埋没していることが推測される。

トーチカ跡の外壁には機銃掃射による弾痕の跡が残っている。

（参考史料）

防衛庁防衛研究所図書室蔵「大東亜戦争 戦時日誌 第三十七魚雷測査班」1945年

（証言者）

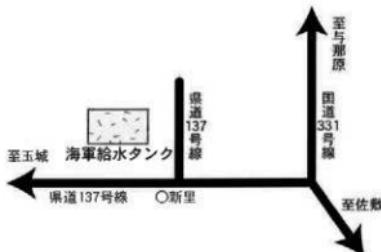
金城勇光さん



第5節 佐敷町

海軍給水タンク

所在地：佐敷町字新里205番地
立地（標高）：緩斜面地（約20m）
形態：人工構築物
種別：海軍給水タンク跡
現状：ほぼ完形に近い状態で残存
保存状況：雑木林の中に放置されている
築造者：海軍
築造年月日：1894年頃
戦時中の使用状況：未使用
主な造構：レンガ造りの給水タンク



遺跡付近の見取り図

概要

給水タンクは、佐敷町字新里、樋川原地内に所在する。新里集落が立地する緩斜面地の比較的上方に位置し、宅地で取り囲まれている。

給水タンクはレンガ造りでその内面にはモルタルが塗られている。タンクの形状は大小の直方体を二段重ねにしたような形状である。真上から見ると、上部の直方体はほぼ正方形を呈する一辺の長さが約260cmを測り、下部の直方体も同様にはほぼ正方形で一辺の長さは約276cmを測る。外面の高さは最大値で約250cm、内部の深さは天端から玉砂利上面まで約210cm、壁面の長さは約35～40cmである。

給水タンクの壁面中央部分に取水口と思われる直径約6cmのパイプがあり、地表面には、送水口と思われる直径約15cmのパイプがある。また、給水タンクの頂上部分には、オーバーフローのための排水用と思われるパイプがある。

給水タンクは日清戦争時に建造されたものであると思われる。給水タンクの所在する土地は、建造時に海軍が買収していたため国有地となっている。

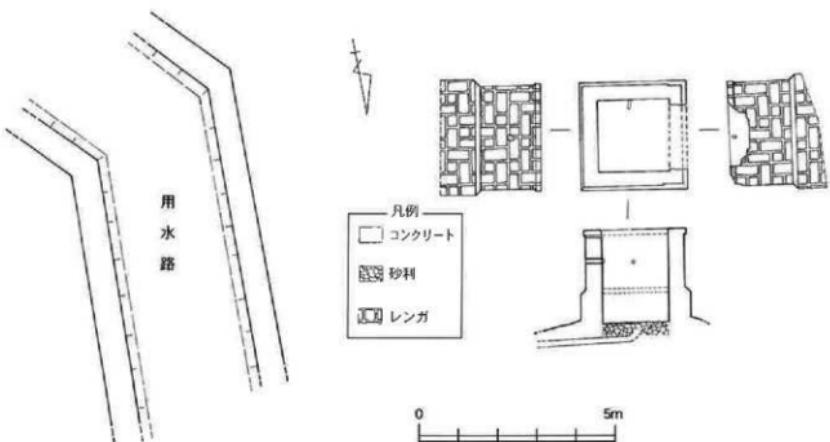
給水タンクは、樋川ガートから取水した水を溜めていた。この給水タンクに蓄えられていた水は送水パイプから字津波古の給水施設に送られていた。字津波古の給水タンクへ蓄えられた水は、中城湾へ寄港した艦船へ送水されていた。給水タンクは海軍の重要な後方施設であったといえる。

給水タンクの底方に直径10cm前後の大きさの玉砂利や瓦類などが敷き詰められており、送水口がその下にあることから、取水した水のゴミなどを取り除く、ろ過装置としての機能をもっていたと思われる。

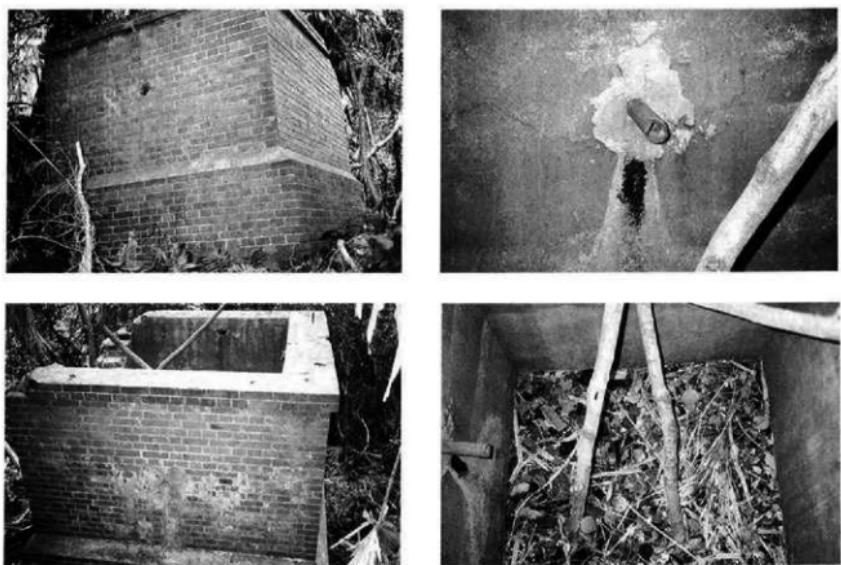
この給水施設は、沖縄戦の時は使用されていなかったようであるが、機銃による弾痕のあとがいくつか残っている。

（参考文献）

佐敷町史編集委員会『佐敷町史 4 戰争』佐敷町役場 1999年



第11図 海軍給水タンク実測図



佐敷の役場壕（タキノウノ壕）

所在地：佐敷町字佐敷1291番地

立地（標高）：丘陵中腹（約60m）

形態：人工壕

種別：役場壕

現状：出入り口に多少土砂が流入している。

保存状況：山林中に放置されている。

築造者：佐敷役場

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：役場関連書類などの緊急避難場所として使用された。

主要な遺構：横穴式構築壕中にカマド跡、明かり取りなど



遺跡付近の見取図

概要

佐敷の役場壕は、宇佐敷島之上原地内の陸上自衛隊知念分屯地と佐敷小学校とのほぼ中間地点にある丘陵の中腹部に所在する。現在、壕は3ヵ所確認されている。

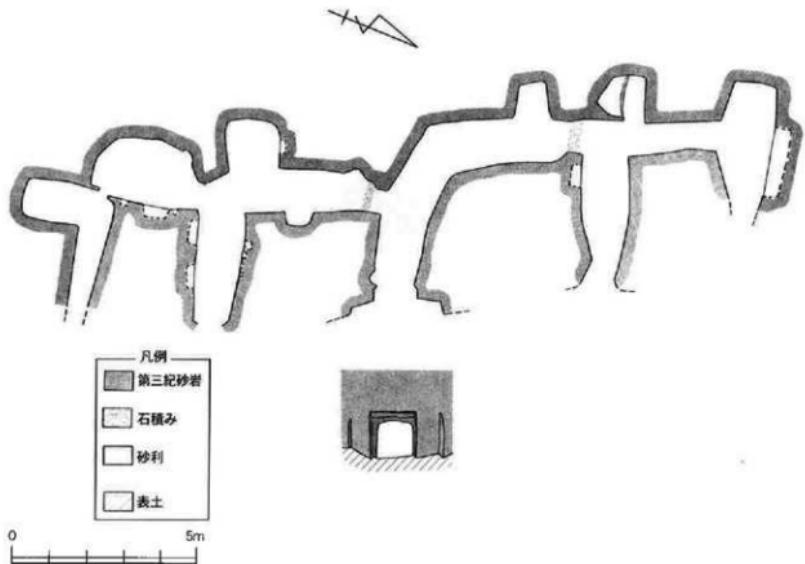
土質は第三紀砂岩（ニーピ）で堅く締まっており、崩落箇所は見られない。殆どの壕が斜面に対して垂直に掘られており、各々の壕が中で連結されている。壕の内部の構造は、高さ約1.2~1.3m前後、幅約1mを測る。崩落、土砂の堆積等はほとんど見られることから、構築時からこの構造であったと考えられる。

壕の壁面には、蠟燭台や棚状のものが設けられている。蠟燭台の上部には、現在でも煤の跡がはっきりと残っている。壕によっては内部にカマドを有する所がある。周辺には炭化物や灰状のものが散乱する。

また、壕の中には、扉を設置したのではないかと思われる構造の壕口を持つものがある。

佐敷の役場壕の詳細な使用目的は不明であるが、具志頭村などの役場壕と同様に書類等の保管場所として利用していた。

(参考資料)
佐敷町による調査より



第12図 佐敷の役場壕平面遺構図及び立面図



フナクブ洞穴

所在地：佐敷町字手登根赤地原（一部は知念村
字久手堅）

立地（標高）：台地縁端部（約150m）

形態：自然洞穴

種別：陣地塹

現状：知念村と佐敷町の境界線近くにあり、ド
リーネ内に3つの壕が開口している。

保存状況：原野に放置されている。

築造者：不明

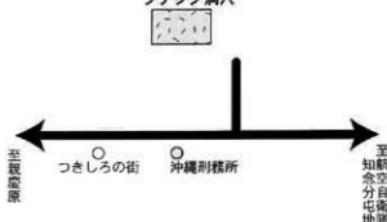
築造年月日：不明

戦時中の使用状況：独立混成第15連隊第2大隊
の大隊本部、通信隊、医务室として使用

主な遺構：入口の爆風除けの石垣等



フナクブ洞穴



遺跡付近の見取り図

概要

フナクブ洞穴は、佐敷町字手登根赤地原地内
と知念村字久手堅にまたがって所在する。佐敷
町字つきしろから沖縄刑務所に向かう県道から
左手に約200m入った所に出入り口がある。

この壕は琉球石灰岩によって形成された知念
台地の縁端部に位置する。大きなドリーネの中
の3つの自然洞穴には、知念国民学校に駐屯して
いた独立混成第15連隊第2大隊の大隊本部、
通信隊、医务室などが入っていた。知念村役場
の職員も部隊本部と同居していたようである。

大隊本部は1945年4月頃、首里戦線の戦闘に
投入され、首里方面へと移動した。

壕の一番奥まった開口部の前面部には高さ約
1m、幅約1m、長さ約10m前後の爆風除けの
石垣が築かれている。

（参考文献）

石原昌家『虐殺の島 皇軍と臣民の木路』 晩晴社 1978
年

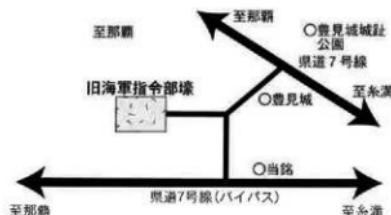
知念村史編集委員会『知念村史 戦争体験記録 知念の
文献資料』 知念村役場 1994年



第6節 豊見城村

旧海軍司令部壕

所在地：豊見城村字豊見城236-1番地
立地（標高）：丘陵頂上部（約70m）
形態：人工壕
種別：海軍司令部壕
現状：観光目的に1970年修復された。
保存状況：（財）沖縄観光コンベンションビューローが管理している。壕総延長450mのうち275mが公開されている。公園整備により、周辺にあった壕が破壊された。
築造者：第226設営隊・山根部隊
築造年月日：1944年8月～12月頃
戦時中の使用状況：海軍沖縄根拠地隊司令部壕
主な遺構：司令官室、作戦室、幕僚室など



遺跡付近の見取り図

概要

豊見城村字豊見城火番原地内の最も高い場所に構築された海軍司令部壕である。

1944になると小禄飛行場守備を主任務とする沖縄方面根拠地隊が設置され、1945年1月海軍少将大田実が司令長官として沖縄に着任した。陸海軍の間で「南西諸島作戦に関する現地協定」によって、根拠地隊は米軍上陸と同時に第32軍の指揮下に入り、陸上部隊として地上戦闘に参加することになった。当時の海軍は沖縄根拠地隊を中心に約1万人の兵員で構成されており、その中の8000名が小禄地区に配備されていた。根拠地隊は3分の1が小銃を装備しており、残りは槍を持っているという状況であった。

第32軍司令部の首里撤退に伴い、根拠地隊も真栄平へ撤退する事になっていた。海軍の撤退の期日は、6月2日であったが、電報による命令を誤認して5月26日に撤退を開始してしまった。命令が誤認であることが判明した後、根拠地隊は小禄地域の守備に戻ることになった。しかし、撤退に伴い重火器類を米軍に使用させないために破壊していた。

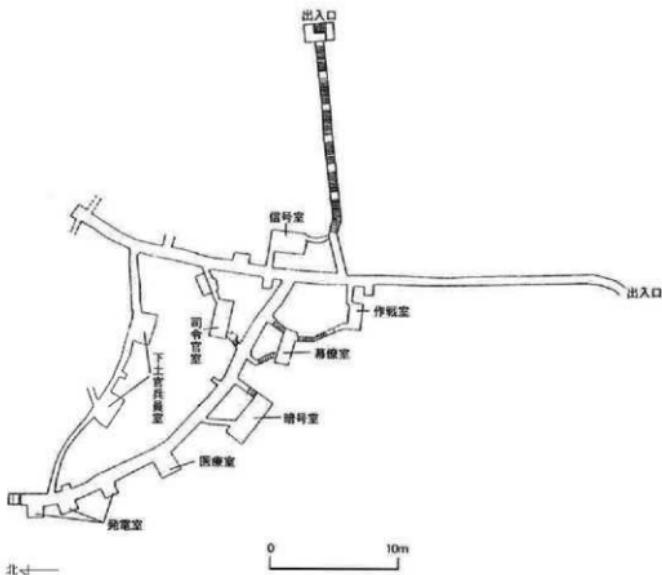
根拠地隊は真栄平から本壕にもどつてからは、陸軍の輸送支援を行いその後、喜屋武半島に撤退する予定であった。しかし、6月4日、米第6海兵師団が小禄飛行場沖から上陸して来たため撤退することが不可能となってしまった。6月6日、大田司令官は訣別電を発した。

6月13日、大田司令官をはじめとする根拠地隊は玉碎した。

海軍壕は1970年に観光目的に修復された。その後、1981年に測量、地質調査などの安全対策の基礎資料としての調査が行われた。1999年7月、資料館等の改築を行い海軍壕公園として整備された。

（参考文献）

防衛省防衛研修所歴史室『歴史叢書・沖縄方面海軍作戦』朝雲新聞社 1968年
宮里一夫『沖縄旧海軍司令部壕の軌跡』ニライカ社 1986年



第13図 旧海軍司令部壕平面造構図

『旧海軍司令部壕保全調査報告書』1981年 より
財団法人沖縄県観光開発公社・国建設計工務株式会社



第24師団第2野戦病院壕

所在地：豊見城村字豊見城910番地

立地（標高）：丘陵中腹（約50m）

形態：人工壕

種別：野戦病院壕

現状：土質が第三紀泥岩（クチャ）のため、壕内各所で乾燥による崩落が進行している。

保存状況：壕の一部は落盤防止のための鉄骨による支柱を設置し、観光用として開放している。

築造者：軍隊

築造年月日：1944～45年頃

戦時中の使用状況：第24師団第2野戦病院壕として1945年5月27日頃まで使用。

主な遺構：隊長・将校室、手術室、病室など



遺跡遠景

遺跡近景



概要

第24師団第2野戦病院壕は、豊見城村字豊見城後原地内、豊見城城址のある丘陵北東端部にある。漫湖を北に、そして東側を鏡波川に挟まれた海拔約50mの高台に立地する。1944年頃から45年5月頃まで、人力で掘り込み構築した野戦病院壕である。

病院は軍医・衛生兵・看護婦等の合計194名のスタッフで構成されていた。3月23日、25名の積徳高等女学校生から構成される看護学徒隊が配置される。生徒達の仕事は、負傷兵の看護や手術の手伝い、水汲み、飯上げ、排泄物の処理、死体埋葬、伝令などであった。

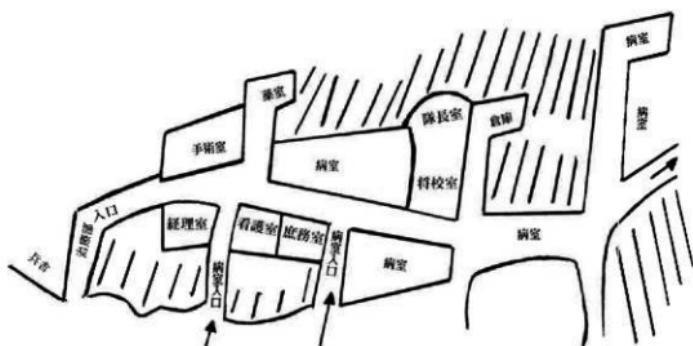
配置された3月下旬～4月上旬頃までは、負傷兵の数も少なく、壕内は静かであった。しかし、4月中旬頃から宜野湾や浦添などの前線から、負傷兵が運ばれて来るようになった。やがて医薬品の数量も少なくなり、患者の傷口から蛆が湧くようになる。学徒看護隊の勤務も不眠不休に近い状態が続き、疲労も極限に達していた。

5月27日、糸洲にある自然洞穴・糸洲の壕に移動することとなり、同病院は遺棄される。撤退の際、重傷患者には手榴弾を渡し撤退したようである。

現在、壕内的一部は落盤防止策として、鉄骨による支柱が設置され、観光用に開放されている。

（参考文献）

積徳高等女学校昭和20年卒同期会『積徳高等女学校昭和二十年卒 野戦病院 血と涙の記録』積徳高等女学校昭和20年同期会 1999年



第14図 第24師団第2野戦病院概念図

積徳高等女学校昭和20年卒同期会『積徳高等女学校昭和二十年卒 野戦病院 血と涙の記録』1999年 より



アカサチ森軍構築壕

所在地：豊見城村字瀬長71-1番地ほか

立地（標高）：丘（約20m）

形態：人工壕

種別：陣地壕

現状：北及び西側に開口部がある。丘の南側部分が破壊されており、壕の残存率は半分以下であると推測される。

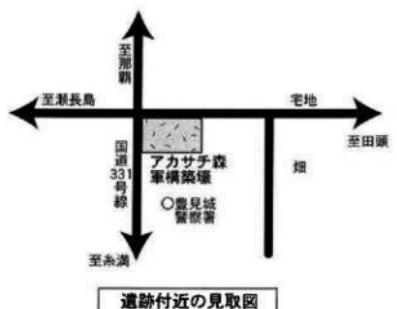
保存状況：原野に放置されている。

築造者：軍隊

築造年月日：1944～45年頃

戦時中の使用状況：軍の陣地壕として使用

主な遺構：交差する坑道及び井戸跡



概要

豊見城村字瀬長舟無小原地内に所在する。瀬長集落の南西方向にある赤崎森という小高い丘の中に構築された陣地壕である。

赤崎森周辺には、歩兵第22連隊第1大隊第1中隊が配備されていた。そのことからアカサチ森軍構築壕は、この部隊が使用していたと思われるが、詳細は不明である。

壕は、土質が第三紀砂岩（ニービ）で壕口が2カ所残っている。北側壕口からは幅約3～4m、高さが約2mを測る坑道が掘られており、その坑道の西側壁面には約1m間隔で坑木跡がくっきりと残っている。壕内には幅約1m、高さ約2mを測る坑道が多数交差するように残っている。また、西側出入口に抜ける途中に溜め水を利用した四角形の井戸が掘られている。

2000年のサミット開催の際に、壕の所在する丘の南半分が削り取られた。

（参考文献）

嘉陽安進『沖縄戦記 歩兵第二十二連隊の最後』吉原利安 1993年

（参考資料）

豊見城村史戦争編聞き取り資料



保栄茂の軍監視所

所在地：豊見城村字保栄茂766-1番地ほか

立地（標高）：丘陵頂上部（約100m）

形態：人工塹

種別：監視所

現状：丘陵の頂上付近の岩を割り抜いてて構築されており、戦後手を加えられた様子はない。

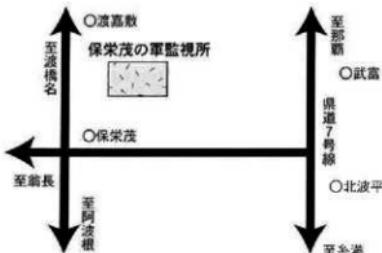
保存状況：原野に放置されている。

築造者：軍隊

築造年月日：1944～45年頃

戦時中の使用状況：不明

主な遺構：L字形に構築された陣地塹と銃眼



概要

豊見城村字保栄茂城の下原地内に所在する軍構築塹である。保栄茂集落の東側に位置する標高約100mの丘陵頂上部の岩山に構築されている。

塹は岩を掘り込んで造っており、内部はL字形の構造となっている。塹口は土砂の堆積により非常に狭くなっているが、中は幅と奥行きが約3m、天井までの高さが約2mを測る。

天井西側部分には内径約1m、外径約1.5m程度の細長いコンクリートで固めた銃眼がある。この銃眼からは与根・瀬長方面を眺望することができる。また、丘陵頂上は標高約105mであり、周囲を見渡すことができる。

保栄茂の監視所には野砲兵42連隊が配備されていたといわれている。糸満海岸からの米軍の上陸に備えたものであったと考えられる。

（参考文献）

葛陽安進『沖縄戦記 歩兵第二十二連隊の最後』古原利安 1993年

（参考資料）

豊見城村史戦争編聞き取り資料



瀬長の軍構築壕

所在地：豊見城村字瀬長106番地

立地（標高）：丘陵中腹部（約15m）

形態：人工壕

種別：陣地壕

現状：壕内に一部に落盤箇所あり。壕内にはかなりの土砂が堆積している。

保存状況：原野に放置されている。

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：軍隊が陣地として使用。

主な遺構：人工的に掘られた横穴構造。



遺跡遠景



遺跡近景



概要

瀬長集落の北側約100mの地点に所在する。一帯の土質は加工が容易な第三紀砂岩（ニービ）である。このため周辺の丘陵には昔からこの土壤を割り抜いて造った墓が多数ある。

壕開口部の一つは瀬長集落側にあり、もう一方は那覇市具志側に開口している。瀬長側の開口部は、古墓の下部を掘り抜いて造られており、内部で上方の古墓と一緒にとなり、より大きな空間を形成している。

壕高さは約1.4m前後である。床面はかなり土砂が堆積している。壁が掘り込まれた坑木痕らしきものが一部残っている。具志集落側は土地がかなり削られている。具志側内部で天井が大きく落盤している。

この壕の周辺には、歩兵第22連隊第1大隊第1中隊が配備されていた。しかし、実際この壕を使用した部隊は不明である。

（参考文献）

嘉陽安進『沖縄戦記 歩兵第二十二連隊の最後』吉原利

安 1993年

（参考資料）

豊見城村史戦争編開き取り資料



田頭の軍構築壕

所在地：豊見城村字田頭334番地

立地（標高）：丘陵下部（約15m）

形態：人工壕

種別：陣地壕

現状：壕内には水が溜まっているが、崩落箇所
はあまり無い。

保存状況：墓地内に放置されている。

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：軍隊が陣地壕として構築

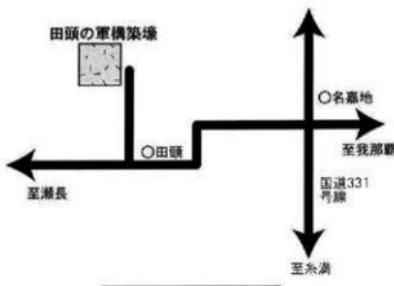
主な遺構：人工的に掘られた横穴遺構



遺跡遠景



遺跡近景



遺跡付近の見取図

概要

田頭集落の北端部に所在する。周辺は墓地地帯となっており、その一角に開口している。

上質は壕の構築が比較的容易な第三紀砂岩（二一ビ）である。壕内には数十cm以上の水が溜まっており、床面には汚泥が沈殿している。壕口から見える範囲では、壕の構造はL字形を成しており、直線部分では、左右に所々小部屋の存在を確認することが出来る。

壁面はきれいに削られている。壕口から奥に向かって1mおきに算用数字が壁面に刻まれている。6～8までの数字が確認できる。壕の天井の高さは約1.8m、幅約1.8m、奥行きは直線部分だけで約20～30mとなっている。壕の全体構造は不明である。壕口の前には、堀切のような盛土が残っている。

この壕の周辺には対戦車用の戦車壕などが構築されており、独立速射砲第3大隊が配備されていた。

（参考資料）

豊見城村史戦争編聞き取り資料



メーヌモー塹

所在地：豊見城村字我那覇565-2番地ほか
立地（標高）：小高い丘の下端部（約8m）
形態：人工塹
種別：住民避難壕
現状：内部はほぼ当時のまま、塹口は上砂などで埋まりかけている。
保存状況：原野に放置されている。
築造者：我那覇住民
築造年月日：1944年10月以前
戦時中の使用状況：住民が避難壕として使用。
主な遺構：人工的に掘られた横穴遺構



概要

豊見城村字我那覇佐真下原地内、通称メーヌモーに所在する。

集落南端の民家の横にあり、切り立った第三紀砂岩（ニービ）の小高い丘の下端部に3カ所横穴式に構築された壕である。幅約1.5m前後、高さ約1.3m奥行きは2~4m程度である。断面形状は蒲鉾状を呈する。現在、塹口は雑草や上砂などが投げ込まれており、ふさがりかけている。

この壕は、家族単位で避難した壕である。我那覇の住民は十・空襲時にはすでにこの壕に避難していた。我那覇の住民の大半は、米軍が侵攻してきたとき集落近辺に避難していた。この壕にも我那覇の住民が避難していた。この住民に対して米軍は沖縄出身者を使い投降の呼びかけをした。大半の住民は勧告を受け入れたが、この壕に隠れていた一家族は、勧告に来た者を竹槍で殺害した。このことが原因となり、米軍に手榴弾で殺害され一家全滅している。この壕の周辺にも多数の避難壕が残っている。



(参考資料)

豊見城村史戦争編聞き取り資料

名嘉地の住民避難壕

所在地：豊見城村字名嘉地153-2番地ほか

立地（標高）：平地（約10m）

形態：人工壕

種別：住民避難壕

現状：各壕ともゴミや土砂によって壕口が塞がれている。

保存状況：原野に放置されている。

築造者：伊良波住民

築造年月日：1944年頃

戦時中の使用状況：住民避難用の壕として使用された。

主な遺構：人工的に掘られた横穴遺構



概要

豊見城村字名嘉地屋無垣原地内に所在する。酒造会社の東側にあり、県道68号線から名嘉地集落へ通ずる道路の西側に開口している。壕は第三紀砂岩（ニービ）である。

道路の西側部分には9カ所の壕口があるが、その殆どは土砂やゴミ等で殆どふさがりかけた状態となっている。また道路の東側部分にはコンクリートでふさがれた箇所が2カ所確認出来る。大きさは約50～60cm、高さ約1m前後で、奥行きもそれほど深くはない。

道路の拡張工事等によって壕がかなり削り取られていることが推測されるが、それでも比較的規模の小さな人工壕である。

この壕は、名嘉地と伊良波の境目にあり、伊良波の住民が避難壕として構築したようである。

(参考資料)

豊見城村史戦争編聞き取り資料



第7節 具志頭村

クラシンジョウの壕

所在地：具志頭村字具志頭1434番地ほか

立地（標高）：台地中腹（約40m）

形態：自然洞穴（一部人工壕）

種別：陣地壕

現状：壕内の落盤はほとんど観測されない。

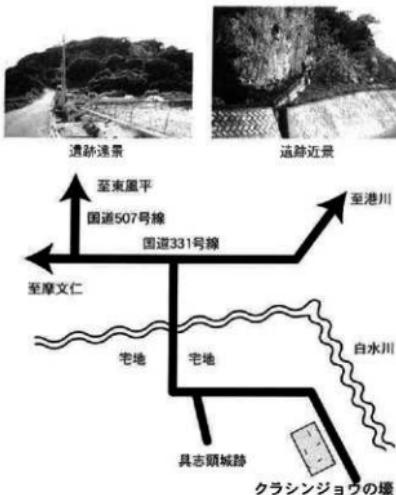
保存状況：人工壕の入口付近は外の丘陵側面部
分が削り取られ、擁壁で固められている。

築造者：軍隊

築造年月日：1944～45年

戦時中の使用状況：軍陣地壕として使用された。

主な遺構：カマド跡、銃眼、坑木跡など。



概要

クラシンジョウの壕は、具志頭村字具志頭須武座原地内に所在する。具志頭城跡のある岩山の側面部分にある自然洞穴と構築した壕でできている。自然洞穴部分にはカマド跡を残す炊事場や石積みで囲った区画部分が数ヶ所確認される。

構築した坑道部分の両側には、坑木の跡・蠅燭台の跡などがくっきりと残されている。通路の大きさは高さ・幅とも約2m前後の部分と、幅約1m、高さ約2mを測る部分がある。南側に隣接する独立した岩場には、古墓を利用した銃眼が設置されている。銃眼部分はコンクリート製であり、鉄の骨組みが現在でも残っている。

壕の構築は、第9師団が配備されていた頃から行われていたと思われるが、詳細は不明である。また、米軍上陸時には、この壕には第89連隊第2機関銃中隊が配備されていた。日本軍は米軍の港川上陸に備えて、玉城からこのクラシンジョウの壕まで港川を囲むように部隊を配備していた。この部隊は港川を囲むように配置されていた部隊の一部である。

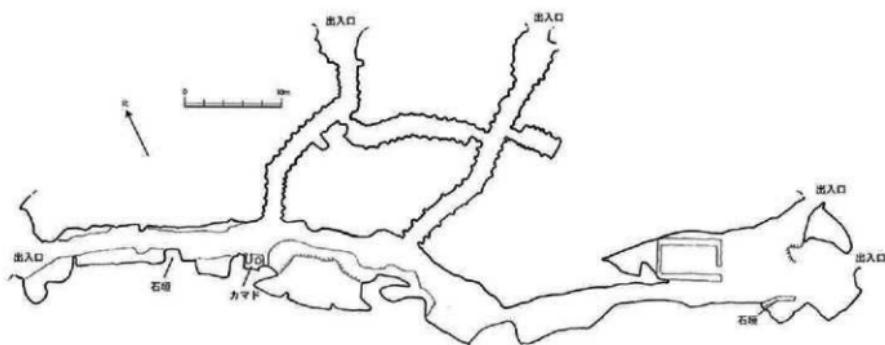
摩仁へ司令部を移した後は部隊の配備変更により、独立混成第15連隊が使用していたようである。

（参考文献）

防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』朝美新聞社 1968年

（参考史料）

防衛庁防衛研究所図書館蔵「陣中日誌 第八十九連隊第二中隊」 1944年



第15図 クラシンジョウの壕平面造構図

沖縄平和ネットワーク提供



ヌスマチ・ガラビ壕

所在地：具志頭村字具志頭781-1番地（ヌスマチ）

具志頭村字新城2093番地（ガラビ）

立地（標高）：丘陵（約75m）

形態：自然洞穴（一部人工壕）

種別：野戦病院壕・陣地壕

現状：ヌスマチガマ側は土砂の流入がある。

保存状況：平和教育の場として使用されている。

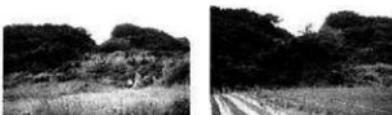
具志頭村により看板が立てられた。

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：軍の陣地壕と野戦病院壕

主な遺構：銃眼、井戸、カマド跡など



概要

ヌスマチ・ガラビ壕は、具志頭村字新城の東側丘陵中に位置する全長が約500m以上ある自然洞穴である。この壕は、西側の出入口がヌスマチガマ、東側の出入口がガラビ壕と呼ばれている。この一帯は自然洞穴が多数存在する地域である。

この壕は、第24師団第1野戦病院の新城分院として利用されたが、それ以外に陣地としても利用されていた。本壕周辺には、陣地壕跡、塹壕跡、砲座跡、銃眼跡が残っている。

米軍上陸時、本壕の陣地周辺には第24師団歩兵第89連隊第2大隊が配備され、港川を包囲するように配備されていた日本軍配備の一角落を担っていた。

新城分院には県立第二高等女学校の生徒が5名配備された。分院となる以前、本壕は第2大隊の治療室としての機能を持っていた。まず、4月上旬に富盛の第1野戦病院から軍医1名、看護婦1名、学生2名が派遣された。その後、徐々に人員が増員されたようである。

壕内にはカマドが設けられ、近隣集落の女子青年団などが炊事を行っていた。

新城分院は、6月上旬閉鎖された。分院閉鎖の際、動けない負傷兵に対しては青酸カリによる処置が行われた。また、青酸カリの処置により死にきれなかった負傷兵に対しては、頭部に銃で弾丸を撃ちとどめを刺していた。ガラビ壕には一時期頭部に穴のあいた白骨死体が残っていたが、これはそのとき銃殺された負傷兵のものと思われる。

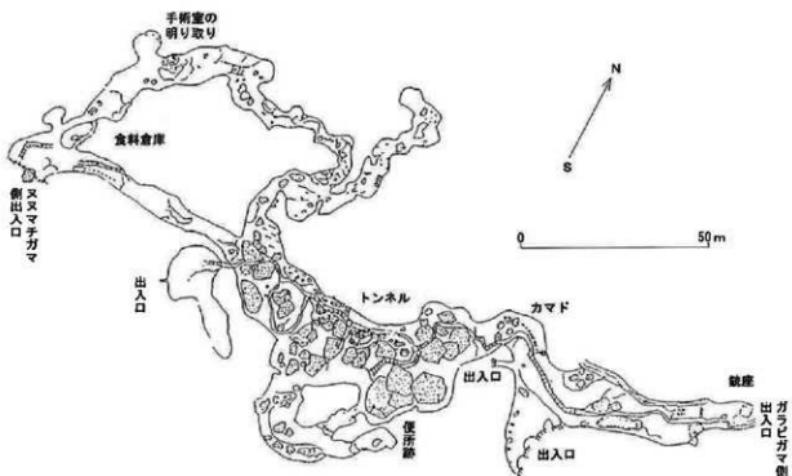
現在ガラビ壕は、観光客や修学旅行生などへの平和学習の場・戦争遺跡として活用されている。

（参考文献）

防衛庁防衛研修所歴史室『歴史叢書 沖縄方面陸軍作戦』朝雲新聞社 1968年

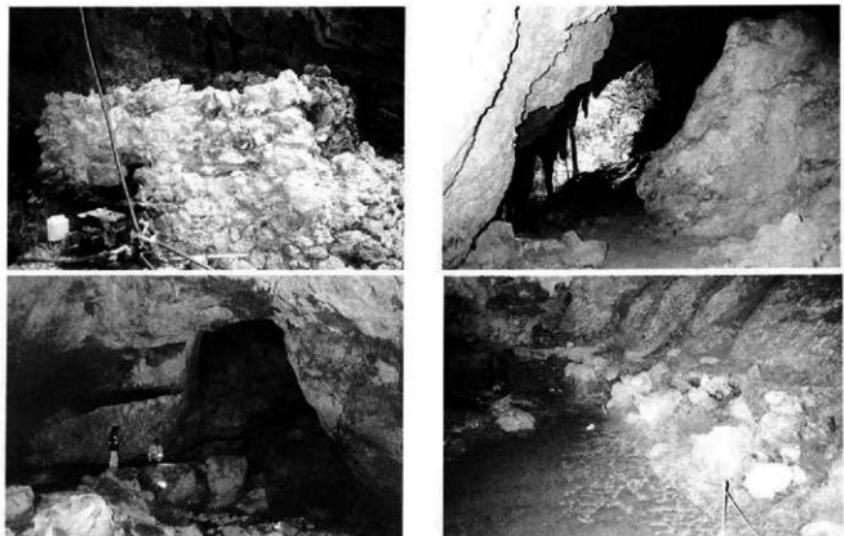
歩兵第八十九連隊史編集委員会『歩兵第八十九連隊史 破竹』歩兵第八十九連隊史編集委員会 1978年

白梅同窓会『平和の道しるべ…白梅看護隊の記録』白梅同窓会 1995年



第16図 ヌスマチ・ガラビ塹平面構造図

学習院大学探検部『沖縄戦南部戦跡第二次調査報告書』1992年より



長毛の特攻艇秘匿壕群

所在地：具志頭村字長毛150番地ほか

立地（標高）：川岸（約2m）

形態：人工壕

種別：特攻艇秘匿壕

現状：河川工事で一部が損壊。

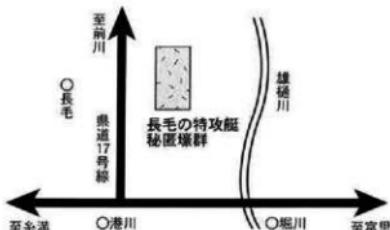
保存状況：河川沿いに放置されている。

築造者：海上挺進基地第28大隊

築造年月日：1944年2月

戦時中の使用状況：海上挺進隊第28大隊基地

主な遺構：7カ所の特攻艇秘匿壕がある。



跡跡付近の見取図

概要

特攻艇秘匿壕は、玉城村と具志頭村境の雄樺川沿いの西岸に位置し、具志頭村字長毛原地内に所在する。雄樺川は川幅が広い所で約10m内外、狭い所で4m内外を測る河川である。

平成11年度の雄樺川河川改修事業により、2カ所の秘匿壕の壕口が塞がれた。特攻艇秘匿壕として使用されたことが確認可能な壕が5カ所残っている。それぞれ壕内の幅約3m、高さ約2m、奥行き約20m前後を測り、構造がほぼ同一形態となっている。

この一帯は琉球石灰岩（地元では通称・栗石と呼ぶ）に覆われており、壕はそれを掘り込んで構築している。壕の構築状況については不明な点が多い。

長毛周辺には海上挺進第28戦隊の鈴木隊（玉城村字志堅原）、稻田隊（具志頭村白水川下流域）、大田隊（具志頭村字長毛）という3つの部隊が配備されていた。

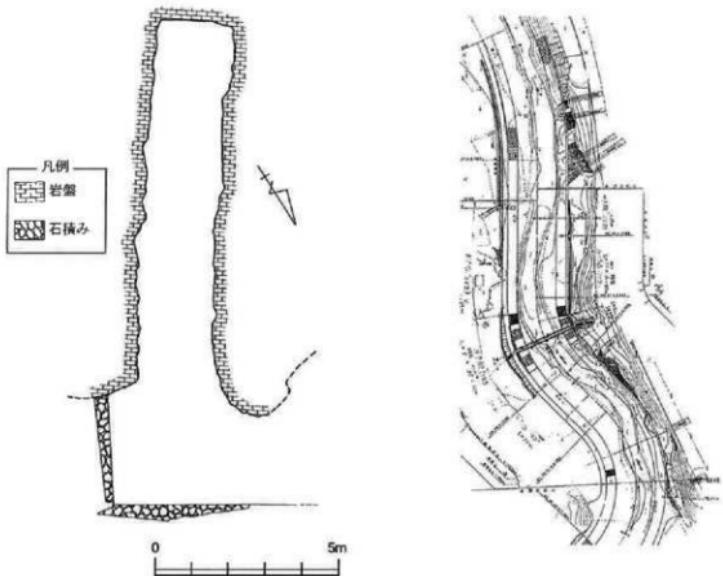
当壕群を本拠地にしていた大田隊は3部隊中最大規模の部隊で、3～4分隊から構成され、1分隊あたりの人数は30～40名程度であった。1つの壕には4～5艇が収容されていた。①型特攻艇は長さ5.6m、高さ1m、全幅1.8mであった。壕群の中で最も上流にある壕は、特攻艇の修理工場として使用されていた。この壕には修理技術者がおり、修理専門の陣容であった。

5月初旬、全ての特攻艇を豊見城村字高安方面に移動させた。5月末頃、大田隊は壊滅状態、隊員はバラバラになり、以後は自由行動となった。

現在、壕内はかなり土に埋もれた状態にあるが、沖縄戦当時は満潮時の水位が壕内の地面とほぼ同じ高さだった。

参考文献

若潮会・歴史編集委員会『①の歴史－陸軍水上特攻・船舶特幹の記録－』船坂弘 1971年



第17図 長毛の特攻艇秘匿壕平面造構図



新里塙

所在地：具志頭村字新城2141番地

立地（標高）：丘陵中腹部（約50m）

形態：自然洞穴

種別：軍陣地塙、住民避難塙

現状：塙内には沖縄戦当時の遺物が多数残されている。

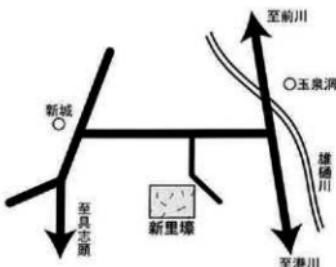
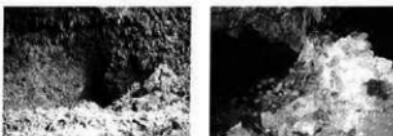
保存状況：具志頭村が標注を建てている。

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：軍の陣地塙及び新城集落を中心に戸周辺の住民の避難塙として使用。

主な遺構：石積みによって形成された平坦面。



遺跡付近の見取図

概要

字新城集落の南東方向へ約400mの距離に位置する。塙口周辺は雑草が生い茂っており、粗大ゴミなどが投棄されている。塙に向かって左側には複数の風葬墓がある。塙内には小川が流れているが、悪臭を放っている。塙内部には平坦な岩場が形成されており、沖縄戦当時に使用されたと思われる生活用雑器類が多数残存している。

当初、歩兵第89連隊第2大隊第7中隊が新里塙を使用した。3月23日から新城を中心とする住民が避難塙として使用していた。日本軍が、6月4日に塙内の住民に対して立ち退きを命じ、住民の食料等を焼き払った。

その後、新里塙には敗残兵や避難民が隠れていた。しかし、米軍から攻撃を受けて捕虜になり約100名が収容されるが、6月下旬まで塙内に隠れていた家族もいた。

（参考文献）

琉球政府『沖縄県史 第9巻 各論編8 沖縄戦記録』
琉球政府 1971年

具志頭村史編纂委員会『具志頭村第二卷通史編（歴史編・教育編・沖縄戦編）』具志頭村 1991年

沖縄平和ネットワーク『沖縄平和ネットワーク会報 第21号 根と桿』村上有慶 2000年



イームイの壕

所在地：具志頭村字具志頭207-3番地

立地（標高）：平地（約50m）

形態：自然洞穴

種別：住民避難壕

現状：崩落等はない。

保存状況：集落内に放置されている。

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：字具志頭住民が避難用として使用

主な遺構：壕西側出入り口付近の内部に棚状の石積み遺構等



跡付近の見取図

概要

イームイの壕は、具志頭集落内に所在する自然壕である。

壕出入り口は、巨大ドリーネを形成している。西側開口部へは、民家の敷地内からドリーネ内にある烟を降り入る。

壕内はすぐ二手に分かれるが、右側は行き止まりとなる。左手に進むと所々に石積みによって造られた棚状の遺構が残っている。その場所及び周辺部には碗・皿・甕などの生活用器類が多数散乱する。先に進むと洞穴内を小川が流れている。

具志頭の住民は、1945年3月23日の米軍の攻撃を切っ掛けに壕へ避難するようになり、米軍の攻撃が激しい時期は壕の中で生活していた。

また、具志頭の住民の被死率は6月以降急激に増えている。この時期の死亡原因で最も多いものは、壕追い出しによるものである。

イームイの壕は、周辺の住民が多数隠れていた字具志頭の住民の代表的な避難壕の一つである。



参考文献

具志頭村史編集委員会『具志頭村第二卷通史編（歴史編・教育編・沖縄戦編）』具志頭村 1991年

翁長小塙

所在地：具志頭村字後原781番地

立地（標高）：丘陵頂上部（約60m）

形態：自然洞穴

種別：住民避難塙、役場塙

現状：崩落等はほとんどない。

保存状況：集落内に放置されている。

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：具志頭の住民の避難塙、役

場塙として利用されていた。

主な構造：石積みによる造構あり



遺跡遠景



遺跡近景



概要

翁長小塙は、具志頭村字後原ザン原地内に所在する。同塙は、入口の幅が約5.5m、高さ1.8mを測る。塙内は円形の広間を連結したような構造をなす。それぞれの広間は天井から地面にまで届く大きな鍾乳石などによって別々の空間を形成している。

塙内部は、大小4つの広間がある。これらの広間は、奥行き21.6m、幅11m、高さ3.4mというものから奥行き4m、幅7m、高さ1.3mとその大きさは様々である。入り口から最も近い広間の南側一面は奥行き約7.0m、幅約2.6mの石積みを作った空間が形成されており、その平坦な床面から天井までの高さは約1.5mを測る。

翁長小塙は、具志頭の住民が避難塙として利用していた。また、1945年5月の初め頃、字具志頭村東村渠の寺穴にあった役場を翁長小塙に移している。翁長小塙に置かれた役場は、5月の末頃、字大頭に移した。また、この塙には民間の医者がおり、治療も行っていた。

参考文献

具志頭村史編集委員会『具志頭村史第二卷通史編』具志頭村 1991年



アガリンダカリティラガマ

所在地：具志頭村字具志頭121番地

立地（標高）：丘陵中腹（約40m）

形態：自然洞穴

種別：陣地壕、役場壕

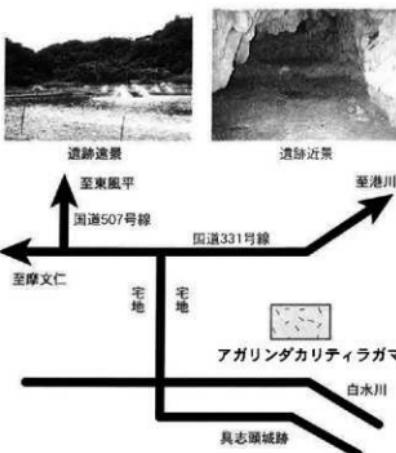
現状：釘の跡などが残っている。

保存状況：集落内にあり、ゴミが多量に捨てられている。

築造者：不明

築造年月日：1945年

戦時中の使用状況：具志頭村役場壕として使用
主な遺構：壕内部の右敷通路、棚状造構、階段、
など



遺跡付近の見取図

概要

アガリンダカリティラガマは、具志頭村字具志頭前原地内に所在する。周りを住宅地に囲まれたドリーネの底の部分に開口部がある。

壕内の通路は整地されており、瓦や石敷きの箇所もある。壕中央付近は、広い床面が棚状に2段に整地されている場所がある。天井部の鍾乳石には釘が打たれていたり、針金が巻き付けられている。

海岸に面する開口部に向かう通路の右側に通路との段差が40~50cmはある棚状の広い空間が設けられている。洞口中央付近と海岸側の開口部を結ぶ通路は急坂になっており、階段部の左右は石積みを伴うテラスが築造されている。開口部は海岸側が広く眺望できる高台になっている。

アガリンダカリティラガマは独立歩兵第89連隊第5中隊の本部として利用された。また、具志頭村役場の書類の保管場所としても使用された。

（参考文献）

具志頭村史編集委員会『具志頭村史第二卷通史編』具志頭村 1991年

（参考史料）

防衛省防衛研究所図書館蔵「陣中日誌 第八十九連隊第一中隊」 1944年



第8節 大里村

大里城跡砲座跡

所在地：大里村字大里1174番地ほか

立地（標高）：丘陵中腹（約130m）

形態：自然洞穴（一部人工壕）、構築物

種別：砲台跡

現状：若干の落石がある。

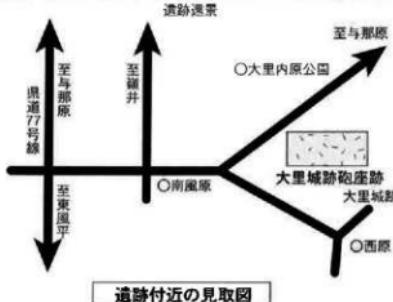
保存状況：原野に放置されている。

築造者：軍隊

築造年月日：1944～45年頃

戦時中の使用状況：重砲陣地として首里方面に砲座を向けていた。

主な遺構：塹内部に石積み・階段。塹北側に築造された平坦部。



概要

大里城跡砲座跡は、与那原町雨乞森（標高135m）から大里城跡に繋がる丘陵の大里城跡側北面中腹に構築されている。

本遺跡は琉球石灰岩の大岩の中に構築されている。塹内横断面は三角形状を呈する。沖縄戦当時、内部には隊長用として2階建ての家屋が建てられていたといふ。

南側に抜ける通路には切石を使用した階段が造られ、階段脇には堅固な石積みが2段構えで天井まで達している。また、北側に開いた口は切石を積み上げて塞ぎ、その上部には砲身を据えたと言われている。石積みの側面下部には通路用の穴が設けられている。さらに北側には急勾配の斜面に岩石と土砂を積み上げて、平坦部を作り出している。

なお、本遺跡で使用されている切石の大半は大里城跡の城壁を取り崩して転用されたものである。

大里城跡内には重砲兵第7連隊が配置されていた。1941年10月に中城湾要塞重砲兵連隊として編成されたこの部隊は、1944年5月に重砲兵第7連隊と改称され、独立混成第44旅団の指揮下に入った。連隊本部が大里城跡内に置かれ、第1中隊は津堅島、第2中隊は知念半島、第3中隊が大里村西原（連隊本部の近辺）にそれぞれ配置されていた。しかし当砲台が、どの部隊のものかは明らかではない。1947年の第32軍残務整理部による記録には連隊本部や第3中隊が、「小那霸二出没スル敵ヲ攻撃ス」「小那霸西原附近ニ出没スル敵ヲ攻撃ス」との記述がある。5月22日、大里城跡北北東の雨乞森が米軍の奇襲攻撃により占領され、25日～27日にかけて大里城跡の重砲兵第7連隊陣地も奪われた。

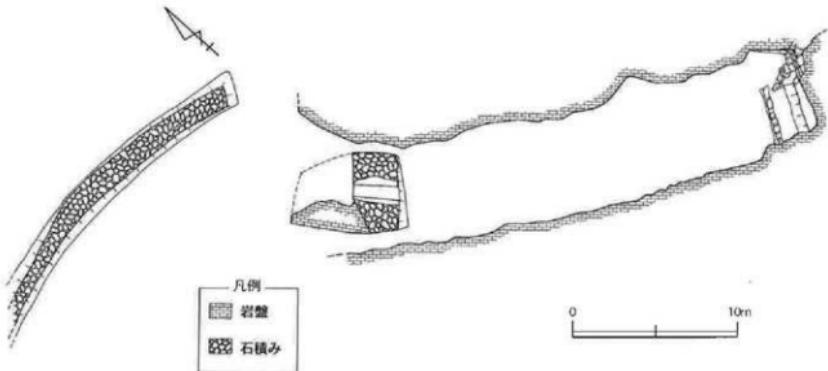
（参考文献）

防衛庁防衛研修所歴史室『戦史叢書沖縄方面陸軍作戦』1968年 朝雲新聞社

宮城幸江「少女の沖縄戦避難行」1988年 宮城幸江

（参考史料）

防衛庁防衛研究所図書館蔵「沖縄作戦に於ける重砲兵第七連隊史実資料」1947年



第18図 大里城跡砲座跡平面遺構図



第9節 玉城村

糸数塹（アブチラガマ）

所在地：玉城村字糸数581番地ほか

立地（標高）：台地上（約151m）

形態：自然洞穴（一部人工塹）

種別：陣地塹・病院塹・避難塹

現状：村の塹整備により、塹内の状況に変更が加えられている。

保存状況：平和学習の場として多くの修学旅行

生や団体が利用している。

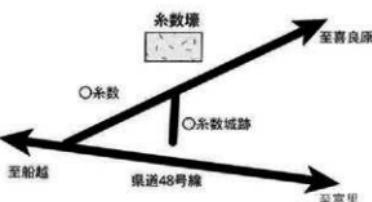
築造者：第9師団ほか

築造年月日：1944年～1945年

戦時中の使用状況：陣地塹として使用。1945年

4月末からは沖縄陸軍病院糸数分室、病院の撤退後は住民らが避難し負傷兵と混在した。

主な遺構：爆風よけの石積、井戸など



遺跡付近の見取り図

概要

糸数塹は、全長が約270mの自然洞穴で、玉城村字糸数集落の屋敷原地内にある。糸数集落においては、アブチラガマと呼称されている。

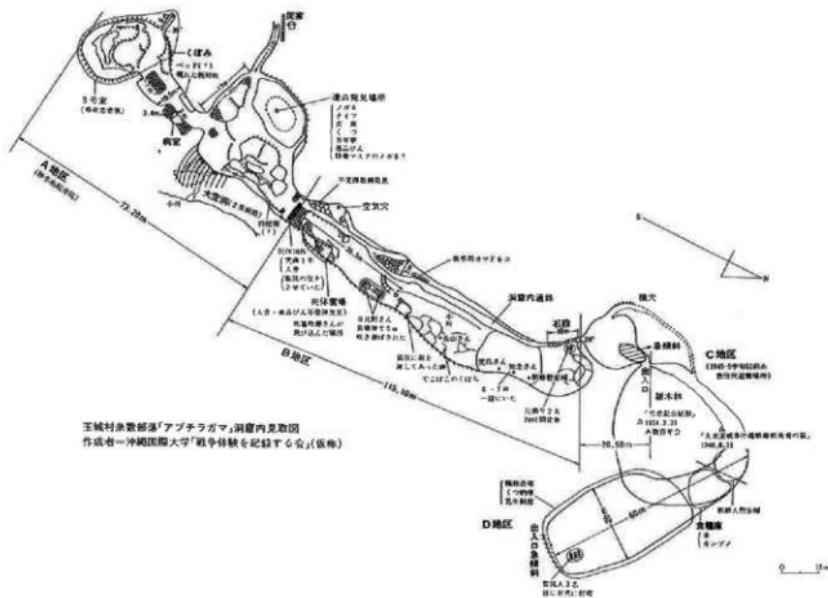
1944年7月、第9師団が糸数塹の測量調査を実施した。第9師団の台湾抽出後、第62師団独立歩兵第15大隊が配置され村内の陣地整備が行われた。1945年2月、配置替えされた独立混成第15連隊（美田部隊）が、糸数塹を整備した。塹内には屋根のついた小屋を建て電灯もつけていた。また現在の出口付近には、食料・衣料等が貯蔵されていた。

米軍上陸後、美田部隊は数名の糧秣監視兵を残し、首里戦線へと移動した。4月末からは沖縄陸軍病院糸数分室として使用され、軍医3名・看護婦3名・衛生兵数名・ひめゆり学徒16名が南風原の陸軍病院から移動し、治療・看護にあたった。塹内の電灯は撤去され、灯りはろうそくや豚油によるランプが使われた。多いときには600名～1000名近い患者がいた。医薬品は不足し、脳症患者や破傷風患者は、塹内の最奥部に「隔離」されたと言われている。5月25日、撤退命令が出され、病院関係者は糸満市伊原の第一外科塹へと移動した。残された患者には青酸力りが配られた。

6月以降、糸数塹には糧秣監視兵と負傷兵、住民が同居していた。また、塹内にいた住民が、塹に近づいてきた住民を射殺するという事件も起きた。8月22日に、負傷兵数名と避難住民約200名は糸数塹を出るが、一部の日本兵と住民は、9月中旬まで糸数塹内に残っていた。米軍の攻撃により飛んだと思われる金属製品が、現在も天井に張り付き残っている。

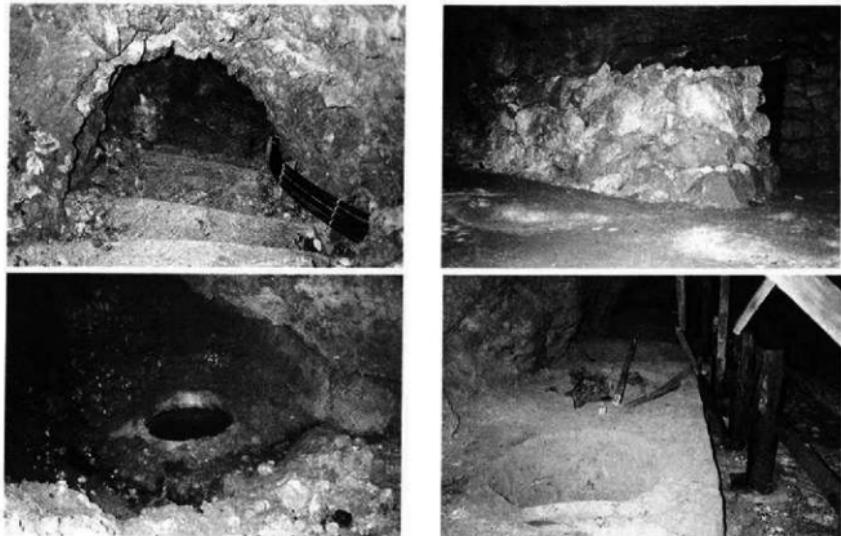
（参考文献）

糸数アブチラガマ整備委員会『糸数アブチラガマ』糸数アブチラガマ整備委員会 1995年
石原昌家『沖縄の旅・アブチラガマと森の塹 - 国内が戦場になったとき』集英社 2000年



第19図 系数壕平面構造図

石原昌家『虐殺の島 皇軍と臣民の末路』1978年 より



美田部隊監視哨

所在地：玉城村字糸数185番地ほか

立地（標高）：丘陵中腹部（約170m）

形態：人工塹

種別：監視哨

現状：塹の入り口は崖の中腹にあり、出入りは困難である。近年塹の一部が崖下に崩落した。

保存状況：糸数城跡内に放置されている。

築造者：独立混成第15連隊ほか

築造年月日：1944～45年

戦時中の使用状況：独立混成第15連隊（美田部隊）

が監視哨として使用

主要な遺構：岩盤を割り抜いた横穴造構、銃眼など



遺跡付近の見取図

概要

糸数城跡内南端に位置する琉球石灰岩の大岩を割り抜いて構築した塹である。塹長は、南西側入り口から最奥部の南東側にある銃眼まで約65mを測る。内部で数回90度に折れ曲がる構造をしている。壁の所々には釘が打ち込まれている。

最奥部の銃眼がある部屋の手前約5mの所には、コンクリートの部屋があったと思われるが、天井と内側の壁面だけを残して他の部分は崩落している。現在、崖下の地表面には崩落したコンクリートが大量に残っている。銃眼は南東部に向けて造られており、上下の二段構造となっている。柱部分は、鉄筋の代わりにレールを使用している。この銃眼からは奥武島や新原の海岸線、そして太平洋を遠望することが出来る。

当時、米軍の上陸予想地点に具志頭村港川が挙げられており、港川を囲むようにして陣地が構築された。本部半島から配置替えされた独立混成第15連隊（美田部隊）は、1945年2月1日から玉城国民学校に連隊本部を構え、2月13日には、監視哨近くの戦闘指揮所に移動している。戦闘指揮所附近には電話交換所が置かれ、前川の速射砲中隊や、重砲隊陣地・各大隊との間に有線敷設工事が行われた。2月23日には第32軍長勇参謀長が陣地偵察に訪れ、この戦闘指揮所において部隊配備状況の説明を受けている。

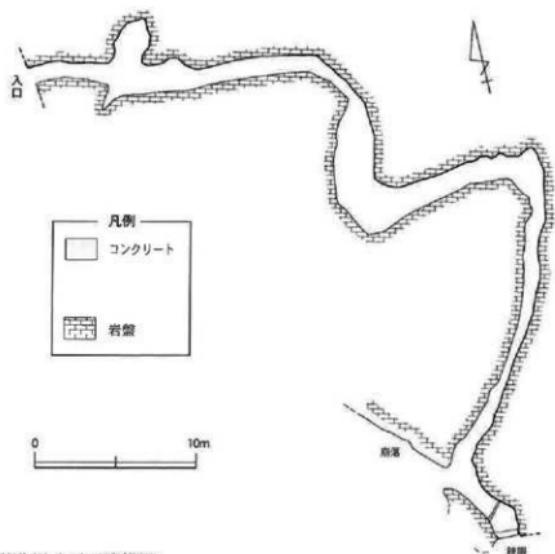
4月1日に米軍が本島中部西海岸に上陸すると、美田部隊は首里西方の守備を命ぜられ兵員を移動させている。よって、この監視哨が、実際の戦闘でどのように使用されたかは不明である。

参考文献

防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書沖縄方面陸軍作戦』1968年　朝雲新聞社

（参考史料）

防衛庁防衛研究所図書館蔵「陣中日誌 独立混成第十五連隊本部」



第20図 美田部隊監視哨平面遺構図



前川の住民避難壕

所在地：玉城村字前川361番地ほか

立地（標高）：丘陵縁端部（約40m）

形態：人工壕

種別：住民避難壕

現状：崖沿いに小規模ながら多数の住民避難壕が構築されている。周辺には古墓も多数存在。

保存状況：墓群の中に放置されている。

築造者：前川住民

築造年月：1944～15年頃

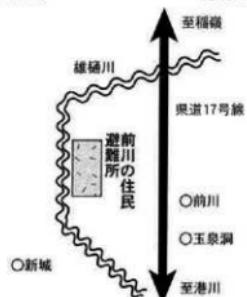
戦時中の使用状況：前川住民が家族単位で構築している。

主な遺構：内部で連結した四角形あるいは長方形の形状の小規模な横穴壕。



遺跡遠景

遺跡近景



遺跡付近の見取図

概要

玉城村字前川浮花原地内に所在する。前川集落の西側約300～400mの地域、蛇行する雄飛川沿いの崖の中腹に開口部を連ねている。

壕は比較的柔らかい岩肌を掘り込んで築造している。壁面にはツルハシで掘ったり、削ったりしたような痕がはっきり残っている。元々墓地が並んでいた地区であったが、当時の区長の許可で防空壕として造りなおした。多くの壕が内部で連結するという構造になっている。

家族単位の構築であったため、雄飛川一帯の民間防空壕は合計40余ヶ所にのぼっている。開口部は人間一人がしゃがんで通れるくらいの高さで、内部は床面から天井までの高さが約1.5m前後を測り、他の壕への通路や各空間内部の横断面形は縦長の四角形に近く、天井部分は若干アーチ状になっている。

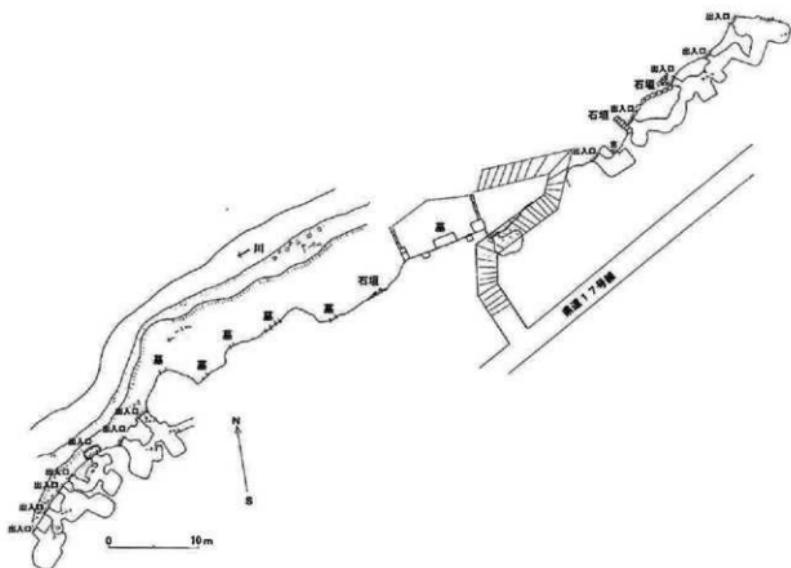
この壕は前川集落の住民が利用していた。前川集落の住民は、1945年3月23日の空襲の後にこの壕に入るようになつた。4月27日、軍の命令により住民は壕を出るが、軍が使用しなかつたために翌日には戻ってきている。

この壕に避難していた住民は、飲料水はヒーヤーガーを利用し、食料は壕内に持ち込んでいたものを食べていた。5月30日もしくは31日、前川集落近くに米軍が進出してきた。そのため全住民が具志頭をはじめとする南部へ移動した。この壕では4カ所で集団死が起こっており、計17名が死亡している。

住民は、米軍に収容された後、軍作業で前川周辺に来たときなどはこの壕へみそ、まめなどを取りに来ていた。

（証言者）

仲村康夫さん



第21図 前川の住民避難壕平面造構図



新川塙

所在地：玉城村字仲村渠1244-1番地

立地（標高）：平地（約140m）

形態：自然洞穴

種別：住民避難塙

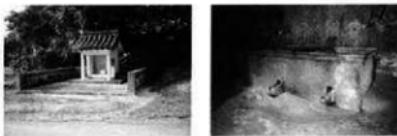
現状：内部には崩落箇所はあまり見られない。

保存状況：ゴルフ場内に放置されている。

築造年月日：不明

歴史中の使用状況：字仲村渠や字親慶原住民が避難塙として使用。

主要な遺構：塙内部には上部が平坦に整形された石積み遺構がある。



概要

親慶原交差点から南東へ約300mほど、琉球ゴルフリゾート内の北側の一角に開口部がある。字仲村渠の拝所となっている「新川」の祠が開口部付近の外側にあり、湧水地点がその内側にある。この洞穴は西から東へと続く長大な洞穴である。洞穴内には小川も流れている。「新川」の湧水地点から洞穴内を東に約50mほど行った所に、石積み遺構が残存する。周辺には日用雑器類が散乱しており、沖縄戦当時住民避難塙として利用されたが詳細は不明である。



(証言者)

喜舎場功さん、山入瀬宏正さん

アガヌメーガマ

所在地：玉城村字親慶原737-1番地

立地（標高）：丘陵下端部（約125m）

形態：自然洞穴

種別：住民避難壕

現状：開口部に至るには雑草地を通って行く。

洞穴内には水流跡があり、ぬかるんでいて歩行に困難をきたす。

保存状況：崩落箇所はあまり見あたらない。

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：親慶原住民の一部が避難壕として利用した

主な遺構：壕出入り口内部付近に上部が平坦に整形された石積み造構がある。



遺跡付近の見取図

概要

親慶原交差点から西へ約200mほどの場所にある。崖下に形成された自然洞穴である。洞穴内には幅約1mの小川が流れている。洞穴開口部付近には、平坦な空間が形成されており、そのいくつかは石積みによって造られた人工的なものである。

この壕は主には親慶原の住民が避難壕として利用した。親慶原の住民は、米軍の爆撃が激しくなった時期からこの壕へ食料などを運び込み利用し始めた。壕の近くにイモ畠や湧水があつたため、食料と飲料水には困っていないかった。住民の多くは、6月1日壕から出ており、大半が米軍に収容された。

日本軍はこの壕を使用していなかったが、沖縄出身の日本兵が一部の住民と投降せずに壕内に隠れていた。この日本兵は、壕内で自決をしている。

壕は、外部から目に付きにくい場所にあるため訪れる人は殆どいない。

（証言者）

喜舎場功さん、山入壇宏正さん



シチナクブ（ヒチナクブ）

所在地：玉城村字垣花203番地

立地（標高）：丘陵下部（約130m）

形態：自然洞穴

種別：住民避難壕

現状：洞内に崩落はあまり見られない。

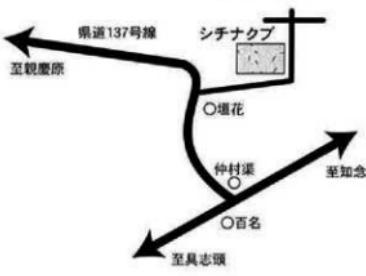
保存状況：鬱蒼とした山林中のドリーネ内に放置されている。

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：宇垣花住民の一部が避難壕として使用

主な遺構：壕内部に平坦な石積み遺構あり。



遺跡付近の見取図

概要

垣花集落北側約100mにドリーネを持つ山林がある。そのドリーネ中の北端に位置するのがこの壕である。ドリーネ内には古墓が複数確認される。シチナクブと呼ばれる住民避難壕は開口部から斜めに下るようにして入る。壕左側には大きな岩塊が斜めに落ちたような場所があり、その下部は数m四方の空間があり、石積みによって平坦な空間が造られている。遺構周辺には碗・皿・甕など生活雑器類が多数散見される。

シチナクブは、村から仲村渠の住民に避難壕として割り当てられた。仲村渠の住民は3月23日頃からこの壕に避難を始めている。壕内の住民は、米軍の攻撃が止む午後4時頃から、家族単位で近くの畑にイモやキャベツを取りに行っていた。飲料水は近くのヒージャーガーへ1日1回汲みにいっていた。この壕に避難していた住民は、6月初旬米軍の捕虜となっている。

（参考文献）

金城繁正『玉城村誌』玉城村役場 1977年

（証言者）

金城善徳さん



第10節 知念村

ウローカー砲台跡

所在地：知念村字久手堅255番地ほか

立地（標高）：丘陵中腹（約50m）

形態：構築物

種別：砲台跡

現状：砲台跡地のコンクリート基礎部分が現存。

保存状況：知念村が発掘調査中

築造者：重砲兵第7連隊

築造年月日：1944～45年頃

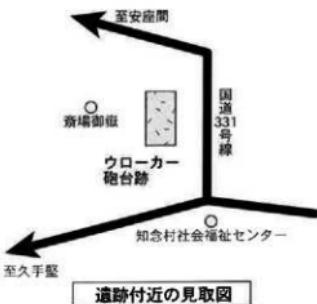
戦時中の使用状況：連隊の砲台跡として使用

主な遺構：砲台跡（円柱状及びボックス状コンクリート構造物）、弾薬庫跡など



遺跡遠景

遺跡近景



遺跡付近の見取図

概要

知念村字久手堅長堂原地内に所在する。ウローカー砲台跡は砲座跡及び砲台間を繋ぐ通路上構造物から構成される。

砲台跡は、斎場御嶽と国道331号線に挟まれた丘陵中腹部に位置し、中城湾を狙う形で配置されている。また、南東方向へ直線距離にして約500mの地点には重砲兵第7連隊第2中隊が構築した吉岡隊陣地壇がある。

砲座跡は円柱状コンクリート構造物の天頂面が一部地表に出ており、その他の部分は地中に埋められている。砲座跡は直径約2mの円形をしており、中心に直径10cm程度の穴が開いている。

砲座跡の周囲は半円状の構造物が取り巻いており、構造物は中心から左右対称に約4mの地点に、縦横1m前後のコンクリートボックスが配されている。また、各砲座間は、両脇に溝のあるコンクリート製通路により連結していたであろうと思われ、現在、その一部が残っている。この通路を利用して弾薬の運搬を行っていたと予想される。本遺跡では砲座跡が3基確認されているが、各砲座間を繋いでいた通路は中央後背地に設置してあった弾薬庫と連結されていたと思われる。

この砲台跡には、吉岡隊陣地壇に配備されていた重砲兵第7連隊第2中隊が12糰速射加農砲を装備し設置していたと思われる。この部隊は4月上旬、米軍艦船に対して砲撃をした。この反撃として米軍に集中攻撃を加えられ、砲が破壊され使用不可能となった。

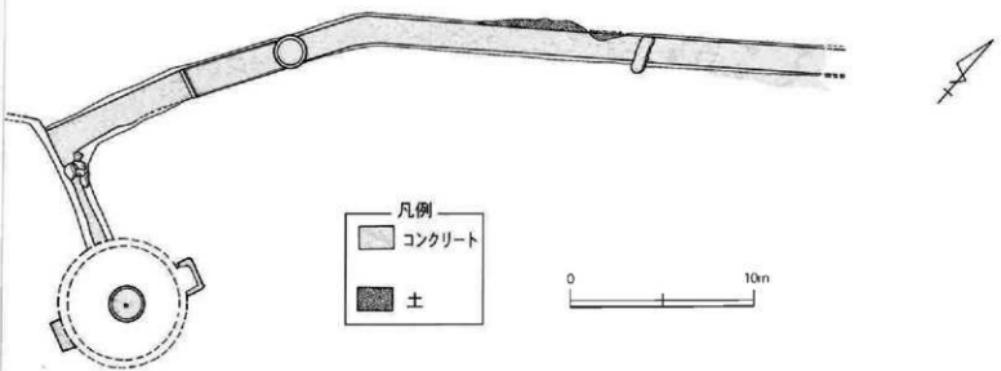
参考文献

防衛省防衛研修所歴史室『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』朝雲新聞社 1968年

知念村史編集委員会『知念村史 戦争体験記録 知念の文献資料』知念村役場 1994年

参考史料

防衛省防衛研究所図書館蔵『沖縄作戦における 重砲兵第七連隊史実資料』第32軍残務整理部 1947年



第22図 ウローカー砲台跡平面造構図

知念村教育委員会提供



斎場御嶽の艦砲穴

所在地：知念村字久手堅254番地

立地（標高）：丘陵頂上部（約90m）

形態：その他

種別：砲弾穴

現状：斎場御嶽内にあり大きな水溜まりとなっている。

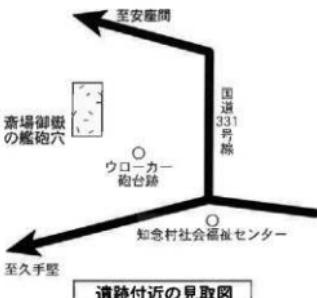


保存状況：原野内に放置されている。

築造者：不明

築造年月日：1945年

主な遺構：掘り鉢状に窪んだ溜め池状遺構。



概要

知念村字久手堅サヤハ原地内に所在する。久手堅集落からみて北東方向に位置し、現在、国指定史跡であり、沖縄第一の壠場として知られる斎場御嶽内的一角を占めている。

艦砲穴の南西方向には拌所があり、穴と拌所との間は直線距離にして約40m離れている。

この艦砲穴の形状は底の深いフライパン状の窪地となっている。南北の直径は約12.6m、東西の直径は約13.6mを測る。窪地北側縁端部と窪地中央付近の最深部との高低差は約2mを測る。艦砲穴の周辺は傾斜地になっており、戦後50余年の間に土砂や落葉などがかなり体積していると推察される。

沖縄戦において「鉄の暴風」と形容されるほどの砲弾が撃ち込まれた。また、その打ち込まれた砲弾の中の不発弾の処理に関して、沖縄県消防防災課は毎年50トン掘り出して50年間かかると試算している。それほど砲弾の撃ち合いが行われた沖縄は、終戦直後は至る所に艦砲穴といわれる砲弾でできた穴が残っていた。しかし、現在では大半の艦砲穴は埋められるなどして残っていない。つまり、当時の「鉄の暴風」と形容される状況を伺える砲弾の跡はほとんど残っていないといえる。

このようなことからも他の戦争遺跡とは趣を異にするが、斎場御嶽に残る艦砲穴は沖縄戦の様子をうかがい知るうえで重要な戦争遺跡であるといえる。

（参考文献）

（財）沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室『概説 沖縄の歴史と文化』沖縄県教育委員会 2000年



吉岡隊陣地壕（ウフケスク軍陣地壕跡）

所在地：知念村字久手堅537番地ほか

立地（標高）：丘陵頂上部（約70m）

形態：人工壕

種別：陣地壕

現状：若干の崩落はあるが、状態は良好である。

壕は道路整備等により削られている。

保存状況：原野内に放置されている。

築造者：重砲兵第7連隊第2中隊

築造年月日：1942～45年

戦時中の使用状況：軍陣地壕として使用

主な遺構：人工的に掘られた横穴壕、銃眼、照明用柵など。



概要

知念村字久手堅チジ原地内に所在する。知念崎内の丘陵頂上部に構築された人工壕である。

ここに配備されていた部隊は重砲兵第7連隊第2中隊である。第2中隊は1942年中城湾警備の任務で、ウローカーと知名に砲座を構築し、第1小隊は知名、第2小隊はチジ原に布陣している。

壕は第三紀砂岩（ニービ）を割り抜いて構築している。また壁面には約1mおきに坑木を立てるために掘られた痕がくっきりと残っている。

壕内には南北に貫く通路を中心に分岐点が2カ所ある。軸となる通路から西側に曲がる通路がある。この通路は、現在は丘が削られているために約25mで埋没している。この壕は現在の県道付近までつながっていたと思われる。

東側に曲がる通路は非常に残りの良い状態である。この通路は突き当たりに長方形の窓とその上に円形の穴が残っている。通路の長さは約10mくらいである。この窓は、台形状の構造をしていないことから、一般的に造られている銃丸とは形状が異なる。また、近くに同部隊の砲台跡があることから、観測所としての役割があったのではないかと思われる。

壕の形状は高さ約2m、幅約1mの壕である。東西へ通る二つの壕には坑木跡が残り、南北へ貫通している壕には坑木跡が無い。また、ウローカーの砲台跡との関連施設であることから、東西へ通る壕が本道であったと考えられる。

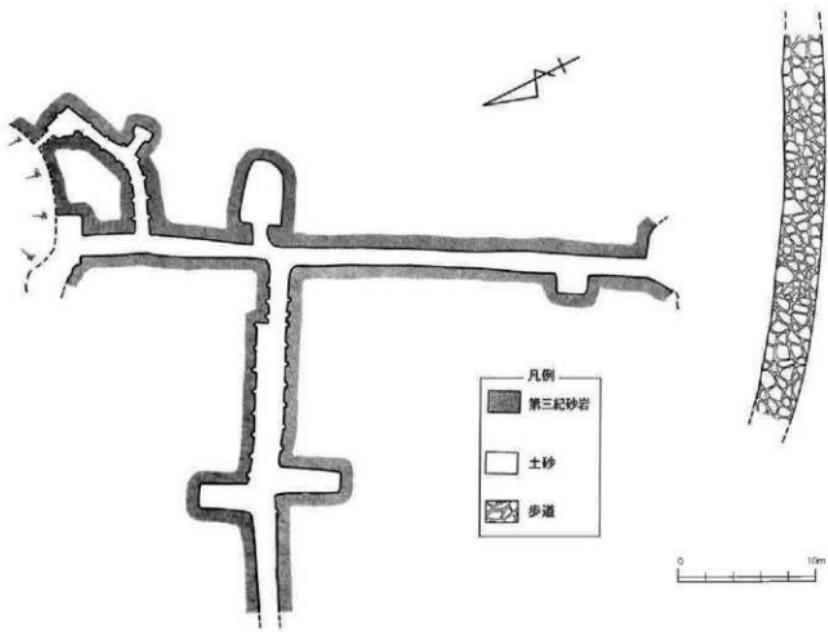
（参考文献）

防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』朝雲新聞社 1968年

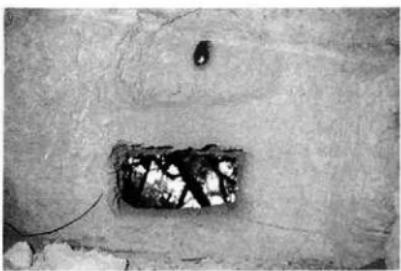
知念村史編集委員会『知念村史 戰争体験記録 知念の文献資料』知念村役場 1994年

（参考史料）

防衛庁防衛研究所図書館蔵「沖縄作戦における 重砲兵第七連隊史実資料」第32軍歴務整理部 1947年



第23図 吉岡隊陣地壕平面構造図



第V章 調査の成果

(1) 遺跡の分布状況と情報収集

1998～2000年度にかけて行った沖縄本島南部地区戦争遺跡詳細分布調査において確認した戦争遺跡は367カ所であった。今回確認した遺跡の大半が陣地および避難用の壕であった。遺跡の市町村別の内訳は以下の状況であった。

市町村	遺跡数	市町村	遺跡数	市町村	遺跡数	市町村	遺跡数
糸満市	153カ所	南風原町	8カ所	東風平町	5カ所	与那原町	4カ所
佐敷町	5カ所	豊見城村	26カ所	具志頭村	22カ所	大里村	2カ所
玉城村	120カ所	知念村	22カ所				

今回の調査で確認した遺跡数は市町村においてかなりのバラツキがある。各市町村間の密度差は、分布地図（附録）をみるとことにより、明確に認められる。このような差が生じたのは、各市町村により遺跡の残存数の差があることを示している。しかしながら、そのことは今日的な調査方法の課題点としてもあげられる。

つまり、今回の調査においては、まず各市町村へ市町村史における沖縄戦編の取り組みに関するアンケートを行った。このアンケート結果なども含む沖縄戦関係文献から、陣地や避難壕などに関する記述を抜き出し、それを基礎資料とした。また、現地調査にあたっては各市町村教育委員会をはじめとする多くの方々に協力を依頼し、各遺跡の調査を行った。そのため、市町村における遺跡の把握状況に大きく左右される結果となってしまっている。言い換えれば、調査基礎資料としたデータ自体が、市町村史における沖縄戦編の刊行状況や沖縄戦編の中で戦争遺跡を扱っているかということに影響を受けたといえる。今後、中北部へと進めていく本調査において、データ収集のあり方の課題となつた。

今回の調査において各市町村の把握している遺跡や文献に記載されているもの以外で新たに発見した遺跡は全体の中のごく少数である。遺跡が現存しているか破壊されているかが確認できなかつたものは、付録の遺跡のリストにおいて不明と記した。地中に埋もれている遺構も多数あると思われる。

(2) 戦争遺跡の分布状況からみる南部地区

日本軍の陣地跡は、地域ごとに施設の種類、量に差が出てくる。陣地跡は、第32軍の戦術構想と関連している。例えば沖縄本島南部地区において日本軍が米軍の上陸地点と想定していた地域は、具志頭村港川周辺の海岸と糸満市の西海岸一帯であった。米軍上陸以前、具志頭村港川周辺の海岸に対しては、玉城村糸数を中心とした地域に独立混成第44旅団がおかれ、具志頭村の具志頭・新城の丘陵線には第24師団歩兵第89連隊が海岸線を取り囲むように配備されていた。糸満市の西海岸一帯に対しては、第24師団歩兵第22連隊と歩兵第32連隊が配備されていた。この地域には、玉城村に独立混成第15連隊の戦闘指揮所や糸数壕、具志頭村にクラシンショウの壕やヌスマチ・ガラビ壕、豊見城村に残る軍構築壕などが現存している。

海岸線に接していない南風原町、東風平町などには、海岸線の部隊を支援する砲兵隊の陣地や病院施設が配置されていた。これらの施設は、東風平町の野戦重砲兵第一連隊の陣地壕や富盛の第24師団第1野戦病院壕、南風原町の南風原陸軍病院壕群などが代表的なものである。

知念村、佐敷町、大里村、与那原町、には、津堅島や勝連半島などと連携して中城湾の防備を行うための部隊が配備されており、その砲兵部隊の陣地などが残っている。また、豊見城村には海軍部隊の陣地跡が集中して残っている。

このような事から、具志頭村の港川集落は、米軍が上陸してきたときの戦場となり、南風原や東風平などの地域は、後方支援を行う地域として直接地上戦闘を行う地域として設定されていなかった事がわかる。また、中城湾を囲む地域は、湾へ進入した米軍に対する布陣として共通の目的を持っていたことがわかる。

住民は、家族などで防空壕を掘ったり、自然壕へ避難していた。防空壕に関しては、豊見城村のメースモー壕や玉城村の前川の住民避難壕などを除く大半が埋没などにより残っていない。しかし、自然壕が住民の避難壕として利用されている地域においては多数残っているといえる。南風原町の弾痕のある石垣などの民間の施設に関しては、家屋の建て替えなどにより取り壊されほとんど残っていない。

しかし、これらの戦争遺跡は生活の場が戦場となったことを如実に示すものであり、集落の近傍にある避難壕や集落内の弾痕の残る壁などはその最たるものであるといえる。

(3) 戦争遺跡

今回の調査において確認した遺跡の大半が自然壕、構築壕の類であった。遺跡としてあげた壕の残り具合には、非常に良いもの、出入り口が埋没しているもの、落盤等により壕の大半がつぶれているものなど現状はさまざまである。

このように壕が良好に残っているか、埋没しているかということの重要な要因のひとつに地質的なもののがあげられる。南部地区の地質は大別すると琉球石灰岩、第三紀砂岩（ニーピ）、第三紀泥灰岩（クチャ）の3つに分けられる。琉球石灰岩の自然壕は比較的安定した状況で残っているものが多い。構築壕であっても具志頭村のクラシンジョウの壕のように、落盤もほとんどなく当時の壕の様子を残している場合がある。また、第三紀砂岩（ニーピ）の地質にある壕も知念村の吉岡隊跡地壕や佐敷町の役場壕のように非常に良い状態で残っているものもある。しかし、第三紀泥灰岩（クチャ）の地質にある壕は、その大半が落盤および土砂の流入により、埋没もしくは形状の大きな変形を起こしている。聞き取りにより壕の所在地を確定できたとしても、その壕が埋没していたという事例は多数ある。

遺跡の分布状況の粗密は陣地の配備状況や地質的に現存しているかどうかということにより発生するが、戦後の戦争遺跡の破壊という人的要因も大きい。戦後初期の体験談の中に、陣地壕から坑木を抜き取ってきて家を建てた、といものがてくる。第三紀泥灰岩（クチャ）の地質で坑木を抜き取られた壕の大半は落盤か、埋没を起こす。生活のためにやむを得ないことではあるが、戦後の戦争遺跡の破壊を招く要因となる行為であったといえる。その後、基地建設や農地改良などの大規模開発により戦争遺跡が破壊されるなど遺跡の破壊の多くは自然的要因ではなく人的要因が多数をしめていたと考えられる。

1980年代後半には、沖縄の経済の状況を「3K産業」（観光、基地、公共事業）といわれるほど多くの公共事業が行われており、現在でも沖縄の経済において公共事業の重要性は認識されている。聞き取りにおいて、昔は壕があったけど今は農地改良で山が削り取られた、というような話はよく聞くことである。例えば、具志頭村の新城から具志頭へと続く丘陵地帯には第89連隊の陣地があったが、現在では農地改良により丘陵の上部が削り取られ、その大半が残っていない。

また、分布調査事業中にも、具志頭村の長毛の特攻艇秘匿壕の一部が破壊され、豊見城村のアカサチ森軍構築壕の多くの割り取られるというように開発戦争遺跡の破壊は行われている。

自然の埋没であれば、南風原陸軍病院壕群のように発掘作業により当時の情報を得ることができる。現在、南風原町では高速道路の建造に伴い、山川橋近くの陣地跡の発掘作業を行っている。遺跡はこのように地中に埋まっていても発掘作業を行うことにより、沖縄戦の時の情報を提供するのである。しかしながら、重機等を用いるなどの大型開発による破壊では、遺跡の存在自体が知られることなく消滅してしまう。

(4) おわりに

沖縄戦に関する研究において主に利用されているものは、陣中日誌などの公文書と体験記録の二つである。体験記録に関しては、沖縄県内の各市町村において証言の収録が現在でも行われている。証言では確定できない軍の動きなどは、陣中日誌などの公文書に頼らざるを得ない。しかし、日本側の公文書に関しては、現存しているものはごく一部である。また、首里の司令部陥落後のものに関してはほとんど残っていない。従って、戦争遺跡は、沖縄戦研究において、新たな事実の発見、事実の再確認、立証という意味で重要な資料であるといえる。特に、南部の戦争遺跡は公文書がほとんど残っていない首里の司令部陥落後も戦闘が行われた地域であり不明な点が多数存在する。その不明な部分を解明するために戦争遺跡が重要な資料となることは間違いない。

このような資料的価値の高い戦争遺跡は、今後も活発に活用されていくだろう。しかし、南部の戦争遺跡の大半は、現在まで文化財として取り扱われてこなかった。そのため大型開発などの人的要因により破壊されてきた。本報告書の刊行により、文化財としても重要な資料となりうる戦争遺跡が多数存在することを示すことができたのではないだろうか。今後、本報告書を用い、戦争遺跡の文化財としての価値を認識し、大型開発から保護する手立てを講じる参考としていただきたい。

（参考文献）

- 防衛庁防衛研修所歴史室『歴史叢書 沖縄方面陸軍作戦』朝雲新聞社 1968年
常間嗣一「戦跡考古学のすすめ」『戦争と平和と考古学 人類史の未来のために』反核考古学研究者の会 1988年
戦争遺跡保存全国ネットワーク『戦争遺跡は語る』かもがわブックレット 1999年
財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室『概説 沖縄の歴史と文化』沖縄県教育委員会 2000年

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第5集

沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（I）

—南部編—

平成13年3月31日

発行
権
集
沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125 中頭郡西原町字上原193-7
TEL098(835)8751～8752

印 刷
株式会社 尚生堂
〒901-2124 蒲添市安波茶1-6-3
TEL098(876)2232

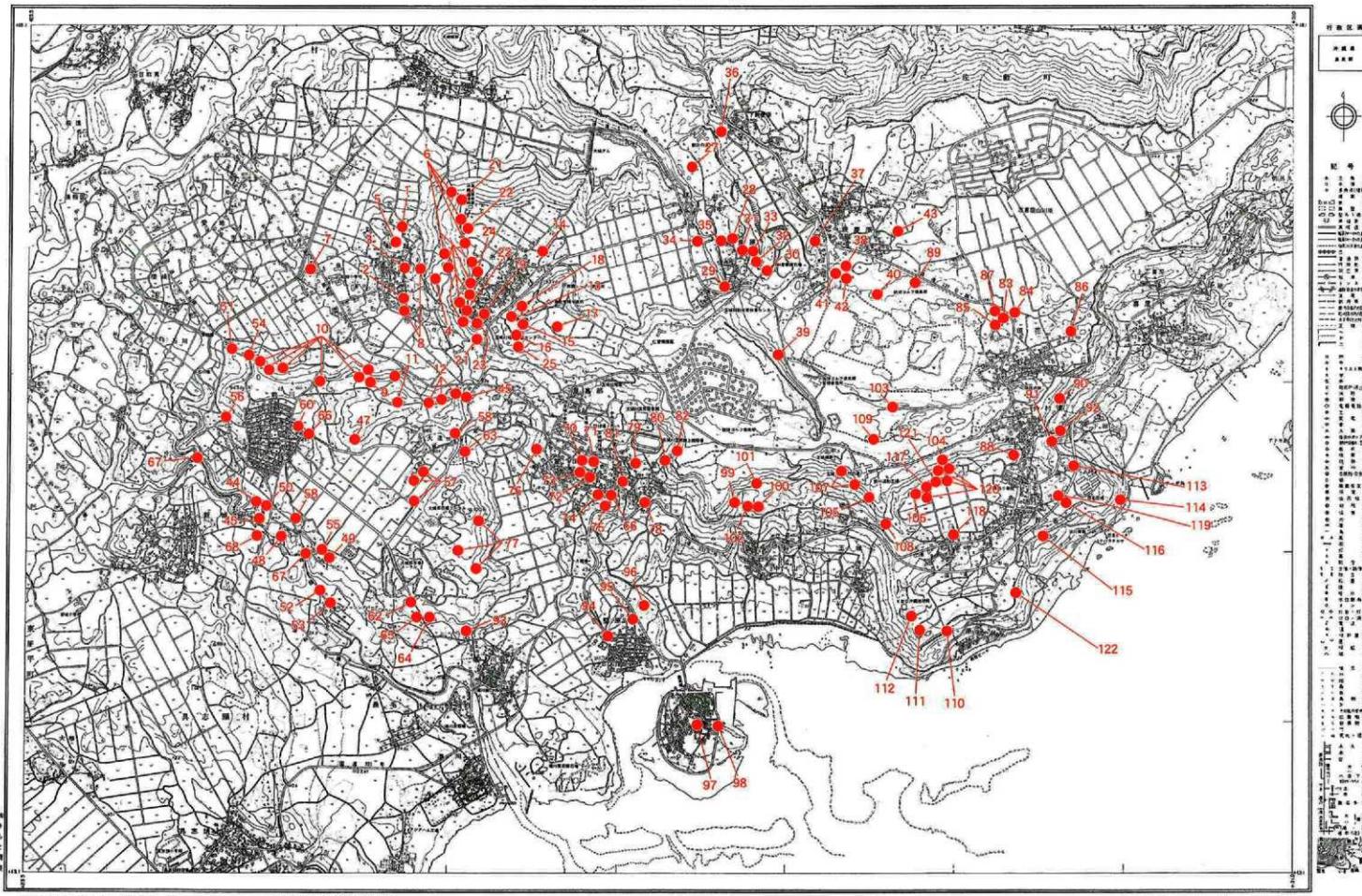
沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(Ⅰ)正誤表

頁	行	誤	正
序	9	全県的な調査が行なれた	全県的な調査が行なわれた
3	11	せざるえない	せざるをえない
3	13	11	10
3	16	153	132
4	33	志多泊	志多伯
7	10	資料編集室	史料編集室
14	33	資料編集所	史料編集所
16	図	糸満ローター	至糸満ロータリー
16	28	陸地摩ある	陸地摩がある
24	30	沖縄県高教組南部支部編	沖縄県高等学校教職員組合南部支部平和教育研究委員会編
31	27	投降を呼びかけた。	投降を呼びかけた。
39	34	逃げることになった。	逃げることになった。
45	14	さつきのしろ	さつきの城
50	33	図書室	図書館
52	8	調査を行われている。	調査を行っている。
52	31	南風原陸軍病院壕	南風原陸軍病院塹
60	22	合計が193名	合計193名
66	29	図書室	図書館
70	18	長さは	厚さは
70	30	弾痕のあとが	弾痕の跡が
81	6	抜いてて	抜いて
82	23	壕高さは	塹の高さは
92	16	壕内の幅約3m、	壕内は幅約3m、
100	32	1968年 朝雲新聞社	朝雲新聞社 1968年
100	33	1988年 宮城幸江	宮城幸江 1988年
106	8	糸数城跡	糸数城跡
106	33	1968年 朝雲新聞社	朝雲新聞社 1968年
108	20	造りなおした。	造り直した。
108	21	雄飛川	雄樋川
108	31	壕へみそ	壕へ みそ
110	図	玉城城跡	玉城城跡
116	18	体積	堆積
118	25	銃丸	銃眼
120	4	367カ所	346カ所
120	7	糸満市 153カ所	糸満市 132カ所
120	8	豊見城村 26カ所	豊見城村 29カ所
120	8	具志頭村 22カ所	具志頭村 19カ所
120	9	玉城村 120カ所	玉城村 118カ所
120	9	知念村 22カ所	知念村 24カ所
120	36	与那原町、には、	与那原町には、
121	26	どうものが	というもの
121	37	開発戦争遺跡の	開発により戦争遺跡の
121	37	破壊は行われている。	破壊が行われている。

附録 戰争遺跡分布図正誤表

市町村	番号	誤	正
糸満市	1	後ン毛ガマ	後ン毛のガマ
糸満市	43	国吉グスクの広瀬隊壕	国吉グスク前の石穴
糸満市	44	国吉グスク前の右穴	現淨魂之塔の壕
糸満市	45	現淨魂之塔の壕	国吉グスクの広瀬隊壕
糸満市	132	摩文仁の第32群司令部壕	摩文仁の第32軍司令部壕
南風原町	4	津嘉山の弾痕のアル石垣	津嘉山の弾痕のある石垣
東風平町	1	宜次郎の製當工場煙突跡の弾痕	宜次の製糖工場煙突跡の弾痕
大里村	1	大里城跡座跡	大里城跡砲座跡
玉城村	42	マヤーアブ親愛原	マヤーアブ
玉城村	54	第9中隊指揮班の陣地跡)	第9中隊指揮班の陣地跡

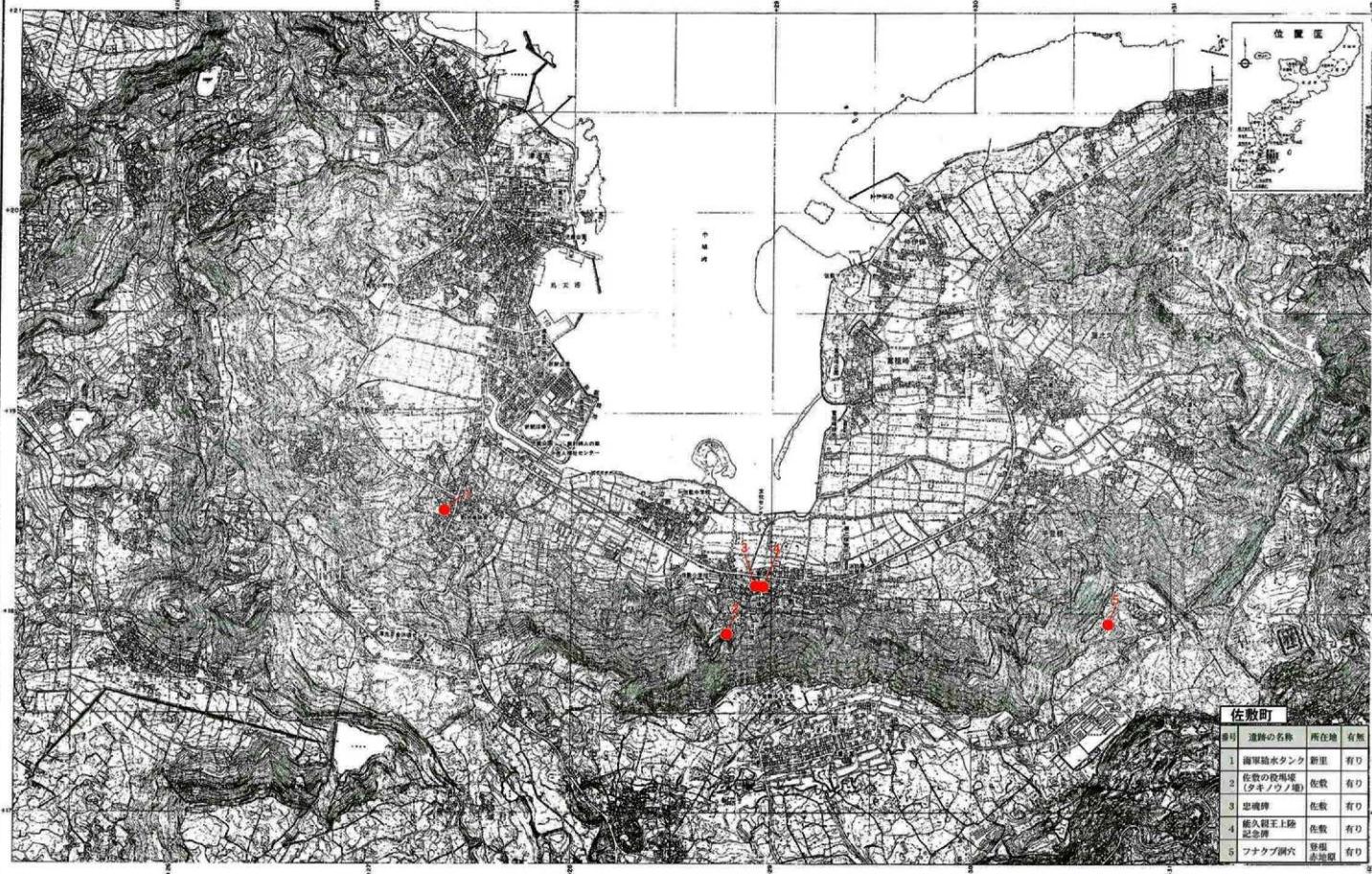
玉城村地形図



玉城村役場

佐敷町地形図

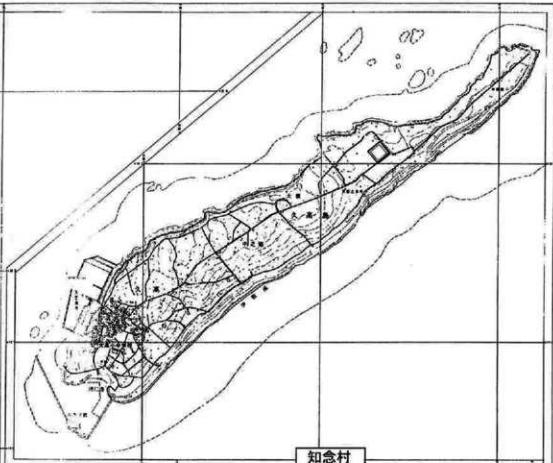
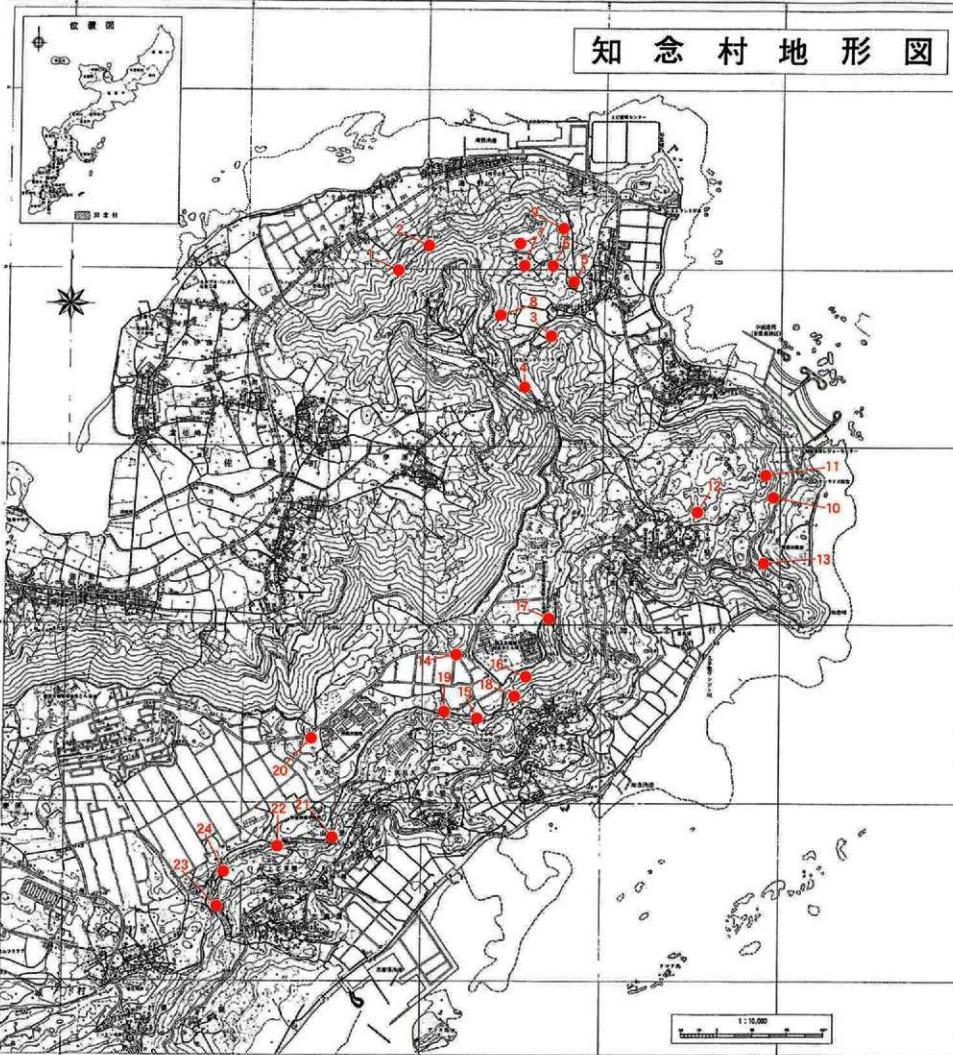
平成26年2月調査



平成6年1月 - 調査地図

1:10,000

知念村地形図

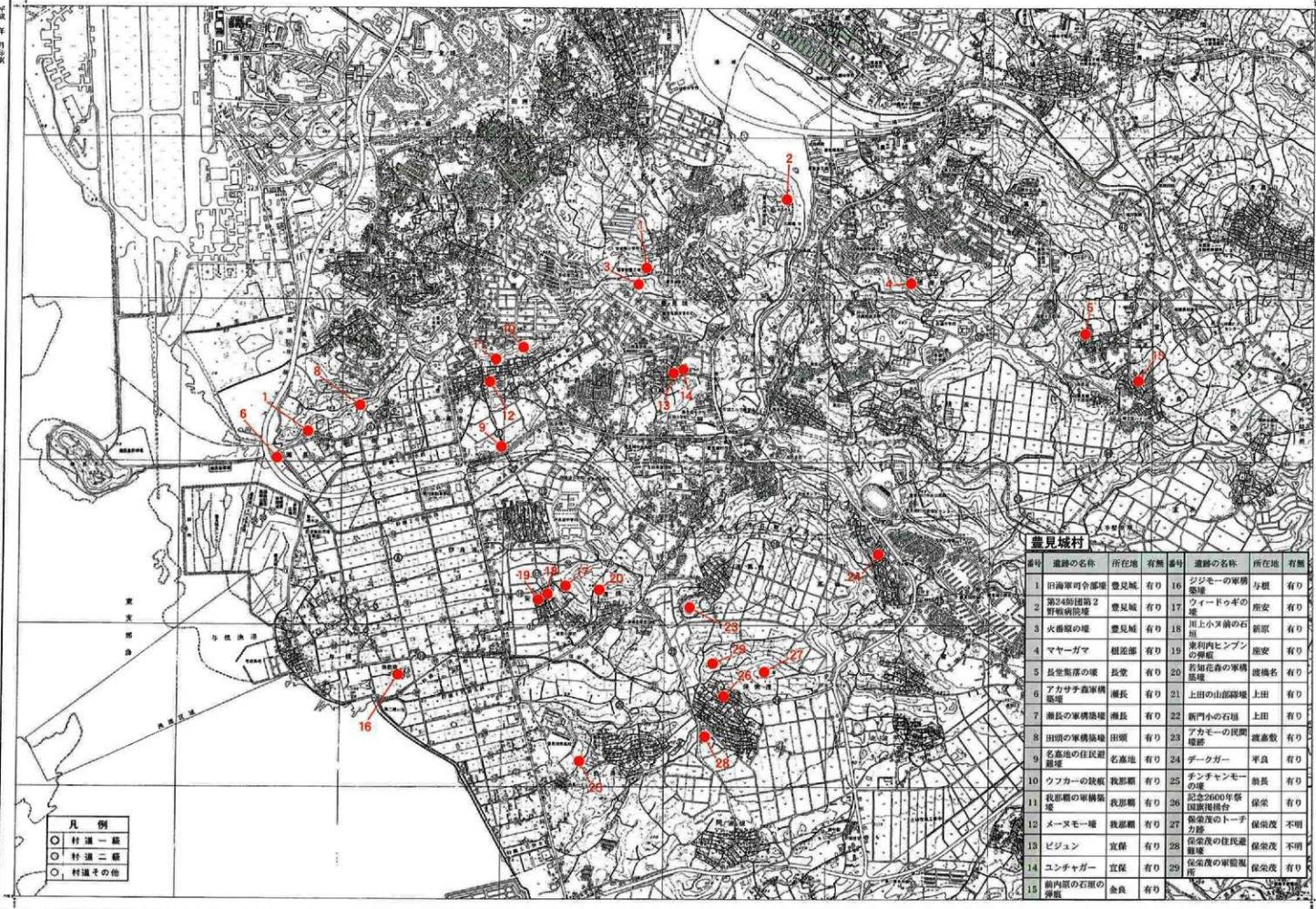


知念村

番号	道線の名称	所在地	有無
1	久原避難場	久原	有り
2	ウエーバーパンタ	海野	有り
3	イヌヒラバハル	知名	不明
4	ウツイシマ	知名	不明
5	カーマタ	知名	不明
6	カンザーメー	知名	有り
7	タガナ	知名	不明
8	ヌル坂	知名	有り
9	ヤキフリ	知名	不明
10	ワローカ砦合宿	久手原	有り
11	森湯温泉の旅館 六	久手原	有り
12	テラ山	久手原	有り
13	吉岡山陣地 (ラクダ山)跡地	久手原	有り
14	アンソニアーブ	知念	有り
15	ウハカル	知念	有り
16	知念クリク	知念	有り
17	テニギタ	知念	有り
18	ルミ子	知念	有り
19	ウージガマ	具志堅	有り
20	ジープアブ	具志堅	有り
21	ハジジ山	山里	有り
22	カンチャゴー	志賀島	有り
23	タクシッシュ	志賀島	有り
24	ヤローカ	志賀島	有り

豊見城村地形図

平成年月印版



与那原町全図



1:10,000

100 200 300 400 500

与那原町

番号	道路の名称	所在地	有無
1	墓地の弾板路	与那原	有り
2	板良数トーカ	板良數	有り
3	板良前の障壁堤	板良前	有り
4	路		
4	魚雷軌跡の壁	板良數	有り

平成5年1月現地調査

南風原町全図

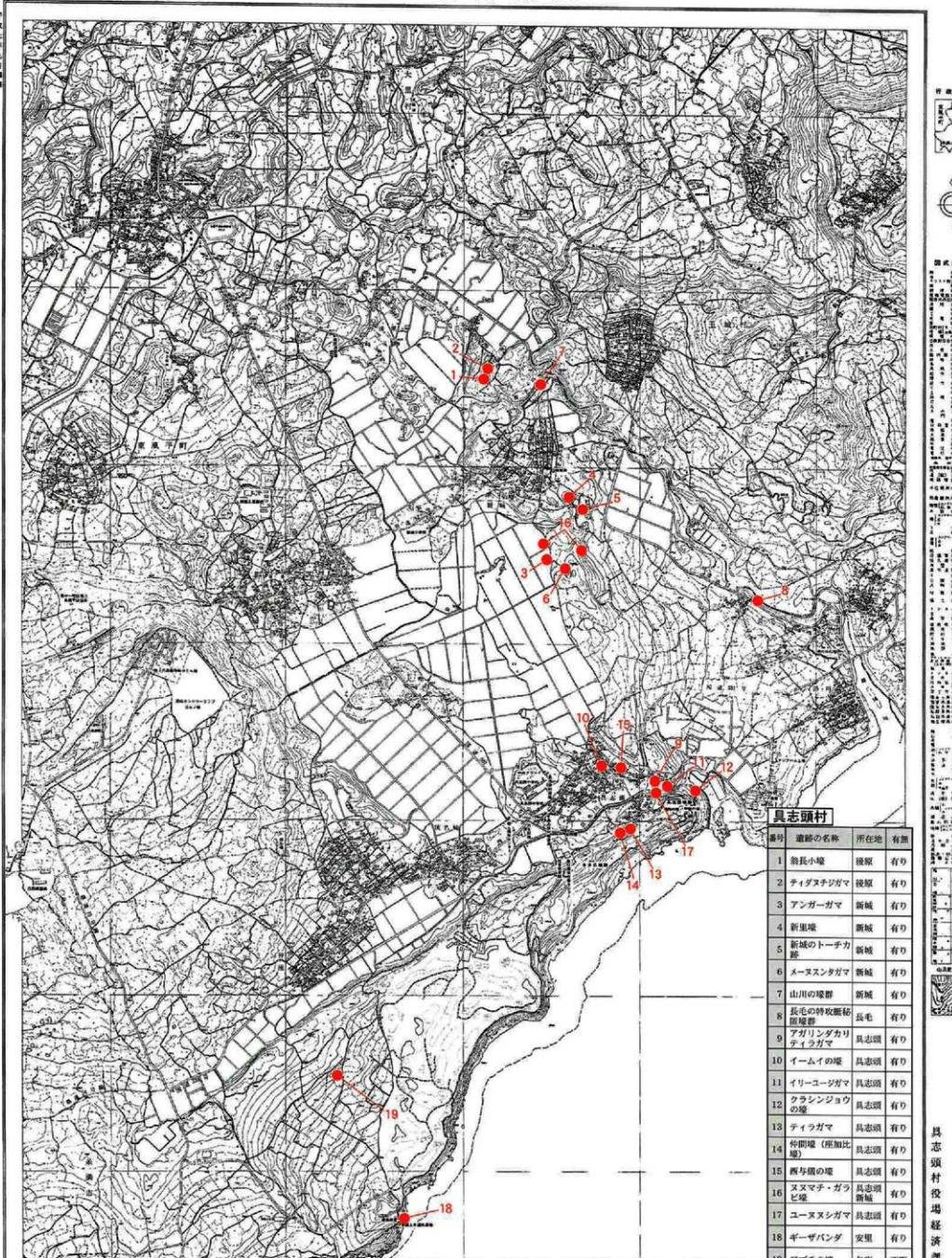


1:10,000

南風原町

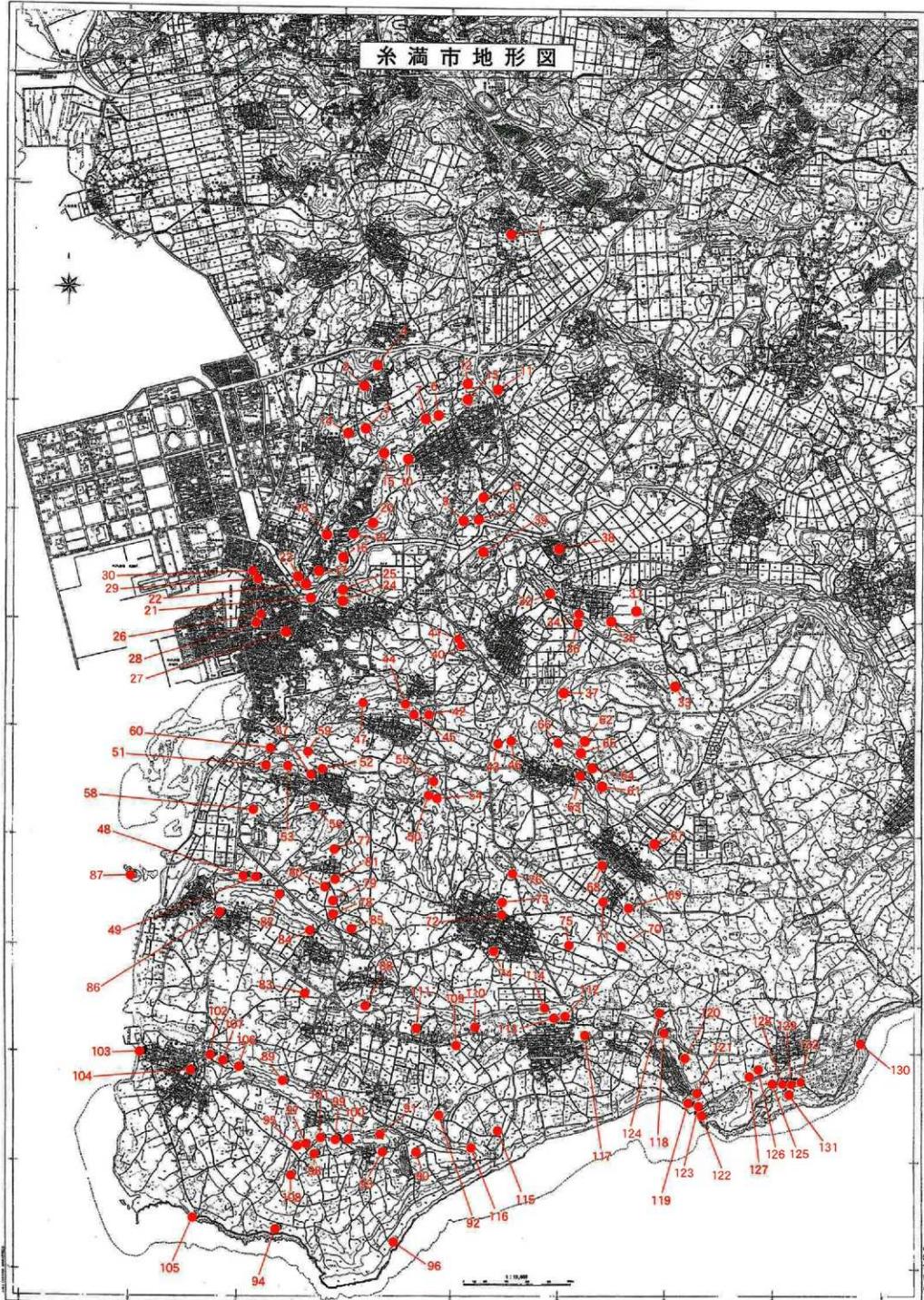
番号	道路の名称	所在地	有無
1	ナガード堤	新川	有り
2	宮城の住民避難道	宮城	有り
3	鶴鳴洋所改修道	津富山	有り
4	津富山の界隈のアル石組	津富山	有り
5	津富山集落道	津富山	有り
6	伊大典記念・西門之井戸	本郷	有り
7	南風原除害病院	青原武	有り
8	山川の側面のあるタンク群	山川	有り

具志頭村全図



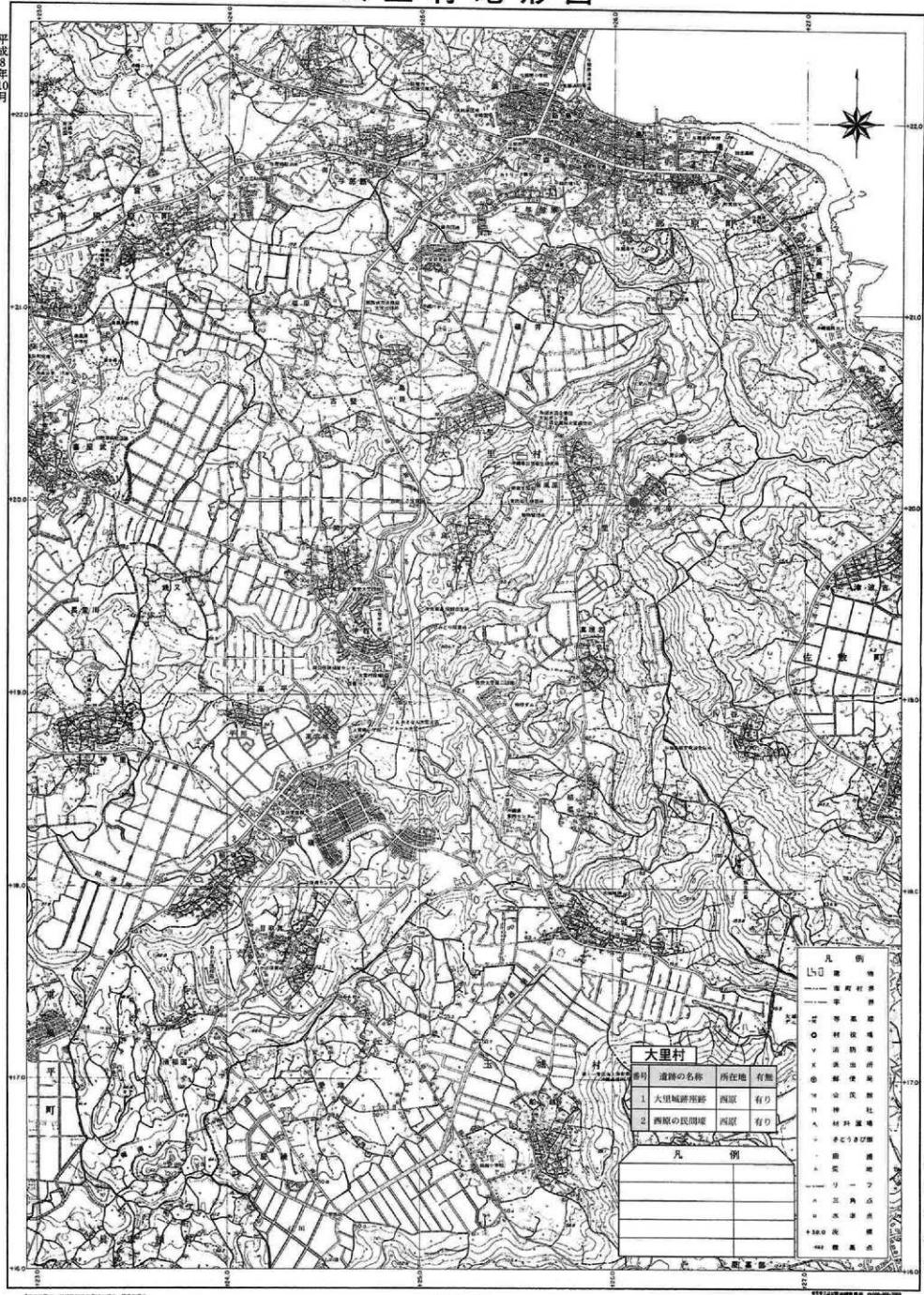
具志頭村役場経済課

糸満市地形図



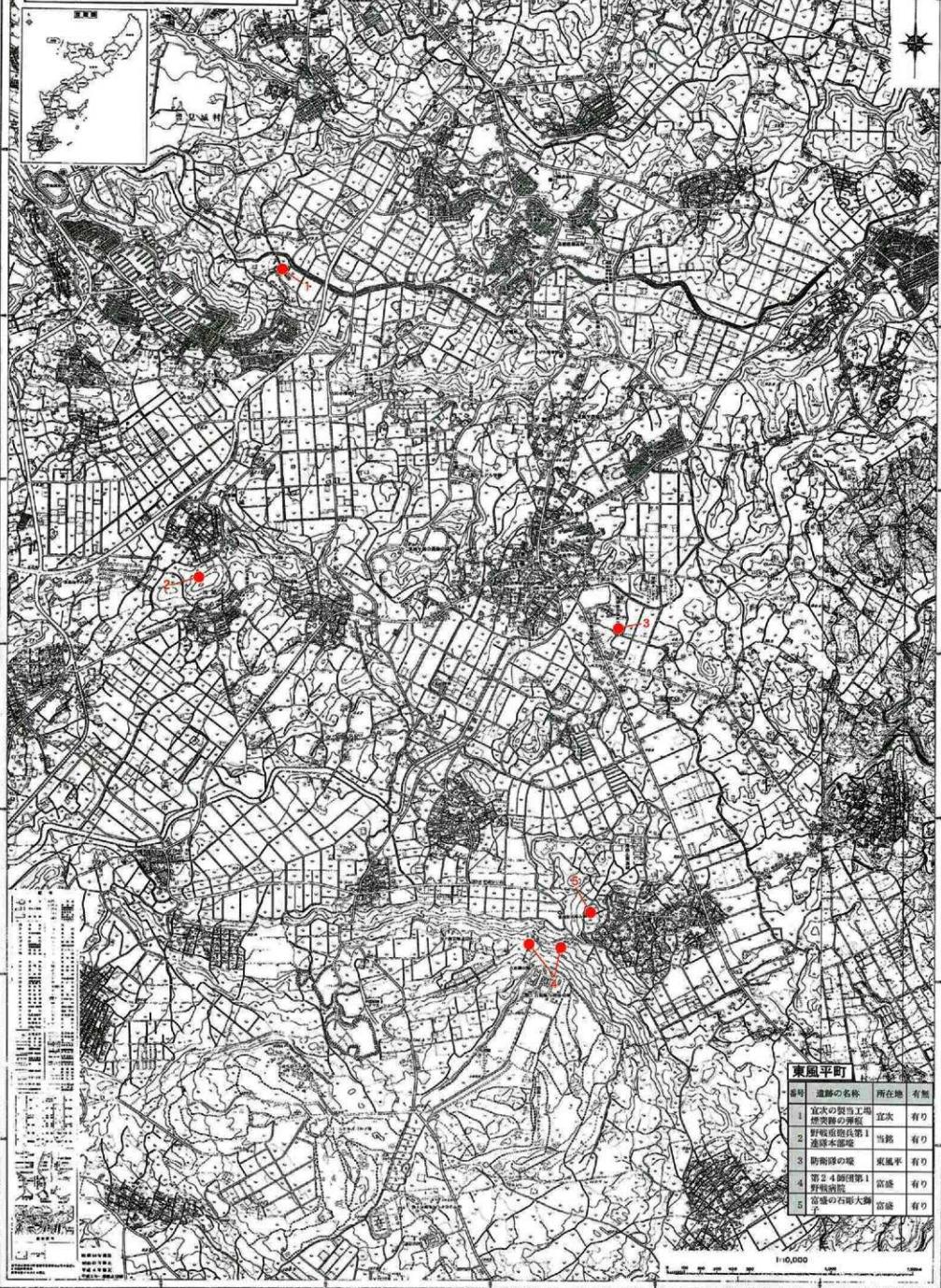
大里村地形図

平成8年10月



「この地区は、沖縄県知事の承認を得て、開発施行料 2,500 円の 1 の都市計画基準を整備したものである。」
(承認番号) 基認第 468 号。

東風平町地形図



系満市

順位	連勝の名称	所在地	有無	番号	連勝の名称	所在地	有無	番号	連勝の名称	所在地	有無	
1	庚辰毛ガマ	北平波	有り	46	シラタケの山	山吉	有り	91	山吉47番本浦坂	山城	不明	
	(タキツバガマ)				348番御二重坂				山城47番本浦坂	山城	不明	
	(タキツバガマ)								御前原48番本浦坂	山城	有り	
2	津幡接合の坂	丹波根	有り	48	タングサ	山吉	不明	92	丹波根49番本浦坂	山城	有り	
3	高麗山地跡の坂	丹波根	有り	49	アグナゾ	真栗里	有り	93	アグリーン坂	東京	有り	
4	高麗山地跡の坂	丹波根	有り	50	フラレーダイ	高栗里	有り	94	アンドンチー坂	東京	不明	
5	カーティガマ	唐波	有り	51	ワルツラム	真栗里	有り	95	赤司46番の坂	赤司	有り	
	(カーティガマ)				10番(延長坂)の坂				赤司46番の坂	赤司	有り	
6	武藏村山駅周辺 遊歩道	坂	有り	52	クーラーー	高栗里	不明	96	ひづりゆう徒	東京	有り	
	(武藏村山駅周辺 遊歩道)				11番(延長坂)の坂				防災林遊歩道坂	東京	有り	
7	底慶沼駆除 接続	底慶	有り	53	118番延長坂の 後の坂	高栗里	有り	97	底慶沼駆除接 続	東京	有り	
	(底慶沼駆除 接続)				55番(延長坂)の 後の坂				ミヤコウタケン	東京	有り	
8	フクジの坂	底慶	有り	54	5番・6番共回戻	高栗里	不明	98	ミヤギーー	ミヤ	有り	
9	前原の坂	唐波	有り	55	白梅の坂近くの 坂(上段)	真栗里	有り	99	ワイトロードの 坂(上段)	東京	有り	
10	山形駒ヶ岳坂	唐波	不明	56	白梅の坂近くの 坂(下段)	高栗里	有り	100	ワイトロードの 坂(下段)	東京	有り	
11	アンマーサーガマ	菅原	有り	57	スクランブル	高栗里	有り	101	山田町の坂	鬼城	有り	
	(アンマーサーガマ)				58番(延長坂)の 坂				スルガ井手坂の 坂	鬼城	有り	
12	クシタニ・ クシタマ	賀茂	有り	59	大象の坂	高栗里	有り	102	スルガ井手坂の 坂	鬼城	有り	
	(クシタニ・ クシタマ)				60番(延長坂)の 坂				高栗里の坂	鬼城	有り	
13	ナシム・サンシ	箕面	有り	58	ダグラーダマの 跡跡跡跡跡跡跡跡	真栗里	不明	103	高栗里駅西側のスカ	高栗里	有り	
14	アカマギシ	御平	有り	59	ランドンガマ、 ツバ内坂	高栗里	有り	104	高栗里駅のトチ	高栗里	有り	
15	タキツチャ	津波	不明	60	高見寺跡跡跡跡跡	高栗里	有り	105	吉川町下の 津波坂	津波	有り	
	(タキツチャ)				61番(延長坂)の 坂				吉川町下の 津波坂	津波	有り	
16	タクワン・シラ タ・ヨメタ	高見	有り	61	東京駅(東)・ 駿河原駅(東)	新町	有り	106	松坂坂	善福寺	不明	
	(タクワン・シラ タ・ヨメタ)				62番(延長坂)の 坂				善福寺駅近の 松坂坂	善福寺	不明	
17	間等山の綱篠坂	発坂	不明	62	ウスパーガマ	新坂	不明	107	馬鹿坂直近くの 延長坂	延坂	不明	
18	美園グラスク	嵯峨	有り	63	平野坂	新坂	有り	108	当院グラスク	嵯原宮	不明	
19	カマツシタ・小 坂	御坂	不明	64	シグナル山の坂、 カマツコ	新坂	不明	109	伊原第一外科病	(伊原)	有り	
20	くすのき山	嵯峨	不明	65	御茶屋坂	新坂	有り	110	伊原第二内科・脳	(伊原)	有り	
21	現久山中学校後 校舎の坂	嵯峨	不明	66	山3480番延長の 坂	新坂	不明	111	高坂後ろの横掛	(伊原)	不明	
22	ドントン・ガマ、 下川原坂	嵯峨	有り	67	アバタガマ	真栗里	育り	112	ウムニーガマ	米沢	育り	
23	福地の坂	米沢	有り	68	メーラー	真栗里	有り	113	シクシナ	木曾	有り	
24	御坂の坂	米沢	有り	69	アブマツ・サマ ドウカラ	宇江城	有り	114	クラグーーの 御坂	米須	育り	
25	照應クスク	照應	有り	70	フランコー ワントン	宇江城	不明	115	シーザーパー、 冒門有り自らの 御坂	米須	育り	
	(照應クスク)				71	クラグー (宇江城の坂)	宇江城	有り	116	飛越泡鳴坂 (武部御坂)	米須	不明
26	奈良原自然教育 施設	奈良原	有り	72	アンガー	伊敷	育り	117	シブゾウ・ シブ	美須	育り	
	(奈良原自然教育 施設)				73	千人塚 (アントニウガマ)	伊敷	育り	118	アマシソ	大度	育り
27	裁縫(白壁)	糸崎	有り	74	シラカー	伊敷	育り	119	大度高畠中橋筋	大度	育り	
28	白蛇の河原	糸崎	育り	75	タージタガマ	白蛇	育り	120	大度の高橋筋	大度	育り	
29	土舟	不育	不育	76	宇山東南側斜面	白蛇	育り	121	羽さつの南側 氣泡筋	大度	育り	
30	上の御蓮坂	糸崎	育り	77	かみの御蓮	白蛇	育り	122	羽さつの北側 氣泡筋	大度	育り	
31	現代化40周年 記念の坂	糸崎	育り	78	ウジタ・タク タ・タマ	伊敷	育り	123	サンシナ・ ガマ	大度	育り	
32	第24回新町 記念	糸崎	育り	79	ウジタ・タク タ・タマ	伊敷	育り	124	マヤン・坂	大度	不明	
33	ミーンシ-の坂	糸崎	育り	80	クラグー ニセ	伊敷	不育	125	アカシの坂、アカ シ・シジ	春季	不育	
34	井手の坂	糸崎	育り	81	トグラーー	伊敷	育り	126	アブマツ・ ウマリッシュ	春季	不育	
35	井手の坂	糸崎	育り	82	クマの坂	伊敷	育り	127	ワタマツイイ、 タマノイイ	春季	育り	
36	井手424番通 トーハガタ	糸崎	育り	83	森の坂	伊敷	育り	128	カーナーの 3番の坂	春季	育り	
37	牛の監視台	糸崎	育り	84	アカマツアブ、 アカマツモ	糸崎	育り	129	駕籠の坂	春季	育り	
38	牛の駒跡工場	糸崎	育り	85	糸崎第二外野牆	糸崎	育り	130	チカラ・坂、アガ リスナ・チカラの 坂	糸崎	育り	
39	大蔵の坂	大蔵	育り	86	糸崎第三外野牆	糸崎	育り	131	チカラ・坂、アガ リスナ・チカラの 坂	糸崎	育り	
40	芦のあら (山崎山街跡)	人蔵	育り	87	御殿のある 笠井の建物	小波瀬	育り	132	チカラ・坂、アガ リスナ・チカラの 坂	糸崎	育り	
41	島原(山崎山街 跡)	人蔵	育り	88	シガタガマ、 エーニ・ハジマ	名城	不育	133	義仁の第32郡 令官御坂	厚原	育り	
42	川端駅の留置	唐吉	不育	89	シタマツ	名城	不育	134	義仁の第32郡 令官御坂	厚原	育り	
43	因久グスクの 石垣	脚舟	育り	90	シタマツアブ	織姫	不育	135	義仁の第32郡 令官御坂	厚原	育り	
44	因久グスクの 石垣	脚舟	育り	91	シタマツアブ、 シタマツモ	織姫	不育	136	義仁の第32郡 令官御坂	厚原	育り	
45	因久グスクの 石垣	脚舟	育り	92	シタマツモ	織姫	不育	137	義仁の第32郡 令官御坂	厚原	育り	
46	因久グスクの 石垣	脚舟	育り	93	シタマツモ	織姫	不育	138	義仁の第32郡 令官御坂	厚原	育り	

玉城村

番号	遭跡の名称	所在地	有無	番号	遭跡の名称	所在地	有無	番号	遭跡の名称	所在地	有無
1	ウガシル(堤)	船橋	不明	48	鶴見岡跡地帯	前川	不明	91	ハナツダ坂	堀川	有り
2	ゾンクリクラ	船橋	不明	49	玉森岡(守田山)跡地	蒲原	有り	92	カシシヤギ門中の塚の森	志摩原	有り
3	カツラヶ原近くの遺跡場	船橋	不明	49	玉森商店の塚	鶴見	有り	93	真葉門中島前の塚	忠臣原	育り
4	(跡地)	海老	不明	49	ターガー	鶴見	不明	94	品川後の塚	志摩原	有り
5	糞糞貯蔵庫	船橋	不明	50	ターガーマグ	前川	有り	95	御殿跡を近くの後塚原	奥武	有り
6	船橋市内住民避難場	船橋	不明	51	第6 中学校跡地	鶴見	有り	96	虎島の福徳塚	奥武	有り
7	船橋小学校西側の塚	船橋	不明	52	第7 中学校跡地	鶴見	有り	97	アシジン塚	中山	有り
8	船橋の住民避難場	船橋	不明	53	第8 中学校の塚	鶴見	有り	98	カートン塚	中山	有り
9	フルダガラム	船橋	有り	54	第9 中学校指揮官跡地	鶴見	有り	99	カマサー塚	中山	不明
10	フルダガラムの跡地	船橋	不明	55	第9 中学校の塚	鶴見	有り	100	クールの塚	中山	有り
11	ヌメスモ-定期運送地帯	船橋	不明	56	大道原の跡地	鶴見	不明	101	伊佐麻呂の跡地塚	玉城	不明
12	山田川周辺防波堤跡地	鶴見	不明	57	大道原の跡地	前川	不明	102	川平田塚	玉城	不明
13	新川原	糸敷	有り	58	タコヅチ跡	前川	不明	103	集落南の隣地塚	五城	有り
14	糸敷塚(アツチラガタ)	糸敷	有り	59	テンコモグヘーの塚(吉田山)	鶴見	有り	104	外山田の跡地塚	五城	不明
15	糸敷駅附近遺跡の塚	糸敷	有り	60	穴穴	鶴見	不明	105	門原の跡地塚	五城	不明
16	糸敷駅跡塚	糸敷	有り	61	ハナンドーゲー	前川	不明	106	門原の跡地塚	五城	不明
17	糸敷駅跡塚	糸敷	不明	62	歩兵塚	前川	不明	107	皇室御宿塚の塚	五城	不明
18	上の山塚	糸敷	有り	63	鶴川 第1洞	鶴見	不明	108	新原の跡地塚	新原	不明
19	大城小星廻内塚	糸敷	不明	64	鶴川 第2洞	鶴見	不明	109	ヒンタゴー(裏)	新原	不明
20	等々安佐神道遺跡	糸敷	不明	65	鶴川の荒川避難場	前川	有り	110	新原の隣地塚	新原	不明
21	等々安佐御所跡	糸敷	不明	66	アバタガマ	前川	有り	111	飯田大澤深地塚	百名	不明
22	新原跡地跡	糸敷	有り	67	マジン酒	鶴見	有り	112	伊佐麻呂の跡地	百名	有り
23	新星廻内塚	糸敷	有り	68	次郎八郎山	鶴見	不明	113	伊佐良原の古墳	百名	有り
24	矢田川-經野	糸敷	有り	69	上空町防波堤の前	前川	不明	114	コンマーブ	百名	有り
25	笠置	糸敷	有り	70	上空町防波堤	前川	不明	115	外田原の跡地塚	百名	有り
26	猪俣御原跡地	糸敷	有り	71	大城と木戸岩後	糸敷	有り	116	猪俣の跡地	百名	有り
27	ヤンヒー(山)	糸敷	有り	72	天城好石庵後塚	糸敷	有り	117	百名塚	米須	不明
28	荷原塚	喜良原	有り	73	神谷原の古墳	糸敷	有り	118	マヤーガマ	百名	有り
29	ガングラーラブ	喜良原	有り	74	八久保下の布留原	糸敷	有り				
30	吉良原の塚	喜良原	有り	75	石巒の磯原	糸敷	有り				
31	クリター(海原)	喜良原	有り	76	山川の戦車砲	糸敷	有り				
32	シムラガラ(下鷹原)	喜良原	有り	77	大城城跡	糸敷	有り				
33	タチアブ(草)	喜良原	育り	78	クバ威裏	糸敷	育り				
34	テラガマ	喜良原	不明	79	仲代原の塚	糸敷	育り				
35	クサヤマ	喜良原	有り	80	水原の住民避難場	糸敷	不明				
36	アマジヨーニガマ	下鷹原	有り	81	山景塚	糸敷	不明				
37	アシヤガマ	箭張原	有り	82	クサヤマ(草)	糸敷	有り				
38	ケーンター	鏡原	有り	83	チナントウ(草)	糸敷	有り				
39	タチアブ(鏡)	鏡原	有り	84	チブトウウアブ	糸敷	有り				
40	ティーラガマ	鏡原	有り	85	ヒチナクブ	糸敷	有り				
41	マージガマ	鏡原	有り	86	ヤージヤマ(草)	糸敷	有り				
42	マージアブ	鏡原	不明	87	久松原の跡地	仲村塚	育り				
43	アルピミダ	南川	不明	88	久佐アシジ	仲村塚	育り				
44	掛舟原の塚	前川	不明	89	ヒカルガル	仲村塚	育り				
45	ゴジラ原(シナシナ)	前川	有り	90	マツニ川の塚	仲村塚	育り				

戦争遺跡分布図凡例

- 1 使用した地形図は南都地区各市町村発行の1,000,000分の1（調整図）を複製、転用した。
 - 2 遺跡一覧表の番号は、各市町村とも概ね北の字から南の字へと番号を並べており、分布図と一覧表の番号は対応している。
 - 3 遺跡所在地について、本文表記の番地は遺跡の中心部と思われる位置を示しているもので、所在地を限定したものではない。分布図上に示した範囲についても同様の意図である。
 - 4 遺跡の名称については、各市町村において差異があるので、ここでは、地元住民の呼称や、使用していた部隊名が判るものはそれを使用した。
 - 5 一覧表の名稱は方言名が多いためにカタカナ表記が多い。そのため地元の発音と異なるものが多くあると思われる。
 - 6 一覧表中の「有」は、遺跡の全部及び一部が現存することを確認できたもので、「不明」は、存在が明確にできなかつた遺跡である。
 - 7 遺跡のほとんどが、試掘調査、発掘調査によって範囲等が変わる場合があるので、近辺での開発工事については当該市町村教